

---

# 我が家のお猫様！

銀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我が家のお猫様！

### 【Nコード】

N0746W

### 【作者名】

銀

### 【あらすじ】

古人、曰く。孫家には守り神がいる…。

えっ？ 守り神って俺、ですか…。

俺って神様じゃなくて…今はねこ、なんだけど…。

とある理由で天界から堕ちてきた少年。彼はこの乱世で時にのんびり、時にハードに生きていく……ねこだけ…。

## ぶろろーぐ。(前書き)

はじめて小説を書いてみます。  
拙い文章ですが、見てもらえたとうれしいです。

ぶろろーぐ。

ここはこの街で一番眺めがいい。  
俺のお気に入り場所だ。

下には賑やかな街の風景が見渡せる。  
人々はみんないつもと変わらない笑顔を浮かべ、今日も暮らしているようだ。

それを上から見下ろしながら、欠伸を一つ。

上には燦々と照りつける太陽と白い雲が浮かんでる真っ青な空。  
そよそよと吹く風が涼しくて、ちっとも暑さを感じさせない。

まだお昼寝には早い時間だけど、瞼が重くなって来た…。  
けど、今はまだ寝るわけにはいかない。

その眠気を覚ますように空を目を細めて見つめる。  
いや、正確にはその先にある場所を見つめた。

そう。あの雲の…この空の…ずっと先。  
ずっとずっと先に俺の故郷がある。

『天』

故郷をこの国の人々はそう呼ぶ。

俺はそこから堕ちてきた。いや、堕とされた。持っていた力を全部、封印されて…。

そういえば、みんな元気なのかな…。

そんな風に故郷の友達のことを頭に浮かぶ。

あつ、あいつらも別のところに堕とされたんだっただけ？  
少しはおとなしく…。

…だめだ。あいつらのそんな姿が想像できないぞ…。  
むしろ楽しんでそうな予感がヒシヒシと…。

……………。

ま、まあ、元気なのはいいことだし…。

…あんまりバカな騒ぎを起こしていないといいな！。

佐伯先生…また胃薬飲んでるのかな？

少し浮かんだ嫌な考えを振り払うように頭を振っていると、

「蓮<sup>れん</sup>、どこにいるの？」

「れ〜ん〜、ごはんだよ〜！」

俺のことを呼ぶ二人の声が聞こえてきた。

真下を見ると、俺を探している桃色の髪の二人の姿が見えた。  
どうやら昼飯のようだ。

俺はすぐに登っていた場所から飛び降り、二人の下へと向かう。

「あつ！　ねえさま、いた！！」

「蓮！！」

俺を見つけた二人はその顔にとびっきりの笑顔を浮かべた。

「もう蓮？　一体どこに隠れてたの？」

二人の内、背の高い方の活発そうな女の子…雪蓮がそう聞いてくる。

別に隠れていたわけではないんだけど、結構探させてしまったみたいだしな…。

俺はぺこりと頭を下げる。

「まったく。蓮がいなくなっただけって、蓮華が心配して泣きだそうとしてたわよ？」

「ね、ねえさま！」

雪蓮にそう言われて慌てる、人前だと少し大人しくなる女の子…蓮華。

恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして雪蓮に詰め寄っている。

雪蓮はそれを楽しそうに笑いながら小声で何か蓮華に言っているみたいだ。

この二人は、今の俺の家族でこの家の大事なお姫様だ…。  
いずれは呉の王様にもなるんだろうな。

俺は昔からずっと遊んであげたからか、すごく懐かれてる。実は寝ないで我慢していたのも…二人のためだったりする。まあ、たぶん昼飯を食べたらすぐに寝ちゃうけどね…。

今日は満月の夜だし、今のうちにたくさん寝溜めしておかないと。

「さてと、母様達も待つてるし…戻るわよ!」

「はい! れん、いくよ?」

そう言つて俺を両手で抱きかかえる蓮華。

四歳の女の子に軽々と抱きかかえられる俺。これにももう慣れたもんですよ、はい。

えっ? なんで抱きかかえられるのかつて?

答えはすつごく簡単。

「蓮? 聞してるの!」?

「にゃんっ!」

「ね、ねえさま! そんなにつよくひげをひっぱったら…」

だつて今の俺の姿は…。

「「あつ…」」

「にゃー!!」

猫、なんだもん。

## ぶろろーぐ。（後書き）

見ていただいてどうもです。

誤字脱字、間違っている箇所などあれば指摘していただけるとうれ  
しいです。

よろしければ感想などもいただけると作者の励みになります。

## 第一話　ねこライフ。

俺の朝は早い。

夜が明けて、空が白んでくる頃には起き出し、寝台から出る。実はこれがなかなか大変だったりする。

理由は、今も俺を抱き枕かぬいぐるみのように抱きしめていらつしやる、孫家の次女さんだ。

雪蓮ならば身体がもう大きくなったので、隙間から楽々と抜け出せるのだが、蓮華はまだ身体が小さいので、丁度いい感じにロックみたいになって抜け出すのに大変苦労する。

しかもこの子は俺がいないと感じると、起き出してくるのだ。そして俺を探し始める。

以前にそれを何度かやられたので、母親である孫堅こと…水蓮にぬいぐるみを用意して貰って、それを俺の身代わりにすることで脱出を図っている。

孫家のねこは身代わりの術が使えるのだよ……。  
必須技能ともいえるな。

ささつと城を抜け出し、そのまま港へと急ぐ。  
呉には海がある。

そう、つまり…。

いつでも新鮮なお魚が食べれるということだ!!

「おっ？ 猫神様じゃないか…。ほら、さっき取れたばかりの魚だよ！」

「にゃ」

ここの人たちは俺が来るとこうしてお魚を分けてくれる。でも、これはこの人に限ったことではなく…この街の人、みんなが結構くれたりする。

なんでも俺はこの街のマスコットの存在なんだとか。もちろん、ファンサービスは欠かせない！

「おゝ!! 今日もいい毛並みしているな！」

そう言っで、俺の頭を撫でてくる漁師さん。大きくてごつごつした手だが、この手がたくさんのお魚を取って来るのだ。

少しくらい頭がグラグラするのは耐えようじゃないか。これでも前よりはうまくなったんだから…。

朝食をこうして済ませた後は、ゆっくり歩きながら城へと戻る。

食後に激しい運動はしちゃダメだね。

もう多くの人々が活動を始めて、どんどん賑やかになって行く街。  
今日も頑張ってください。

そんな光景を眺めながら、城内に入る。

そして、あいさつをしてくれる侍女たちに返事を返しながら、悠々と廊下を歩いていると。

「蓮ー！ おはよー！」

「あら、今日はいつもより早く戻ってきたのね」

「…おはよう」

孫家の親子に遭遇した。

どうやら今から三人で朝食のようだ。

「にゃー」

俺もあいさつを返しておく。

「よつと」

俺を軽々と抱える雪蓮。

そして…。

「ん？ なんか魚のにおいがするわね…。蓮、また外で朝ごはん貰ったの？」

「にゃーん」

まさにその通りなので、返事をする。

お魚、最高！

「魚ってことは、港まで行ったのね…。結構ここから距離があるのに…」

呆れたといった感じで俺を見てくる水蓮。

…わかってないな。

その距離を頑張ればおいしいお魚が食べれるんだぞ！  
行くでしょ！ 普通！

猫まつしぐら！！

抗議の目線を水蓮に向けていると、さっきから視線を別のところから感じる。その方向を見る。

「……………」

そこにはじー、と俺を見つめる蓮華がいた。

う、うん。見るからに不機嫌だ…。

これはひょっとして、いやしいでも…。

「蓮華が蓮がいなくなったーって泣いてたわよ…」

「宥めるの大変だったんだからね…。貸し一っ」

小声で俺にそういつてくる似たもの親子。

貸し一つって汚いな、さすが水蓮、汚い！  
てかやっぱし、俺の所為なんですか…。  
はぁ。

「……………」

未だに俺を無言で見つめる蓮華さん。

正直こわいです。

これは将来、病んでしまったりしないよな…。  
俺はそこはかとなく不安になりました。

不機嫌な蓮華ではありましたが…。  
そこはこの蓮さん、伊達に何年も飼い猫をやっていますよ。

足にすりすり、お腹を見せて撫でくれポーズ、喉をゴロゴロと鳴らす、など飼い猫に必須の108の技を駆使して、うまーく、じょーずに甘えてみせれば、あら不思議。

いつの間にかすっかり機嫌を直して俺を撫でている蓮華の出来上がり！

ふっ、ちよろいな…。

俺にかかればこんなもんさ。

すみません、うそです。

結構しんどかったです。

何度もやりたくはないです。

自分調子に乗って、すみませんでしたー！。

そんな感じで少しグツタリと昼飯を食べ終え、ゆっくりとお昼寝で  
もしようとするが…。

「蓮！ 遊ぶわよ！！」

今度は大変元気な長女に捕まりました。

こうして始まりました。

雪蓮VS俺、蓮華連合とのかくれんぼ対決。

俺はまあ、隠れた雪蓮を探す蓮華のサポートを担当するだけなんだ  
けどね。

この自慢の五感をフルに使って見つけてやるぜ。

では、スタート！！

「れん！ どっち？」

「にゃっ！（右っ！）」

蓮華の腕に抱かれながら、においのする方を指差す。

それに蓮華は頷いて進んでいく。

今の気分はオペレーター。

次の通路を右、ここはまっすぐで、もう一度右だ……などなど様々な指示を蓮華に出し、どんどん進んでいく。

そして、部屋の前でにおいが途切れている所を見つけた。  
つまりあの部屋の中に雪蓮はいる！

「にゃ、にゃ！（うう、うう！）」

「このへやにいるのね。いくよ、れん」

そして、部屋に突入。

しかしこの部屋は倉庫だったみたいで……すぐには見つからなかった。

「きっと、ねえさまはどこにかくれてる。さがすよ、れん！」

「にゃー！（ラジャー！）」

こうしてしらみつぶしに探していると、一番大きな木箱からわずかに音が鳴った。

そこかっ！

「にやつ！」

俺の指示で蓮華がすぐさま木箱のフタを開けると…。

「ねえさま、みーつけた！」

「ありやりや、見つかったか〜」

そこには予想通り、雪蓮がいた。

この勝負、俺たちの勝ち！！

さてと、結構頑張ったから疲れたし、お昼寝を……。

「なら次は私が鬼ね。蓮華、隠れていいわよ」

「うん！」

……まだまだ続くみたいです。

ううう。ドナドナ…。

結局、夕飯まで遊びまわることになった。

確かに楽しかったけど、めっちゃ疲れた〜。

そして今はすごくねむい、です。

水蓮の膝の上に座って頭を撫でられていると、だんだんと瞼が落ち

てきた。

「あらら、もう眠いの？」

「にゃー」

うん、もう限界。

「ふふふ。仕方がないわね……おやすみなさい、蓮」

おやすみ……。

## 第一話　ねこライフ。（後書き）

見ていただいてありがとうございます。

まだまだ原作ははじまりません。

スロースタートですけど、お付き合い頂けるとありがたいです。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。あと感想などもお待ちしています！

## 第二話　お風呂でパニック！？

お風呂。

それは、身体の汚れを落とせる素晴らしいもの。

お風呂。

それは、一日の疲れを癒してくれるオアシス。

お風呂。

それは、命の洗濯。

お風呂。

それは、自分だけの至福の時間。

様々な言葉はあるが、結論をいえば…。

お風呂はすごくいいものである！！

かくゆう俺も大好きだった。

長い時は一時間とか普通に浸かってたし…。

温泉とかもいいよね。露天とか、景色最高だし。

そう。大好き、だったんだよ？　昔は…。

だけど、今は…。

「蓮華！　そっちにいったわよ！！」

「うん！」

「にゃー！」

お風呂なんか大っ嫌いだー！！

どうも、蓮です。

ただ今、逃走中であります！

「待ちなさいー！」

「れん！」

後ろから追いかけてくる雪蓮から逃げ、前に立ちふさがって、捕まえようとしてくる蓮華の脇を抜け、廊下を俺はひた走る。

ふっ、今の俺は誰にも止められない、止まらない「いたぞー！！」  
……ぜ…？

余裕の表情で逃げていた俺の目には、こちらを指差す兵士の皆さま。  
ここは緊急停止だ。

俺が止まったのを見て、こちらに向かってくる兵士さん。  
その数を見て、冷や汗が出た。  
いやいや、何人いるんだよ…。

慌てて、逆方向に引き返そうとするが…。

「蓮！ 覚悟しなさいー！」

「もう、にげられないよ」

そつちには二人の姉妹と数人の兵たちで塞がれていた。

「ご覚悟ください、蓮様」

いや、あの、兵士のみなさんたち？ あんたら他の仕事をしようよ…。

「これも孫堅様の命令ですので…」

あー、さいですか…。

「さいなのです」

てか心読むなし…。

お前はエス…「エスパーではありませんよ？」

……。もはや何も言うまい。

しかし、マズイ。これは非常にマズイですよ！  
今の俺にはオボロガードは使えないというのに…！

そんなことを考えている間にもどんどんと距離がなくなってきた。  
くっ、仕方ない。ここは一か八か、正面突破だ！  
俺がそう考えた、その時。

「みんなして一体、何をやっておるんじゃ？」  
救いの神はやってきた。

おお、祭！ 今、君が輝いて見えるよ！！

「ん？ なんじゃ？ 蓮、また追いかけておったのか…」

祭は囲まれている俺を見つけると、ひょいと両手で持ち上げてそう聞いてきた。

「にゃー！」

俺はそれに頷く。

そうなんだよ！ また、なんだよっ！

ちよっと聞いてよ、祭姐さん！！

「全く…こんな人数で何をしていると思えば…」

そうだよ！ 三十人はいくらなんでも多すぎるだろ！？

もっと言ってやってくれ、姐さん！

「孫呉の兵ならばせめて、半分の人数で捕まえて見せんかつ！」

「…すみませんでした」

祭の一喝で一斉に頭を下げる兵士たち。

えっ？ ていうか怒るとこ、そこなの？

追いかけるなよ、とかじゃなくて…？

俺の疑問を余所に、祭は話を続けていく。

「まったく、こんなに大騒ぎにしようて。策殿、権殿。少し騒がしすぎますぞ？」

「うつ、ごめん」

「ごめんなさい…」

雪蓮と蓮華も祭に謝る。

うんうん、さすが姐さんだ。  
さっきのは気のせい……。

「大体、相手はこの蓮ですぞ？　もっと頭を使えば、捕まえるのは簡単だろうに……」

…じゃない、だと！？

「本当に！？　そんな方法があるの？」

「もちろんじゃ。簡単に捕まえられるわい」

「ふん。じゃあ、祭のお手並み拝見ね！」

あれー？　これって俺、また逃げなきゃいけないパターン？  
マジですか…。

けど…簡単に、ねえ。  
言うじゃないか…。

追加ミッション：祭の魔の手から全力で逃れる！　が発生しました。

勝利条件：制限時間内までに捕まらないこと。

敗北条件：祭、雪蓮、蓮華もしくは兵たちに捕まること。

受ける

受けない

祭！ 君の挑戦、俺は受けよう！！

ミッションを受諾しました。

カウントを開始します。

5、4、3、2、1……0！

では、ミッション、スタート！！

さあ、始めようか！

「にゃー！！」

「ほら、逃げようとしないの！」

どうも、蓮です。

負け犬、ならぬ負け猫の蓮です。

もうお分かりかもしれません……。ミッションは失敗しました。まさか、あんな手を使ってくるとはあの蛇さんもびっくりだよ……。あれが孔明の罠って奴です。

「何言ってるのよ……。焼き魚のおいに釣られて、のこのこやってきただけじゃない」

「うん、すごくかんたんだった。こんどからはあのさくせんできーうね、ねえさま！」

ぬぬぬ。

なんと卑怯な……。

ていうか、心を読むな！

「まあ、いいじゃない。兵士にも読めるんだし、私たちが読めても……」

「れん、わかりやすい」

いや、全然、良くないんだけど……。

そんなこんなで結局、風呂場に連行されました。

「ふふふ、さーて。今日は隅々まで綺麗にしてあげるわよ」

「わたしもがんばる！」

目をキラキラと光らせている雪蓮。

小さく拳を作って、気合いを入れている蓮華。

はぁー、もう諦めよ。

やる気満々な二人を見て俺は深くため息をついた。

くねこ、洗浄中く

「はい、終了く。蓮華、もう蓮を連れて行っていいわよ?」

「うん!」

身体の隅々を洗われ、ぐったりした俺を抱きかかえ湯船へとむかう蓮華。

もうやめて、私のライフはゼロよ…。

ううう。

毛が…。毛が…。ベチョツとして気持ち悪い…。

だから、嫌なんだよな…。

濡れるとすぐ体温下がるし…。

すぐに乾かないし…。

「れん? だいじょうぶ?」

俺の方を心配そうに見てくる蓮華。

「にゃー」

俺はそれに弱々しく返事をする。

全然、大丈夫じゃないです。

けど、逃げる元気もないくらい疲れてます…。

「そっか。あとで、ちゃんとふいてあげるからね」

「にゃー」

ありがとう…。

蓮華…。君、ええ子やな。

…なんて言うと思ったか！

次は！ 次こそは逃げ切って見せる！！

そう心に誓う、蓮なのでしたー。



## 第二話　お風呂でパニック!?（後書き）

第二話、終了です！

やっと思さん登場でした。

これからは他の人も出していききたいなと思っています！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

### 第三話 見た目はねこ、頭脳は大人…。その名は、蓮！

ねこ、それは仕える者。

ねこ、それは傳く者。

ねこ、それは主の生活すべてをサポートするフォーマルな守護者。

そう。これは少女たちのため、命を賭けて戦うねこの超コンバットバトルストーリーなのである。

中庭にある屋根つきの休憩所。

そこには二人の少女と一匹の猫の姿があった。

白い猫は盤の上を真剣に見詰めた後、自らの主に指示を出す。

「にゃ！」

「わかったわ。ここね！」

「なっ！ 今度はそうくるのか…」

ども、蓮です。

ただいま、雪蓮に駒を動かしてもらって、冥琳と将棋で勝負しております。

これに勝てば今日の夕飯はお魚なのです！！

俺、張り切っちゃいますよー！

切っ掛けは俺がのんびりと城内を歩いているときのことだった。  
中庭に行くと聞きなれた声が聞こえてくる。

「あー、また負けたー」

「ふふふ。まだまだだな、雪蓮」

近づいて行ってみると、どうやら雪蓮と冥琳が将棋を打っていたみたいだった。

盤を見てみると…。雪蓮はほとんどの駒が取られてしまっていた。

雪蓮の勘も将棋には効かないんだなー。

てか、将棋なんてもう何年も打ってないな…。

そう思っ、自分の手を見てみる。

……………。

ピンクっぽい肉球と出し入れが出来る爪があった。

これじゃあ駒がもてねーよ。

はあー、とため息をついていると…。

「あら？ 蓮じゃない」

「ん？」

俺の姿に二人とも気がついたようだ。

早速、雪蓮に抱きかかえられる。

そして、俺を見ると何か思いついたような顔をした。

「あつ、そうだ！ 冥琳、もう一度やりましょ」

「ああ、別にかまわんが……」

「あと蓮も一緒にやるけど、いい？」

「蓮が…？ まあ、いいけど…」

冥琳が怪訝そうな顔をしながら俺を見てくる。

まあ俺、ねこだし。当然かな…。

「蓮…。もし冥琳に勝ったら、今日の夕飯は魚にしてあげるわよ」

そう俺に小声で言ってくる雪蓮。

将棋でねこに頼るとは…。

あー、これが猫の手も借りたいって奴なのかな…？

しかし、お魚のためなら…。

やってみせましょう！ マイロード！！

「にゃん！」

俺は力強く頷いた。

「よし、ならもう一度勝負よ！ 冥琳！」

と、まあそんなこんなで頑張ってるわけなんですが…。

うん、冥琳強いね。

とても八歳とは思えないよ…。

俺が小さいころとは比べ物にならないくらい冥琳は強かった。  
これなら、雪蓮が苦戦するのも頷ける。

けどな…。

まだ俺の方がもう少しだけ強い！

「にやっ！」

これで王手だ！！

「さあ、冥琳。貴女の番よ？」

「うぐぐ…」

雪蓮が余裕の表情でそう言う。  
対する冥琳は悔しそうな顔をしながら、盤を見つめている。

そして…。

「…参りました」

「やったー！ 冥琳に初めて勝ったわー！」

冥琳の降参宣言を聞くと、雪蓮は俺を上高く持ち上げてすごく喜びます。

俺もすごくうれしいです。これでお魚ゲットだぜー！！

ただ…雪蓮…。

勝ったのがうれしいのはわかるけど…あんまり振りまわさないで…  
…目が…目が…回る。

〈SIDE 冥琳〉

うれしそうにはしゃいでいる雪蓮に振りまわされ、グッタリとして  
いる蓮を見て私はため息をついた。  
負けた…。猫に負けた…。

そういえば母さんが昔、蓮に将棋で負けたって言ってたわね。  
正直、冗談だと思ってたんだけど…。  
実際に負けたしな。

はあ。

しばらく落ち込みそうだ…。

「冥琳？ 何、ため息をついてるのよ？」

「…いや、猫に負けたのが、少しな…」

「ふふん、すごいでしょ。うちの蓮はすごく賢いのよ」

そう言つて、雪蓮は膝の上に座っている蓮を撫でていた。蓮は大人しくされるがままになっている。

頭を撫でられると目を細めて、首の下を撫でられるとゴロゴロと喉を鳴らす。

その姿はともかわいらしくはあるが…。

やっぱり何度見ても普通の猫にしか見えない。

それが、あんなにこつちの手を先読みしてくるとは…。

とてもじゃないが、猫とは思えん。

まあ、街では猫神様なんて呼ばれて親しまれているし。

あと私たちよりも永く生きているらしい。

前に聞いた何百年も生きているというのはさすがに嘘だろうけど…。

私がそんなことを考えていると、いつの間にか蓮が目の前にいた。

「にゃ」

蓮は私の顔をその深紅の瞳で見つめて、首を傾げながらかわいらしく鳴いた。

私が手を差し出すと、それをペロツと舐め、頬をこすりつけてくる。

か、かわいい…！

私は思わず笑顔になり、蓮を撫でた。

蓮はゴロゴロと喉を鳴らしながら、なおも甘えてくる。

蓮…かわいすぎるぞっ！

私ももつと優しく蓮を撫でてあげる。

ああ、なんか蓮に負けて落ち込んだことも、蓮の不思議さもどうでもよくなつて来たな…。

いいじゃないか、蓮はこんなに可愛いんだから…。

「あらら、あの堅物の冥琳も蓮の前では形無しね」

私の顔を見て雪蓮が笑う。

まったく、私だって可愛いと思うことはあるんだぞ。

しかし、本当にかわいいな。

あっ、そうだ。

蓮を家に連れて帰ろう。

「堅物は余計だ。なあ、雪蓮…」

「んー？ 何？」

「蓮を私にくれ…」「蓮はあげないわよ」…そうか…残念だ」

本当に、残念だ…。

仕方がないな。

今、目一杯愛でるとするか…。

それから私は私と雪蓮の二人で、夕飯までたくさん蓮を可愛がった。  
蓮は少しグツタリしてたけど…まあ、大丈夫だろう。

その日の夕飯の時。

好物に見向きもせず爆睡している猫を見て、多くの人が心配した  
というのはまた別のお話…。

第三話。見た目はねこ、頭脳は大人…。その名は、蓮！（後書き）

第三話、終了です！

今回は冥琳でしたー。

どうでしたでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では次回にお会いしましょう。

第四話。 ねこ、たたかう。(前書き)

今回は少し悲しいお話です…。

#### 第四話。ねこ、たたかう。

負けられない戦いがある。

譲れないものがある。

護りたいものがある。

何もそれは人間に限った話ではない。

それは俺たち、ねこだってあるんだ…。

これは悲痛な運命と戦った男の…いや、ねこのお話である。

今でも思い出すと震えちまう。

あれは猫なんかじゃねえ…。そう、虎だ…。まるで虎だった。

-----目撃者A男さんの証言。

すごかったですよー!!

まさに一騎当千!

彼こそ真の……三国無双です!

――――目撃者B子さんの証言。

猫神様、強くてカッコ良かった。

――――目撃者Cくんの証言。

その日、彼はすごく機嫌が良かった。

今日の昼食にお魚が出たし、その後、二人の姉妹にブラッシングもしてもらった。

先日、水蓮が三女を出産するといううれしいニュースもあり、そして何よりここ連日続いていた雨が止み、今日は晴天なのである。

そんなわけで彼は猫のくせに歌を歌いながら、散歩していた。

「にゃ、にゃ、にゃ、にゃあーにゃあーにゃあーにゃあーにゃ、にゃ、にゃ」

そう、本当に機嫌が良かったのだ、この時までには…。

「にゃ？」

街の子供たちに撫でられ、老人たちに拝まれ、お店の人たちに食べ物を買う。

そんな風に街を歩いていていた俺は路地裏で、ある奴らに遭遇した。

飼い猫とは反対の位置にいる、野良猫たちである。

もともと、毛が真っ白で目が真っ赤というアルビノ系のねこである俺は、非常に他の猫から絡まれやすい。

やはり、どうしても目立ってしまうしな。

しかし、そこは昔からこの街、建業に住んでる俺。

この街の野良猫のボスとは仲がいい。

だから、野良たちがケンカを売って来るはずがない…。

そう、思ってた時期が俺にもありました。

「ウウウウ」

「フー、フー」

何やら戦闘態勢に入っている野良猫たち。  
仕方がないので、

たたかう

にげる

まほう

はなす

まずは話しかけることにした。

注意：ここから先は猫語となっております。傍から見れば、にやー、にやー言ってるだけです。

「おい。お前ら、一体どうしたんだ？」

「うるさい！ この悪魔め！ ここで死ぬお前に話すことなんか何もない！」

「お前の討伐命令が出たんだ、悪いが死んでもらうぞ」

猫Aは言わなかったが、猫Bが事情を話してしまった。  
大丈夫か。その連携のなさで…。  
てか悪魔とかすつごくく久しぶりに聞いたんだけど…。

「…討伐命令ね。穏やかじゃねえな、ブンタの奴がそう命令したの

か？」

一応、あいつとは杯を交わした仲だし、信じられないんだが…。俺が猫どもに問う。

「……………」

しかし奴らは何も言わない。  
何か事情があるのか…？

「だんまり、か」

俺がそう呟いた瞬間に、もう一匹の猫が飛び掛かってきた。

……………この…身の程知らずがっ！！

「はぁ、はぁ、はぁ」

俺は街を走っていた。

急げ、急げ、急げ！！

人々が慌ててる俺を見て驚いていたが、それを全部無視して駆け抜

けた。

クーデター。

簡単に言うとそれが起こった。

どうやらNo.2だった、ギンが反旗を翻したみたいだ。

ギンはその冷酷さで有名だった猫だ。

一応、ブンタに従ってはいたが、ずっとチャンスを狙っていたのだろつ。

そんなことを考えながらも、俺は目的地へ向かう足を止めなかった。そして、辿り着く。

人間がほとんど入ってこないその場所に…あいつはいた。

…傷だらけの姿で。

「ブンタ！」

俺はブンタに駆け寄り、容体を見るが…酷かった。

全身引つ掻き傷だらけで、毛玉も飛び散っている。そして首には一番大きくて深い、噛まれた傷があった。

…もう永くはない。そう思った。

「ブンタ！ おいつ！ 聞こえるか！？」

「ううう。れん、にい？」

俺が再度呼びかけると、ブンタは焦点のあつてない目で俺を見て、

俺の名を呼んだ。

「ああ、蓮だぞ！　しっかりしろ！！」

「…蓮にい…頼みがある…んだ。俺の…俺の息子を……」

意識の戻ったブンタに俺はさらに声をかける。

すると、ブンタは弱々しい声でそう言ってきた。

息子…？　確かコタロウ、だったか…？

「息子がどうかしたのか…？」

「今、ギンの奴…に捕まってる…んだ。頼むよ、蓮にい…。俺じゃあ…無理だった…。あいつを…助けて…やって…くれ…」

弱っているブンタは俺に必死に懇願する。

自分の息子を助けてくれって…。

「…わかった。この兄ちゃんに全部任せとけ！」

それに俺は大きく頷き、そう言った。

弟分の最期の頼みだ、もちろん聞くさ…。

「へへへ、あり…かと…蓮…にい……………」

ブンタはそれを聞くと、笑顔を浮かべた。

子猫の時からちっとも変わらない、あのとても無邪気な笑顔を…。

そして、静かに目を閉じた…。

「…………おやすみ、ブンタ」

〈SIDE雪蓮〉

「っ！」

冥琳と話をしていると突然、蓮の鳴き声が聞こえたような気がした。いつもとは全然違う鳴き声が…。

「ん？ どうしたんだ、雪蓮？」

「すごく怒ってる……そして、それ以上にすごく悲しんでいる……」

どうしたんだろう…？

気のせいじゃないって勘が言ってる。

「雪蓮、何を言っているんだ？」

「蓮よ。蓮が泣いてるわ」

「あの蓮が？ ……またいつもの勘か？」

「ええ、それに声が聞こえたの…すごく悲しそうな声が…」

そう言って私は窓から外を眺める。

蓮が帰ってきたら、頭を撫でてあげよう。

だから無事で帰ってくるのよ、蓮？

〈SIDE 水蓮〉

「かあさま…れんが…」

「ええ、泣いてるわね…」

新しく生まれた娘、小蓮を寝台で抱えながら、横に付いている蓮華の頭を撫でる。

蓮の悲しい声を蓮華も聞いたみたいだ。

「だいじょうぶかな？」

「ええ、大丈夫よ。だって蓮は守り神だもの…」

「…まもりがみ？」

きょとん、とした蓮華の顔を見て、笑ってしまった。

あれ、守り神の話は前にしなかったかな…？

「ええ、守り神。前に話さなかったけ？」

「ううん。きいたことはあるけど……それが、れんなの？」

ああ、蓮だってことは話さなかったんだったわね。  
今、思い出したわ。

「そうよ。私たちを何百年も守ってくれている神様なの」

「れん、すごいんだね！」

まあ、今はただの猫なんだけどね……。  
でもいつかはこの子も会えるでしょう、本当の蓮に……。

そう思いながら、私はまた蓮華の頭を撫でた。

〈SIDE 蓮〉

俺は野良猫がたくさん集まっている広場にやってきた。  
奥の方にはコタロウがいる。

「来たな、悪魔め……」

俺をたくさんの数の猫が囲んで来る。  
その中で、少しだけ身体の高い灰色の猫…ギンが俺を見てそう言  
った。

悪魔…。

五年くらい昔に俺とブンタの二匹で、こちらで悪さをしてた野良  
猫達をぶっ飛ばした時についた俺の渾名だ。  
今、思えばすごく懐かしくも感じる。

「この数を相手に一人で勝てると思ってるのか？」

「……………」

「へっ！ こいつ、俺らにビビってやがるぜ！」

おっと、昔のことを考えてたら…話が進んでたみたいだ…。  
なぜかギンも周りの猫たちもバカ笑いをしている。

「どうせブンタと同じでお前も大した事ねえんだろ…？」

「違いねえ。あいつ、息子を見せた途端に大人しくなったしな」

折角、俺がさ…。  
違うことを考えて……………。

「お前ら、そいつもブンタみたいにやっちゃまうぞ…！」

そのギンの言葉で囲んでいた猫たちが一斉に俺に向かって来る。

このどうしようもない怒りを抑えてたって言うのに……！

「「「「「死ね！！」「」「」「」

もういいか。

限界だ……。

「……なめるなよ、この小僧どもがっ！！！！！！」

周囲に俺の咆哮が響き渡った。

戦いが終わった……。

俺の周りには野良猫たちが倒れこんでいる。

致命傷の傷は付けてない。

殺す気はもともとなかった、そんなことをしてもブントは喜ばないからだ。

「今度、コタロウに何かしてみろ…お前ら、全員噛み殺してやる！」  
俺はそう言い残して、コタロウのもとに向かった。

「誰、ですか…？」

「俺か…。蓮だ」

俺はコタロウに名前を教えてやる。  
あれ？ この状況、前にどこかで…。

あつ、そうか。

初めてブントと会ったときに似てるんだ。

それだからだろうか…。

「蓮、さん…」

「……。別にさんづけはしなくていい。俺のことは…蓮に…とでも呼んでくれ」

コタロウにそう言ってしまったのは…。

夜も更けきつた頃、俺は城に帰った。

静かに部屋に入ると、水蓮が起きていた。

どうやら俺の帰りを待っていたようだ。

「遅かったわね…。頑張つてあの子たちも一緒に待つてたんだけど…」

視線を向けると二人で仲良く寝ている姉妹がいた。

幸せそうに寝ているみたいだ。

それを眺めていると…。

水蓮が俺を持ち上げて膝の上に置き、俺を撫で始める。

「お疲れ様…。今日は色々あったみたいね…」

ああ、あったよ。

うれしいことも悲しいことも…。

一つの出会いと一つの別れがあったよ…。

「そう、なら今日はもう眠りなさい。…疲れたでしょ？」

うん、そうするよ…。

おやすみ、水蓮。

「ええ、おやすみ…蓮」

その日、俺は昔の夢を見た。  
すごく懐かしい夢を…。

第四話　ねこ、たたかう。（後書き）

第四話、終了です。

いつもより少し暗いお話でしたが、どうでしたでしょうか…？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！  
では。

## 第五話 陽だまりの中で

赤ちゃん…。

それは愛でるもの。

猫…。

それも愛でるもの。

では、その二つが一緒にいたら…？

そんなの決まっている…！

超、愛でるんだ…！！

どうも、みなさん。

孫家さん家で飼い猫をやっています、蓮です。

突然ですが、貴方は子守りをしたことがありますか…？

私があります。

人間の時もそして猫のときも…。

そう、もうお分かりかも知れませんが、私こと蓮は…。  
只今、子守りをしています！

お相手は、生まれてまだ四力月の女の子、小蓮ちゃんです。

振り返れば今日の朝の話。

朝食を食べている時に水蓮が話しかけてきた。

なんでも今日はいつもより政務が忙しいとのこと。

それで何を思ったのか、彼女は俺に小蓮の面倒を見るように頼んできたのだ。

いや、侍女に頼めばいいんじゃない？ という俺の意見はもちろん却下されてしまう。

断れば、しばらくお魚抜きとのこと。

なんと理不尽な世の中か…。

絶望した！ そんな世の中に絶望した！

とまあそういうわけで、今日は子守りをすることに…。

さっきまでは雪蓮も蓮華も一緒だったのだけど、今は勉強の時間らしく、今は小蓮と二人つきりです。

まあ、でも子守りは慣れているので俺だけでも余裕でしょう。

「あー、あー」

「にゃー！」

ちょ、おま、止めて！

ヒゲは握らないで！！

そう思っていた時が俺にもありました…。

ねこ、大苦戦中です。

前の蓮華がすごく大人しい子だったので、完全に油断しました。

そういえば、孫家の子供はこういう子ばかりだったな…。

水蓮然り、雪蓮然り…。

元気があるというか、落ち着きがないというか、なんというか、そんなことを考えていると…。

「うゝ」

小蓮が不機嫌そうに顔を歪めて、こつちを見えています。

どうやら俺が構わなかったのが気に入らなかったみたいです。

とりあえず、小蓮の前で尻尾をゆらゆらと横に揺らしてみます。

これで可愛いあの子の視線を釘付け大作戦。

今まで成功率80%を超える、この作戦によって小蓮は俺の尻尾に夢中になったようだ。

目が楽しそうに尻尾を追っている。

はぁゝ、とりあえずこれで機嫌は戻ったかな。

でもしんどいぞ、これ…。

くそ、おのれ…水蓮めゝ。

俺は水蓮に呪詛を送りながら、もう一度小蓮を見た。  
小蓮はきゃっ、きゃっとうれしそうに俺の尻尾に向かって手を伸ばしている。

.....。

ま、今日一日くらいなら頑張るか。  
たまにはこういうのもいいかもしれないな…。

それから俺は子守りに全力を挙げて挑むのであった。

全力で赤ちゃんをあやす猫。  
その、見た目は大変にシユールではあるが微笑ましい光景を、こっ  
そりと扉を開けて覗いている侍女たちが多くいたとかいないとか…。

くSIDE雪蓮く

「むー」

私の隣で蓮華がむくれている。

理由は簡単、蓮だ。

というか、蓮華の機嫌が悪くなる時の大半の理由は、実は蓮のこ  
とだったりする。

「もう、蓮華？ そんなにむくれてもしょうがないでしょ？」

「うー、だって…」

「仕方がないじゃない。シャオはまだ小さいんだから」

蓮華に促すように言ってみるが、効果はいまひとつみたい。

いつも聞き分けのいい蓮華も蓮のことになると駄々をこねる。

実は今日、蓮華が蓮といっしょに寝る予定だった…。

だけと思いのほかシャオが蓮に懐いてしまったのよね。

離れると泣き出してしまいうくらいには。

これは仕方がないってことで、蓮が今日はシャオの所で寝ることに  
なったのだけど…。

「きょうは、わたしだったのに…」

その結果、私のもう一人の妹がへそを曲げてしまったみたい。

今も頬を膨らませている蓮華を見て、思わず苦笑してしまう。

そつえば蓮華がもつと小さいときに私も同じようにむくれてたわね…。

別に蓮華のことが嫌いだったわけではなかったんだけど、なんか蓮華を取られたみたいですごく嫌だったな。

たぶん、今の蓮華もそうなんでしょうね。

蓮華は、私と蓮華にとって家族であり、初めての友達でもあるわけだし…。

それに蓮と一緒にだとなぜかよく眠れる。

理由はよくわからないけど、なんかすごく安心できるのよね。

陽だまりみたいに暖かいし…。

さてと、考えていても仕方がないわね…。

この状況を解決するのは実は簡単なの。

蓮がこつちに来れないのなら、こつちから行けばいいじゃない！

そうすれば私も一緒に寝れるし…。

「なら、蓮華…。今日は私と蓮華とシャオ、そして蓮のみんなで寝ましょう?」

「えっ? みんなで…?」

「そつよ。それなら問題はないでしょ?」

「はい、ねえさま！ わたし、みんなでいつしよにねたいです！」

私の提案に手を挙げて賛成する蓮華。

その顔はさっきまでのむくれたものではなく、弾けんばかりの笑顔である。

私はそんな蓮華の手をひいて、蓮とシャオのいる母様の部屋に向かうのだった。

その日、夜。

夜遅くにやっと政務を終えた水蓮が部屋に戻ってみると…。

一匹の猫を中心に仲良く眠っている三姉妹の姿があった。

始めはそれを微笑ましく見ていた水蓮だったが、完全に寝るスペースの埋まっている寝台を見て気がついた。

「あれ？ 私は何処で寝ればいいのかしら？」

そう漏らし、孫呉の王は静かに絶望した。

## 第五話。 陽だまりの中で（後書き）

第五話。 終了です！

どうだったでしょうか？

うーん。 もっとシャオを出したかったけど、まだしゃべれなかったという罫。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## 第六話 プライスレス

お金では買えないものがある。

友達もそうだし、家族もそう。

時間もそうだし、自分たちの感情だってそうだ。

お金では買えないものがたくさんこの世の中にはある。

今、世は乱れている。

国では賄賂が横行し、金があるものが高い地位を得るそんな時代。だけど、忘れてはいけない。

家族や友達と過ごす時間というのは…その暖かい日々は…決して百万の富に劣るものではないということを。

あつ、でも買えるものは…頑張って貯めましょっね…！

「れん、はやくおきて！」

俺はそんな声と身体を揺さぶられる感覚に目を覚ます。

寝起きの焦点が定まらない目で、俺に声をかけている女の子…蓮華を見つめた。

「あつ、やつとおきた」

そう言つてうれしそうな顔を見せる蓮華。

あれ？ 寝過したのかな…？

そう思つて外を見てみるとまだまだ真つ暗である。

……………。

つまり、これはあれだ…。

運動会とか遠足の前に早く起きすぎちゃったという奴だよね。

俺も昔にやったなーと思いつつ、なんで俺を起こしたし、と蓮華を見る。

しかし、返つてきたのは…。

「へへへ。れん、きょうはたのしみだね？」

蓮華の弾けんばかりの笑顔だった。

相当、今日を楽しみにしていたみたいだ…。

うん、負けたよ…。

しょうがない。もう起きようじゃないか…。

自然と出てくる欠伸を噛み殺しながら俺はうゝんと身体を伸ばす。

さて、それじゃあ時間までお姫様のお相手でもしますかね。

あゝ、蓮より本部へ。

本日は晴天なり、くり返す本日は晴天なり。オーバー。

青い空、白い雲。

今日は絶好のピクニック日和となりましたー。

そう。今日私たちはみんなでピクニックに来たのです！

建業の街から少ししたところにある森。

その奥にちよつとだけ進んだところにはとてもきれいな川辺があります。

実は以前、雪蓮に連れて来られた探索で見つけた所だったりします。

「うゝん！ いい所ね。空気もおいしいわ」

「うむ。たまには外でやるのも粹なもんじゃ」

「もう、祭は…。私の分もある？」

「もちろん用意してあるわい。ほれ、堅殿」

「ふふふ。ありがとう」

なんとということでしょう。

年長者の二人が着いて早々酒盛りを始めているではありませんか。いいーな！。はっ！？

べ、別に羨ましいだなんて思っていないんだからねっ！

と、とりあえず俺は二人…特に水蓮に抗議の声を上げてみることに…。

「にゃー」

おい、その二人…。

いきなり酒盛りはどうよ、どうよ、どうなのよおう！

「いいじゃない、たまには息抜きも必要よ？」

「そうじゃぞ。堅いことをいうな」

まあ、間違っではないんだけどさ…。

今日は家族サービスの日だったのではないのかい？

「それは大丈夫よ。だつてほら…」

そう言つと水蓮はある方向を指差した。

俺がそちらの方を向くと…。

「蓮ー！ 早くこっちに来なさいー！」

「れんー。あそぼー！」

「みんなが待つてるのは蓮だし…ね？」

こっちに向かつて手を振り、俺を呼んでる雪蓮と蓮華。声こそ出していないもののこっちの方を見ている冥琳。みなさん、お待ちかねようだ…。

「ほら、行つてきなさい。我家のお猫様？」

了解ですよ…。

じゃあ、小蓮もいるんだからあんまり羽目はずさないよーに！

「りょーかい」

笑いながらそう言ってくる水蓮に少し不安を感じながら俺はお姫様たちの所に向かった。

「蓮！ 今よ！」

「にゃ、にゃ！」

雪蓮の合図に合わせて、我が必殺の爪を一閃。  
すると、あら不思議。

お魚さんが宙を舞っているではありませんか。

これぞ飼猫108の技のひとつ、魚獲りである。

「うむ。一度に二匹とは…。雪蓮に聞いたことがあるとはいえ、実際にこの目で見てみるとすごいな…」

「れん、すごい！」

俺の華麗な技を見た二人が感嘆の声を上げる。

蓮華にいたっては目がキラキラと輝いているようだ。

ふふふ。どうだ！ 俺、すごくない？

とはいったものの、実はこの技は俺だけでは出来なかったりする。うまく呼吸のあった相方が必要なのだ。

「やったわね、蓮」

雪蓮が俺に声をかけてくる。

そして、俺の顔の前に掌を向けてきた。

ふむ。なるほど…。

ではいっせーの！

「「イエ イ（にゃーん）！」」

こうして俺と雪蓮はハイタッチもどきをするのであった。

その後は獲った魚を食べたり、飛んでいるセミを追いかけたり…。水を掛け合ったり、追いかけてっこをしたりと楽しく遊んだ。それはいい、それはいいんだけどさ…。

ただ、ひとこと言わせてもらえるなら、俺を川に投げ込んだその酔っ払い二人！

世が世ならそれ、虐待になるからな！

そう、何を思ったのか。

あの酔っ払いどもは蓮華たちが遊んでいるのを眺めていた俺を川へと放り投げたのだ。

なんでも…。

「いや」。蓮も参加したいのかなーって思ったし。それに…」

「その方がおもしろゲフンゲフン。もといい肴になるかなと思ったからじゃ」

だめだ。

こいつら早くなんとかしないと…。

そう思っていた俺に救いの神が現れました。

そう、未来のメガネ軍師様こと冥琳ちゃんです。

俺は蓮華にタオルで身体を拭いてもらいながら、冥琳に怒られている年長者達を見る。

正座をさせられ、まだ10にもならない子に怒られているその姿は、とても孫呉の王とその忠臣には見えなかった。

そんな二人の姿を見ていて、なんか悲しいけど…これも現実なのよね…。とは雪蓮の言葉だ。

ただ雪蓮…。

たぶん近い未来…お前もあっち側にいる気がするぞ？  
俺はこっさりそう思った。

## 第六話 プライスレス（後書き）

第六話。終了です！

さて、どうだったでしょうか？

休日って感じが出せてたなら幸いです。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

## 第七話。 満月の夜に（前書き）

時系列的にはぶろろーぐと同じ日となっております。

## 第七話。 満月の夜に

〈SIDE雪蓮〉

古人、曰く。

古くから孫家には守り神がいる。

いつも見せる姿は仮のもの、満月の夜だけにその本当の姿を表す。しかし、その姿を見れるのは孫家の者で成人を迎えた者に限る。それ以外の者が見たならば、即、天罰が下るであろう。

「成人、か。まだまだ先よね」

私ははあゝと深くため息をつく。

孫家の守り神。

そう呼ばれているものがある。

孫家では知らない者はいないほど有名な話で、にわかには信じられない話。  
だつて…。

「あの蓮がね。どう見ても猫だし…」

確かに普通のとは言い難いかもしれない。

私たちの言葉を理解しているみたいだし、言うこともちゃんと聞く。冥琳に将棋で勝つほど頭がいいし、子守りもする。

色は純白と言ってもいいほど真っ白だし、その瞳も真紅とっていいほど真っ赤だ。

尻尾もすらりと長くて…毛並みもすごくいい。

寝ている姿はかわいいし、私がものを投げると取って来るし、お手もする。

猫パンチもするし…あれ、なんかかわいいのよね。見ててなんか和むし。

抱きしめると暖かいし、モフモフしてて気持ちいいし……って違う違う。今はそうじゃなくて…確かに蓮はすごくかわいいけど、やっぱり猫以外には見えないのよね。

とてもじゃないけど…守り神には見えない。  
そう、確かに見えないんだけど…。

「…それだけじゃないって私の勘が言ってる」

そもそもなんで守り神って言われてるのかって言うと、昔にあった大きな戦いで孫家の主を守ったことから始まったらしい。その後、ついて行った戦場で負けたことがないとか。

猫が戦場に行くって何って聞いたときは思ったんだけど、実際に蓮も昔は母様について行くときもあったらしいし…。

「あゝもうっ！ 考えるのは冥琳の仕事なのに…」

でも、このことでは冥琳には相談できない。調べようとするだけでも天罰が下るかも知れないし…。

母様に聞いても蓮が守り神様って言うだけだろう…。

うゝん、八方塞りね。

「今日は満月の日…」

私は暗くなつた空に浮かぶ月を窓から眺めながらそう呟いた。

うん。考えても仕方がないし、やっぱりここは行動あるのみよね!!

昼間に蓮華も蓮の本当の姿を見たくない？　って聞いたら。

「ねえさま、わたしもみてみたいです!」

って目を輝かせて言つてたし、約束通り二人でこっそり見に行こう。

今日は蓮と蓮華と三人で一緒にお昼寝もしたし、準備はバッチリ! さあ、蓮華と合流して蓮の姿を拝みにいくわよ!

〈SIDE 蓮〉

俺は今の孫呉の王であり、別名江東の虎とも呼ばれている孫堅こと… 水蓮の部屋に二人でいた。

小蓮は別の部屋で侍女が見ているらしい。

約束の刻まであと少し。  
そう、もう少しで俺は…。

「蓮、まだなの？ 私は早くこの酒を飲みたいんだけど…」

「にゃっ」

もうちょっと待て、と酒に伸びた水蓮の手をねこパンチする。

俺が百年くらい前から寝かせておいた特級品だ。

水蓮の気持ちかわからないでもないが、それは認めん。

そう、もう少しで俺はうまい酒が飲める。

猫の姿だと舐めることは出来るんだけど…どうしても飲んだ感じがしないんだよな。

あと、舌も猫と同じで熱いものがダメで、お魚が飛び抜けておいしく感じるんだよね

前は肉派だったのに…。

「ううう。蓮、まだ？」

ずっとお預けを食らって、いい加減に水蓮の我慢が限界に近くなってきたその時。

「にゃっ！」

俺の身体が発光し出した。

…どうやら約束の刻みだ。

御苦労さま、佐伯先生…。

眩い光が部屋を包んで、一瞬、視界が何も見えなくなる。  
そして…。

「ふう…。限定解除、完了」

「久しぶり、蓮。ふた月振りかしら」

「ははは、一応毎日会ってるけど…。久しぶり、水蓮」

こうして俺はひと月振りに人間の身体に戻った。

けど、これも夜が明けるまでの間だけ…。

その間だけ、俺はこの姿に戻る。

もう四百年くらい前から続いていることだ、慣れたと言えば慣れたな。  
戻るだけでも…幸運、なんだし。

「乾杯！」

俺たちは、二人で酒を飲む。

ふた月振りの酒はすごく良かった。

先月は蓮華に捕まって逃げられなかったし…。

俺たちは飲みながら…昔のこと、最近のこと、家の姫様たちのこと。  
たくさんのお話を話した。

日頃、話が出来ないから人と会話するのがとても楽しい。

水蓮も笑っているから、別にいいんだけど…。

できるならもつとたくさんの人と話がしたいな。

そう思った俺は水蓮に聞いてみることにした。

「それにしても…俺と二人だけで飲んでて楽しいのか？」

「ええ、楽しいわよ…。蓮は古今東西、色々な話を知ってるし、すごく面白いもの」

まあ、長生きしているしな。

話はたくさん知ってるさ。けど、だからって…。

「それにしてもあんな嘘の話まで作るのはなかったんじゃないか…？」

そう。

成人まで俺に会うことが出来ないというのは真っ赤な嘘なのである。あと、孫家の者以外がダメということも…。

「ふふん。私も子供の時はやられたんだし。これも家の伝統ですよ」

そう言つて、水蓮は笑う。

どうやら、すごく上機嫌のようだ。

「そうかい。さて、あいつらは何歳で俺と会えることやら……」

「私は１１歳の時だったし…あと何年かはかかるんじゃない？」

そういえば水蓮がはじめて俺と会った時は笑ったな…。  
大きく口を開けてポカーンって顔してたし…。

それ見て大笑いして、嘘のことばらしたらなんかすごく怒られたな  
！。

もっと早く教えてよ、とか何とか。

って、嘘ってばらしたらまた怒られるのかな、俺。

しかも雪蓮達はたぶん…。

「…いや。たぶん、あいつらはもっと早いような気がするぞ」

「へえー。ならその時はみんなで宴でもしようかしら」

孫家の者はなんか俺と会話して初めて一人前になるんだとか、昔に  
誰か言ってたしな…。

うん、宴はするべきだろうな。

「ああ、そうしよう。その方が楽しいそうだ」

「なーに？ 今だってこんな美人と二人っきりで飲めて、男としては  
うれしいでしょ？」

そう言って、水蓮は俺に酌をしてくれる。

それを飲み干し、今度は俺が水蓮に酌をする。

「まーね。うれしいっちゃ、うれしいんだけど……俺、お前がおね  
しよしてた頃から知ってるからな」

「ぶうつ！　ゲホゲホッ！　も、もう変なこと言い出さないでよ…」

「ははは。わりい、わりい」

そんな風に楽しく？　会話をしていると夜はどんどん更けていった。

まだ小さな小蓮もいるので日付が変わる前にはお開きとなった。  
それから俺は夜が明けるまで、お気に入りの場所で月を眺めることにする。

「月見酒つてのもたまにはいいかな…」  
そう言つて、ゆっくり酒を楽しむ。

月がすごく綺麗だ…。

まん丸で、大きくて、だけどその光はとても優しくて…。  
周りの星たちもキラキラと輝いている。それがいいアクセントになつていて、まるで一枚の絵画のようだ。

この世界に来てから上を見上げるということを覚えた。  
あっちじゃ、下を見下ろすことはあっても上を見上げることなんて  
ほとんどなかったしな。

そんなことを考えていると...こちらに近づいてくる気配を感じた。

どうやら今日のメインは今から始まるみたいだな...

こちらに走ってきていた気配...雪蓮は俺の後ろにやってきた。  
そして、口を開く。

「貴方が蓮、なの？」

その声を聞いて後ろを振り返ると。  
信じていないような...けど、どこか確信しているような...そんな半  
信半疑の表情があった。  
だから...俺は...

「ああ。こんばんわ、雪蓮...」

まず、あいさつから始めることにした。



## 第七話 満月の夜に（後書き）

第七話。終了です！

どうだったでしょうか？

蓮、人間に戻る。というお話でした…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

第八話。これが我が家のお猫様！（前書き）

前回の続きです！

## 第八話　これが我が家のお猫様！

＼SIDE雪蓮＼

蓮の本当の姿を見るために蓮華と蓮を探していたけど、なかなか見つからなかった。

今は蓮華が眠ってしまったので部屋に届けた後、一人で探しているけど、見当たらない…。

「どこにいるのかしら…」

そう呟いていると、今日蓮がいた場所を思い出した。

街が一望できるあそこならいるかもしれない…！

そう思い、向かった先で私は目撃した…。

月を見上げている一人の人を…。

「貴方が蓮、なの？」

私はどこか恐る恐る聞いてみる。

まだ確証はない。だけど…私の勘がいつている、この人が蓮なんだって…。

「ああ。こんばんわ、雪蓮…」

私の方に顔を向けて、そう言ってくるのはたぶん男の人。  
すごく中性的な顔立ち。

腰に届くかと思うほど長い髪の色は、蓮の毛と同じ真っ白で、目の色も蓮と同じ真っ赤だった。

この一見、女の人にも見えるこの男の人があの猫の蓮の本当の姿…。

「本当に蓮、なのよね？」

「まあね、昼にヒゲを抜かれた孫家の飼い猫こと、みんな大好き蓮ちゃんですよ」と

その人はそう言って、優しく笑う。

その笑顔が、いつも見ている蓮の顔とダブって見えた。  
私はそれをただ、じっと見つめる。

「……………」

「あれ？ 信じてない感じ…？」

うー、困ったなーと呟く男の人。

でも全然困っていないのは一目瞭然だった。  
だって目が笑ってるし…。

「それにしても、まさかこんなに早く会うとは思わなかったぞ…」

「えっ…？」

「あの水蓮でももう少し掛かったのにさ」

「そ、そうなんだ…」

「うん。優秀、優秀。そういうわけで…」

そう言うのと、男の人…ううん、蓮は私に新しい杯を渡してきた。それを私が受け取ると、持っていたお酒をトクトクと注いでいく。

えーと??

私の頭の上に疑問符が浮かぶ。

お酒はまだあんまり好きじゃないんだけど…。

「まずは、乾杯しようか」

そう言つて蓮は杯をこっちに向けた。それに合わせて私も杯を持ち上げる。

「何に乾杯するの？」

「この月の下で俺と雪蓮が会えたことに…」

笑いながらそう言う蓮はとてもうれしそうで…。

月の光と合わさったその顔はとても…とても綺麗だった。

少しの間それに見惚れてしまったけど、不思議そうに首を傾げた蓮を見て、私は慌てて頷いた。

「う、うん」

「それじゃあ…」

「乾杯！」

私と蓮は同時にお酒を飲む。

以前、飲んだ時は変な味であんまり好きではなかったけど…。  
この時飲んだお酒はなんでかすごくおいしいと感じた。

だからこの後、私がお酒好きになってしまったのは仕方がないこと…。

そう、全部蓮が悪いの…！

それから蓮に色々なことを聞いた。

もう実は四百年くらい生きているということ。（けど、不死ってわけではないらしい）

この姿に戻るのは満月の夜だけで、さっきまで母様と晩酌をしていたということ。

『天』と呼ばれる国からこの国にやってきたこと。

この国に来てすぐに私たちのご先祖様に拾われて、それからはずっと一緒にいること。

一度だけご先祖様を助けたら、いつの間にか守り神なんて呼ばれるようになったこと。

本当に色んなことを聞かせてくれた。

蓮は話上手で、どんな話もとてもおもしろかった。

信じられないような話もたくさんあったけど、なぜか蓮が嘘をついていないとわかった。

話している時の目が嘘じゃないって、そう言っていたから…。

〈SIDE 蓮〉

雪蓮と酒を飲みながら、色んなことを話して聞かせた。

昔のこと…。天のこと…。俺の知っている昔話。

その話の一つ一つを目を輝かせながら聞いている雪蓮を見て、まだまだ子供だなんて思った。

ただ、天から堕とされたことと力を封印されたことは話さなかった。別に暗くなるような話は、ね？

けどやっぱり孫家の子だな…。

これ結構、度数の高い酒なんだけど、うまそうに飲んでるし…。

うんうん、本当に将来が楽しみだ。

楽しい時間というのは早く過ぎるもので、だんだんと空が白んできた。

この楽しい時間もおしまい、かな…。

さてと、それじゃあ最後に一言だけ言っておこうかな。  
俺は同じように空を見上げていた雪蓮に声をかける。

「雪蓮…」

「んー？ なに？」

「きっと…雪蓮もいつかは王になる…」

「うん」

それはたぶん決定事項だ。

水蓮のあとはこのまま雪蓮が継ぐことになるだろう。  
後はそれが遅いか早いかの違いでしかない…。

「王は臣下達とこの地に住んでいる民たちを導いてやらないといけない」

「うん、そうね」

王は常に先頭に立つ、云わば道標だ。  
前を切り開き、後ろの者たちを率いていく。  
そう言うものだって俺は考えている。

雪蓮も王の役割が分かっているのだろう。  
俺の言葉に大きく頷いていた。

「だけど王は孤独だ…。たとえば、どんなに仲の良い信頼できる臣下にも言えないことが出て来てしまう…」

王ほど、悲しい仕事はないような気がする。  
常に私ではなく公として動かないといけないし…。  
やりたいこともできない…。  
言いたいことも言えない…。  
きっと…そんなこともたくさんできる…。

「うん…」

その時のことを考えたのか…。  
少し顔が暗くなる雪蓮。

だから、さ…。

「だからそんな時は…。俺に話せばいい。俺はずっと傍にいるし、愚痴くらいならいくらでも聞いてやるから」

そう言って俺はポン、と雪蓮の頭に手を乗せる。

孫家と共にあること…。

それが昔の当主との約束…。

守り神としての俺の役目…。

そして、今の俺ができるたった一つのことである。

「聞く、だけなの…？」

少し、不満そうに雪蓮がそう言ってくる。

力を貸してはくれないのかと、目がそう言っている。

「聞くだけだよ」

「なんで…？」

「だって俺、ねこだもん」

それ以上を求められても困りまーす。

少し上目遣いで膨れている雪蓮にそう言っただけ俺は笑う。

それにつられて雪蓮も笑った。

夜が明け、太陽が出てこようとしている。  
それと同時に俺の身体もゆっくりと光り出す。

「れ、蓮!？」

雪蓮は光り出す俺に慌てて声をかけてくる。  
なんかすごく必死だ。

「ははは。もう時間切れ、だな」

「そっか…」

寂しそうな顔になる雪蓮…。  
まったくそんな顔、すんなよ。

仕方がないので雪蓮の頭を撫でてやる。  
いつもは撫でられているのに今はまったく逆の立場だ。

「雪蓮、またね」

「うん…また」

最後にそう言葉を交わすと俺はねこに戻った。

むう…。

視線がやっぱりすごく低い…。

「本当に蓮だったんだ」

「にゃーん」

俺の方をマジマジと見る雪蓮に返事を返す。

って、信じてなかったんかい！

心のなかで突っ込みを入れつつ、俺は欠伸をする。すると俺のが移ったのか雪蓮も欠伸をした。

「…寝よっか」

「にゃ」

俺は返事を返して、雪蓮とは反対の方向へと向かう。

まあ正体を明かしたわけだしな。

まだ子供だって言っても一緒に寝るのはもう嫌だろう…。

そう俺は思ったわけだったんだが…。

「蓮？ どこに行くの？」

そう言つて俺を捕まえる雪蓮さん。

いや、ほら。

一緒に寝るのはあれかなーって思つたんだけど…。

「私は別に気にしないわよ。だって人間でも猫でも蓮は蓮でしょ？」

そう言つてもらえるのはうれしいんだけど…。

…本音は？

「正直、猫の印象が強すぎてそれ以外に見えない。人間が猫になつたつていうより猫が人間の形に化けたつて感じがするのよね」

というわけで、一緒に寝ましょ？

そう言いながら雪蓮に連れていかれる俺。

どうやら俺は結局、飼い猫の蓮君のままのようです…。

それは別にいいんだけど、なんか人の尊厳を奪われたような…。

ま、いいのかな…？

そんな風に思いながら、俺と雪蓮との初対面は幕を閉じるのだった。

その後。

お昼になって起き出すと、すごくむくれている蓮華がいた。  
なんでもねえさまだけずるい、とのこと。  
そのご機嫌取りが大変だったことはいうまでもない。

## 第八話　これが我が家のお猫様！（後書き）

第七話。終了です！

どうだったでしょうか？

結局は猫扱いをされる蓮なのでした。

お気に入りが入りが400件、総合評価が1000ptを超えていました。  
みなさん、ホントにありがとうございます！

これからもがんばっていくので応援してくれるとうれしいです！  
では。

## 第九話 宝探しにレッツ&ゴー！

皆さんはご存知ですか？

建業のどこかに、こゝんなどかゝいお城がある事を。

お家の名前は『孫家』。そして、そのねこ君の名前は『蓮』。

ねこにはちよっぴり秘密があつて、ちよっぴりと言つてないこともあつたりしてゝ。

でもとてもとてもかたゝい家族の愛で結ばれているのですゝ。

ども、毎度おなじみ、飼い猫の蓮です。

前回、人間だつて教えたのに全然扱いが変わらないことについて。次の時に蓮華にも教えただけどゝ。

「すごいね、れんはにんげんにもなれるんだゝ」  
そう言つて目を輝かせるだけでした。

…うん。

やっぱり俺はあくまでも猫らしい。

ちよつとへこんだので、水蓮に話したら大爆笑してた。  
悔しかったので酒を取り上げたら、速攻で謝つてきたからまあ許し

た。

それにしても、雪蓮も蓮華ももう少しくらいリアクションしてくれ  
たっていいと思うんだよ。

別に嫌われるよりはいいんだけどさ…。

そんなことを少し黄昏ながら、考えていると…。

「蓮！ 宝探しに行くわよ！-」

俺の所にやってきた雪蓮がいきなりそう言ってきたのだった。

急遽、決まった宝探し。

構成パーティーは以下のようになった。

勇者：雪蓮

賢者：冥琳

魔物使い：蓮華

魔物：蓮

うん。

なんかすごく文句を言いたいところがあるんだけど…。  
いいかな？ ねえ、いいかな？

「よし、これなら完璧ね！」

「ああ、最高の編成だ。どこにも隙がない」

いや、あるよね。

突っ込む隙が、わりと普通に…。

「れん、がんばろうね！」

はあ。

もう魔物でいいですよ…。

それにしてもなんで宝探しなんぞを？

俺がそう思って首を傾げると雪蓮が説明してくれた。

「書庫でこれを見つけたの」

そう言つて雪蓮が見せてきたものは一枚の地図だった。

良く見てみると、どうやらこの周囲のものみいだ。

その中で一カ所だけ目印の付いている場所がある。

何かがある場所を示しているのかな…？

「これはきつと宝の地図よ！　ここに何か隠されているような気がするの！」

「また、勘か？」

「ええ、そうよ」

雪蓮は冥琳の問いにそう笑顔で返す。

雪蓮の勘がいつているのなら、たぶん何かあるんだろっけど…。

ただ、どーも昔に見たことがあるような気がする…。

それに加えて、嫌な予感も…。

「それじゃあ、行くわよ〜！」

「しゅっぱつ〜！」

そんな不安を感じながら俺たちの冒険は始まったのだった。

「れん！ みぎ〜！」

「にゃん〜！」

了解です！

マイマスター！

俺はこっちに飛び掛かってきた野犬にストライクレザークローを食らわせる。

まあ、ただのひっかかり攻撃ではあるんだけど…。

野犬は予想外の反撃に怯んだみたいだ。  
そして、その隙を見逃す雪蓮ではない。

間髪いれずに野犬に攻撃を加えた。

その結果、簡単に吹き飛ばされる野犬。

てか、鍛錬をしているとは聞いてたけど、雪蓮がマジで強いんですけど…。

もしかしたらもう一般兵より強いんじゃないか…？

俺がそんなことを考えている間に、勝てないと見たのか野犬たちは逃げ出していた…。

ふう〜。

戦闘終了なり〜。

俺たちの探険はなかなかスリルのあるものとなっている。

今みたいに野犬に囲まれたり、ハチの巣から大群が攻めてきたり、熊の親子と遭遇したので音をたてないように静かに逃げたり、巣から落ちてきた雛鳥を巣に戻してあげたり…。

うん。

普通に本でも出せるくらいの大冒険をした気がするぞ。

少しは蓮華が怖がるかなーとも思ったけど…。

どうやらこの子も間違いなく孫家の子のようで、終始楽しんでいる様子。

今もニコニコ顔だ。

雪蓮は言わずもがなで。

鼻歌を歌いながら、先頭を歩いている。

となると、一番大変なのは冥琳だ。

何度も雪蓮が飛び出そうとするのを必死に押さえてるし…。  
顔を見れば、若干お疲れのご様子。

「にゃ〜?」

心配になったので、とりあえず声をかけておく。  
すると、冥琳は俺を見てすぐに抱きかかえる。

「ありがとう。蓮だけが私の癒しだよ…」

そしてモフモフしながら俺にそう言ってきた。

なんというか、まあ…。

がんばれ、冥琳。

名軍師と言われるその日まで…。

朝に出発したが、今はもうお昼だ。

雪蓮の武勇、冥琳の知略に俺と蓮華の連携。

これらがいい感じ融合した俺たちは、結構いいパーティーだったよ  
うで割かしサクサクと、先に進んで行けた。

これなら、もうすぐに目的地に到着するだろうな。  
俺は昼食を食べながらそう思っただった。

「うーん。このあたりのはずよね…」

「ああ。地図に書いてあるのはこのあたりだな」

森の奥にある少し開けた場所で止まると、雪蓮と冥琳がそう言い出した。

確かに地図を眺めみると、この辺りを指しているように見える。

地図を見ながら、みんなで少し考え込んでいると…。

「あつ！ どうくつ！」

そう言つて、蓮華が指を差した方向には少し小さめの洞窟があつた。どうやら、うまく木の枝で入口が隠れていて見えなかったようだ。

「お手柄よ、蓮華！」

「良く見つけましたね、蓮華様」

「えへへ」

蓮華を笑顔で褒める二人。

一方の蓮華も褒められてうれしそうだ…。

ただ俺だけは、少しだけ考え事をしていた。

うん。

この洞窟って見覚えがあるぞ…。

うん、絶対にあるはず…。

ここは確か…。

「よし、じゃあ中に入るわよ」

「おー！」

「そうだな。本当に何か隠されているのかもしれん」

そんな間にも三人は洞窟の奥へと進んで行く。

その顔を見れば、みんなどんな宝があるのかを楽しみにしているようだ。

俺も昔の記憶を思い出しながらそれに続いた。

……。

……。

あつ……。

思い出した……。

思い出したぞっ！

つてことは宝物つて……。

あれ、だよな……。

ここにある宝物の見当がついた俺は顔を引き攣らせる。

洞窟の一番奥には小さな木でできた箱があった。  
そしてその中には……。

「ん〜。何かの本かしら」

「みたい、だな。題名は……」

「れんとわたし…?」

「作者は…」

「孫 文台…」

やっぱり水蓮の黒歴史日記だったー!!

あの所々によくわからないポエムとかが書いてある奴…。  
しかも日記の中身はほとんど嘘な、妄想日記だし…。  
今になってみれば、大層黒歴史な代物だろう。

そう言えば確か…。  
捨てるのは嫌だとか言ってここに隠しに来たんだっとな。  
無理矢理、連れて来られた覚えもあるし…。

てか、あれを娘たちに見られるとか…。  
ご愁傷様、水蓮…。

そうこうしている間に中を覗いていた三人が、ぱたんと日記帳を閉じた。

中を覗いていた三人は何やら非常に微妙な表情をしている。

「こ、これは持って帰れないわね…」

「あ、ああ。ここに置いていた方がいいだろう」

「かあさま…」

早速、封印指定が掛かった日記帳。

うん、その選択はただし。

俺たちは何も見ていない…。

それがみんなで幸せになれる唯一の方法だ…！

こうして俺たちの冒険は幕を下ろした。

最後に、変な空気になったけど…。

気にしたら負けだね！！

後日、娘たちから何やらすごく生温かい目で視線を送られている江東の虎がいたとかいないとか…。



第九話 宝探しにレッツ&ゴー！（後書き）

第九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています〜！  
では。

## 第十話　ねこ、攫われる

この物語はスーパーハンサムネコ、蓮と彼を取り巻く美女達の愛と肉欲とポロリが満載の小説である。　注：嘘です。

姉さん、事件です！　SOSです！

どうも只今、誘拐されている真つ最中のねこ、蓮君です。  
なぜかはわかりませんが、人攫いに攫われているみたいです。  
押し込められた馬車のなかには、俺の他に数人の子供たちもいます。

はあ、姉さん…。

どうやら面倒事のようにです…。

話は今日の夜にまで遡る。

あの満月の夜の雪蓮との対面から時は流れ、早五年。  
水蓮の黒歴史の発見からも早五年。

あれからは毎回、孫家のお姫様たちと過ごすことになった。  
まー、正確には水蓮と一緒にの所にみんなで乗り込んで来るんだけどね。

俺の知ってる面白い話を聞かせてやったり、一緒に月を眺めたり、  
なぜか武術の稽古をつけてやったり。  
毎回、楽しくやらせてもらってる。

昨日の夜もそんな感じで過ごし、蓮華と小蓮を寝かしつけた後に水蓮、雪蓮と酒を飲んでいた。  
結局夜明けまで飲んでいて、蓮華に見つかり水蓮、雪蓮共々怒られたのもいつものことだ…。

説教が終わり、ねこに戻るとすごく睡魔が襲ってきた…。  
このまま城内で寝てると怒られるかな と思った俺は城を抜け出したわけなんだけど…。

なんか五、六人のおっさんズ…所謂、賊のみなさまにあつという間に攫われちゃいました。  
そして冒頭に戻る、というわけである。

うーん。どうしようかな。

一人で逃げられるわけもないし…。

……。  
……。

ふあゝ。

……ねむ。

とりあえずは寝よっかな…。

いずれ水蓮たちが助けに来るだろうし。

まあ、なんとかなるでしょ。

助けが来るまで寝てようかとを考えていた俺だったが…。

ふと、一番奥で泣いている女の子が目についた。

蓮華くらいの年齢だろうか…。

小柄で真っ黒な髪の子だった。

どうやら他にいる子供たちよりもっと怖がっているみたいだ。

今も身体を震わしながら、泣いている。

女の子が泣いているのはあんまり見ていたくないものじゃないしな…。

そう考えた俺は女の子の方と向かって行くのだった。

〈SIDE 蓮華〉

「蓮ー？」

「れーんー？」

私は今、シャオと一緒に家になって家の飼い猫の蓮を探している。  
探しているのだが…おかしい。

いつもなら、もう私たちの声を聞いてすぐにやってくるはずなのに…  
…今日は一向に姿を現さない。

私はそれを不思議に感じながらも蓮を探す。

しかし、なかなか蓮は見つからない。

街の方に行っているにしても昼には一度帰って来るはずだし…。

「れん、いないねー」

「うーん。おかしいわね」

私はシャオと一緒に考え込む。

本当におかしいわ。

今までこんなこと一度もなかったのに…。  
私がそんなことを考えていると、別の所を探していた姉様がこっちにやってきた。

「蓮は見つかった？」

「あつ、姉様…。いえ、どこにもいません」

「れん、よんでもでてこないのー！」

「そう、私も見つけれなかったわ…」

どうやら姉様も見つけられなかったらしい。  
姉様はそのまま考え込むと顔を少し顰めた。

「しえれんねーさま？」

「どうかしたのですか？」

「うっん。ただちょっといやな予感が、ね…」

姉様がそう言うと、何人かの兵士を連れた母様が歩いてきた。  
けど、いつもとどこか様子が違う。

そう、あれはまるで戦場に向かう時みたいだ。

「母様、どうかしたの？」

母様の様子を見て、不思議に思ったのか。

姉様がそう問いかける。

そして、私たちは驚きの事実を聞かされた…。

「…蓮が攫われたわ」

〈SIDE 蓮〉

「モフモフです」

「にゃ、にゃー」

あ…ありのまま今、起こった話を話すぜ！

『俺が女の子を慰めようと思ったなら何時の間にかおもちゃにされた』

な、何を言ってるのかわからねーと思うが、おれも何をされたのか

わからなかった…。

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ…。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

「次はおれ」

「私もさわりたいーい！」

そして次々と俺の周りに寄って来る子供たち。

おいおい、お前ら。

俺らつて一応、誘拐されたんだぜ？

ちよつとは緊張感持とーよ。

ま、でも泣いてるよりは全然いいのかな…？

仕方ない、付き合ってやるか。

ほら、好きにし……

「モフモフモフモフモフ。ん、気持ちいいです。最高です」

「うわー、気持ちいい」

「ほれほれほれー」

つてお前ら、少しは加減つてものしろ！  
いや、してください！　お願いしますから！

そんなに適当に触られると…。

「にゃあ…」

ほら毛が逆立った…。

はあ、また毛繕いしなくちゃ…。

こうして俺は全身を触られまくった…。

ううう。もう好きにして…。

そんな風に馬車の中で流れていた緩やかな空気は、馬車が止まり、二人の男が入って来たことで終わりを迎えた。

男たちはかなり慌てているようだ。

何か予想外のことも起こったのか…。

「あいつら…こんなに早く追いかけてくるなんて…！」

「くそっ！　簡単な仕事だと思ったのによお…」

どうやら、水蓮たちが追いかけてきたみたいだ。  
しかももう確認できるところにまで来ている…。  
あと少しの我慢だな…。

じゃあ、なんでこいつらは止まったんだ…？

一瞬、そう思った俺だったが答えは簡単だった。

「仕方ねえ、人質使ってなんとか逃げるしかねえな」

そう言うとき男は俺の周りに固まっている子供たちに視線を向ける。  
子供たちは先ほどの元気はもう見る影もなく、その顔には恐怖が張り付いていた。

「おいっ！ お前に俺らの人質になって貰うぜ」

「大人しくしているよ」

男たちはこの中で一番小柄な女の子…あの黒髪の女の子に目を付けたようだ。

ゆっくりとその腕を伸ばし、女の子を捕まえようとする。  
女の子は目をぎゅっと閉じ、小さな声で助けてと呟いた。

はあ。

どうやら俺は結構、バカ野郎らしい。  
だってこんな時、勝手に身体が動き出すんだから…。

「にやつ！」

「うわっ、痛っ！」

俺は後先考えずに男へと飛び掛かる。  
いきなり顔を引っ掻かれた男は一瞬、慌ててたが…すぐに俺を引き剥がした。

「なんだ、こいつ！」

そう言うのと、もう一人の男が持っていた剣を大きく一振り。  
俺はその攻撃をうまくかわし、男の顔の横側に猫キックを食らわせる。

男は猫キックをもろに食らい、その場に倒れた。

うん、我ながらうまくいったな…。

俺がそう思った瞬間。

「このくそ猫がっ！」

始めに引っ掻いた男に俺の腹をおもいつき蹴りつけられた。  
蹴り飛ばされ、何度も叩きつけられる俺。

一瞬、息が止まったかと思うほどの衝撃とその後に来る猛烈な痛み。  
何本か骨が折れたかな…。

弱いよな…この身体…。

本当にこういう時、猫の身体の自分が恨めしい。

男は相当、頭に來たのか。

倒れている俺の首を掴むと、そのまま俺を持ち上げた。

苦しい…。

すっげえ苦しい。

けど、この腕を離させることは俺には出来ない…。  
もう力はほとんど残っていなかった。

てかおっさん、本当に首絞まってるから…！

俺、死んじゃうから…！

いやまあ、殺す気なんだろうけどさ。

「このバカ猫が！ 人間様に楯突いてんじゃねえよ！」

そう言つて、さらに手に力を入れる男。

それに合わせて俺の意識もだんだんとなくなって来る。

ははは、これは死んだかな…。

けど、おっさん…。そうやって俺に構ってるのもいいけどさ…。  
あんたの後ろに桃色をした虎が二匹いるから気をつけた方がいい…  
ぜ…。

そう思いながら、俺は意識を失ったのだった。

まだ最終回ではないぞい。  
もちっただけ続くんじゃ。

はっ！　何か今、亀の甲羅を背負ったサングラスの老人がいたよう  
な…。

俺はそんな変なことを考えながら、目を開ける。  
上には見なれた天井があった。

どうやら、建業の城に戻ってきたみたいだな…。

「目が覚めたのね…」

その声に視線を向けると、水蓮が横の椅子に座っていた。  
少し動いただけで、身体に激痛が走ったのはここだけの秘密だ。

「まったく無茶するわね…」

いや身体が勝手にね…。

そういえば、あの子供たちは…？

「全員、無事だったわ。今は自分たちの家にみんな帰ってる」

そっか。

それなら良かった…。

「あの子たち、みんな言ってたわよ…。猫神様にお礼がしたいって  
さ。特にあの黒髪の女の子」

ふーん。

別にそんなのいいのにな…。

この時の俺は知る由もなかった。

あの時助けた子たちが恩返しと称して全員、士官してくることを…。そのメンバーが中心となり、お猫様親衛隊なるものができたりすること…。

この時の俺はまだ知らなかった…。

「貴方が気を失った後は大変だったわ…。子供たちは泣き叫ぶし、雪蓮は暴れるし…」

それは…悪いことしたな。  
んで、お前は…？

「もちろん、あいつらを皆殺しにしてやったわよ」

そう言つて、笑顔を見せる水蓮。  
あゝ、お前もキレてたわけね…。  
それにしても身体が痛すぎるんだけど…。

「自業自得よ…。まあ、今日はもう休みなさい？」

そう言い、俺の頭を一撫ですると水蓮は席を立ち、扉の方に向かう。

さて、俺はもうひと眠りしますかね…。

そう思っていた俺に一度、こちらを振り返った水蓮が爆弾を落としてきた。

「ああ、あとたぶん明日には蓮華の説教があるから、楽しみにしてなさい」

えっ？ マジ…？

それってなんて死亡フラグ…？

れんは めのまえが まっくらになった。

## 第十話　ねこ、攫われる（後書き）

第十話。終了です！

いかがだったでしょうか？

黒髪の女の子…後の明命である、の巻でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています〜！

ではでは。

第十一話 猫はこたつで…こたつがない…だと!?(前書き)

少し、日が空いてしまつてすみません。

ちよつと季節外れですけど、なんとなく書きたくなつたんで書きました!

では本編をどうぞ

第十一話　猫はこたつで…こたつがない…だと!?

季節は巡り、時は流れる。

今年もあの季節がやってきた。

みなさんも好きな季節がありますよね？

春夏秋冬。

どれもいい所がいろいろあります。

もちろん、俺にも好きな季節があるわけで…。

春はいいよね。

ぽかぽかとお日様も暖かくて、お昼寝には最適だし…。

夏もいいよね。

真つ青な空に白い雲が浮いてて、見てるだけでのんびりできるし…。

秋もいいよね。

涼しくなってきた、山とかの色とかも変わってとってもすごく綺麗だし…。

ただし冬…てめえはダメだ!!

今も外では雪が降っている。  
しとしとしと、雪が降ってやがる。  
俺のテンションも比例してどんどん落ちていく…。

確かに綺麗だとは思うよ？  
真っ白だし、ふわふわだし。  
雪化粧つてのも乙なものだと思うし、結晶とかもみんな違う形でいいと思うよ。

だけどさ…。  
そんないいところを差し引いてもさ…。  
冬は寒すぎるんだよっ！！

俺も一応はさ。  
毛を冬モードにしているんだよ！？  
空気も入れて膨らませているんだよ？

なのに何さ、これ？  
もう一步も動きたくないんだけど…。  
てか動くと凍え死ぬ。

どこかで聞いた歌だと雪が降ると犬は喜んで庭を駆け回るらしいけどさ。  
正直、理解に苦しむわ…。

俺は無理。マジで無理。

名も知らぬ犬たちよ…俺にもその元気をわけてくれ。

あと確か猫はこたつで丸くなるんだよね。

いいよね、こたつ。

人間は素晴らしものを生み出したと思うよ。

だけでも…だっけど！

この世界というか時代にはこたつがないという罨。

なぜだー！ー！ー！！

普通、冬とこたつとみかんはワンセットじゃないのか…！

神よ、なぜこんな試練を俺に与えるのですか…？

俺のことが嫌い…？

はいはい、そうですか。

俺もお前らなんて大っ嫌いだよ…！

実際にろくな奴はいないしね…。

そんなこんなで比較的暖かい部屋の中で、小さく丸くなっていた俺は突然の襲撃に遭う。

そつ、今日もあいつがやってきたのだ。

「れ〜ん」

「っ!!!!」

声を聞いたとたんに俺の身体に緊張が走った。

身体をさらに小さくし、なんとか忍び寄る魔の手から守ろうとするが…。

「ふふふ。甘い甘い!」

「にやう…」

奴の手は俺の鉄壁? の防御をひらりとかわし、懐へと侵入。

そして…いきなりお腹に氷のような手をつけられた。

外で雪を触ったであろうその冷やされた手は…文字通り、魔の手だった。

「うわ〜。やっぱり蓮は最高の湯たんぽよね」

いやあったか、あったか、じゃないから!

俺を便利グッズと勘違いしてないかにや!?

俺の抗議の視線は無視され、なおも身体を弄られる。  
その度に俺の毛が逆立つ。

うつ…くつ…。

これって、ある意味拷問…。

マジでやめてくれないかにや…。

所々、語尾もなんかおかしくなってきた。折角、温めて置いた俺の体温がっ！

「ほらほら、蓮華もどう？」

自分の手が温まってきた後、雪蓮はさらに追い打ちをかけてくる。鬼だ！ここに鬼がいるぞー！

「も、もう、姉様？ 蓮が嫌がってますよ？」

いやいや、蓮華さん？

そう言いながら冷たい手をつけるのは……。

「にゃん！」

やめて貰えとうれいなくなんて。もう遅いんだけど……。

「本当。暖かい……」

俺を弄りながら、ほっこり笑う蓮華。

そんなにいい笑顔を見せても許してやらないんだからね……！  
という元気も今の俺には残されていなかった。

体温カムバークッ！

「さーてと、手も温まったことだし…」

「そうですね。もう充分です」

あらかた満足した後、姉妹はことあるうか俺を外に連れ出そうとする。

やめて！ もう俺の残基は一基も残ってないぜ…。

「折角、雪が降ってるんだからもったいないじゃない」

「蓮、外の景色もすごく綺麗よ？」

そう言って俺を説得しようとしてくる二人。  
いや正直、引き籠りたいんですけど…。  
寒い嫌だし。

「もう仕方ないわね…」

そついうと雪蓮は俺をひょいっと持ち上げ…。

「強制連行よ！」

「にゃー！」

俺を外へと連れ去った。

助けて、蓮華…！

と最後の頼みである蓮華を見るも…。

「まったく姉様は…」

そう言いながらも笑顔で付いてくるだけだった。

ブルータス！ お前もかつ！！

結局、その後。

外で雪だるまを作っていた小蓮にまた湯たんぽ代わりにされた。  
今度は逃げることもできたけど、俺は逃げなかった。

べ、別に作ってた雪だるまが俺を似せてて、うれしかったとかじゃないよ？

真っ赤になってた小蓮の手を見たからとかでもないからね！  
勘違いしないでよね！！

「きゃ！？」

なんか変にツンデレってた俺に、突然飛来してきたものが直撃する。  
声をあげた所を見ると横にいた雪蓮に当たったようだ。

たいして痛くもなかったそれは、よく見てみると雪のかたまりだった。

ふと視線をずらすと、こちらをにやにや笑って見ている水蓮の姿が…。

ふふふ…。

俺は少しだけ笑いながら、雪蓮に視線を合わせる。  
雪蓮も俺を見ると大きく頷いた。

気持ちは一つ。

よろしい。ならば戦争だ！

こうして第一回、仁義なき雪合戦大会が幕を開けた。

まあ結果は…。

「いくらなんでも四対一はズるいんじゃない!？」

「何をいつてるのよ!？ 先に仕掛けてきたのはそっちでしょ!」

「今回は母様が悪いです。これはお仕置きです!」

「シャオもなげる」

逃げ回る水蓮を三姉妹が追撃している。

わっははは！

圧倒的じゃないか、我が軍は！

しかし、そう思ってた俺の顔に雪玉が直撃。

「油断大敵」

そう言つと笑つてまた逃げる水蓮。

俺はそれを追いかけようとしたが、すぐに止めた。

だつて水蓮の目の前に…。

「水蓮様？ お部屋にいらつしやらないと思つたら…」

すごい笑顔の鬼がいるんだもん。

「め、冥琳？ ほらたまには家族との時間も大事かなーって、ね？」

「ほう。では政務は大事ではないと？」

「そ、そんなことはないのよ？ た、ただ……。ほらみんなも何か……」

助けを求めようと水蓮が後ろを振り返ってみると、自分の家族の姿はどこにもなかった。

ただあるのは自分の飼い猫に良く似た雪だるまだけ……。

「裏切ったな。私の気持ちを裏切ったんだ！」

「変なことを言っていないで政務に戻ってください」

「い、嫌〜！」

そして、そのまま水蓮は引き摺られて行きましたとさ。

お・し・ま・い。



第十一話 猫はこたつで…こたつがない…だと！？（後書き）

第十一話 終了です！

いかがだったでしょうか？

猫っていえばこたつじゃね？ って思ってた書きました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！  
では。

第十二話　にらめっこ…？　俺は簡単には負けんよー！！（前書き）

更新が遅くなってすみません。

なんでか角膜炎になってしまって苦しんでました…。

だいぶ治ってきたので更新します！

では、どうぞ！

第十二話　にらめっこ…？　俺は簡単には負けんよー！

にらめっこ…。

みなさんも子供のころに一度はやったことがあるのではないだろうか？

無表情、またはおかしいな表情をつくり、どちらかが先に笑ったら負け、というルールで雌雄を決するといったって簡単なものだが、それだけに奥が深い。

代表的なことの遊びのひとつであるが、これはある種の決戦でもあると言える。

声を出すまでとか色々とローカルルールもあるらしいが、俺の中のルールでは基本的に変顔オンリーである。

しかしまあ、なぜこんなことを言い出したのかというのだ…。

「……………」

「……………」

それは今まさに、にらめっこ中なわけで…。

しかもお相手は最近、我が孫呉に入ってきた一人の武将。  
甘寧さんである。

その甘寧さんは今も俺に鋭い視線を向けてきていますよ、はい。  
でも俺は…。

俺はあいつらのためにも簡単に屈するわけにはいかないんだー！！

彼女の名前は甘寧。

真名は思春というらしい。

もともとは江賊って奴だったらしいけど、水蓮にその腕を買われて  
今は蓮華に付いている。

いつもは政務をしている蓮華の手伝いや護衛をしているらしい。

いやはや、あの蓮華が政務をしているとか。  
すごく時間が流れた感じがするよね…。

感慨深いというか、年取ったっていうか…。

まあ、それは置いて。

問題はその甘寧さんである。

少し取っ付き難い雰囲気醸し出していることからわかるけど…。  
みんなに話を聞いてみると今まで笑顔になったのを見たことがないらしい。

たぶん真面目な人なんだと思うからそつとしておけばいいのに、なんとかその笑顔を見たいというアホな君主様が現れたのだ。

「というわけで蓮。思春を笑顔にしてください」

そしてこの無茶ぶりである

いやいや、あの人も人間なんだからきつといつかは笑ってくれると思うよ。

だからそれまで待てばいいじゃない。

「私はすぐに見たいの。それにあの子もその方が早くここに馴染めるかもでしょ？」

もう慣れたもんであるが俺の意見はすぐさま却下された。

むう…。

あの雰囲気但至少でも和らげば、周りともっと仲良くなれるのは確か…。

そこは水蓮の言うとおりなのかもしれないけど…。

「まあ、蓮じゃ無理だっていうのなら仕方がないけど…」

そう言つて水蓮はにやりと笑つた。

むむむ。

こやつ…。

俺が笑っている水蓮を睨んでいると、傍で話を聞いてきた姫様たちが話しに入ってくる。

「大丈夫よ、母様。蓮なら余裕余裕」

ね？　つといった感じで俺に話を振つて来る雪蓮。

「蓮…出来る？」

聞いているようにも聞こえるけど…。  
その目は期待に満ち溢れている蓮華。

「シャオも思春の笑つているとこみたーい」

弾けるばかりの笑顔を見せ、俺の逃げ道を完全に失くしてくる小蓮。

「もちろんタダではないわよ。お魚一週間分でどう？」

そして、水蓮のトドメの一撃。

.....。

……わかったよ。  
やってやるーじゃないかつ！

ミッション：気になるあの子を笑わせる！ が発生しました。

勝利条件：今日中に甘寧さんを笑わせること。  
敗北条件：上記が達成できないこと。

成功報酬はみんなうれしいお魚一週間分。  
なお失敗した場合はしばらくお魚抜きとなっているのでご注意を。

いささか俺に不利なような気がしなくてもないが…。  
まあいい。やってやんよ！！

そんなわけで、俺の絶対に負けられない戦いが幕を開けるのだった。

↓蓮が部屋を出た後↓

「もういっちゃった。意外と蓮って単純よね」

「うん、ご褒美には魚を出せば一発だしね!」

「あれは昔から変わらないのよね。本当に扱いやすいわ」

そんな三人の会話を横で聞きながら…。

「蓮…。色々頑張ってる…」

蓮華がそう呟いていたとかなんとか。

さて、まずは敵を知ろうと言うわけで、追跡をして見ることに。  
敵を知らずんば百戦危うからず、というやつである。

追跡して見れば、何かしらのヒントがあるはずと息巻いていたんだけど…。

結果は…。

うん、予想以上だった。

兵の鍛錬や街の警邏をしてても好きな物とか何にもわからない。

基本的に鋭い空気を醸し出してるし…。

おやっさん、隙がどこにもないぜい。

こいつは強敵だ…。

敵の強大さを確認した俺は、とにかく策を練ってみることにした。  
好きなものがわからなかったから、あと笑わせる手段で思いつくのは…。

くすぐりの計。

モノマネ。

一発ギャグ。

ショートコント。

むむむ。

どれも行ける気がしないぞ…。

そこまで考えていて気がついた。

あっ！？ 俺、ねこじゃん…。

考えたやつがどれも実行できないという罠。

仕方がないので、ねこの姿でも出来ることを考える…。

.....。

何も浮かばねえ…。

てか動物がきらいな可能性もあるし、アレルギーとかだったらどうするよ…。

あれ？ これって軽く詰んだ？

そんな状況に軽く絶望していた時。

俺の脳裏には水蓮たちの顔……ではなくて報酬の一週間分のお魚たちが浮かんだ。

お魚たちはつぶらな瞳で俺を見つめている。

…そうだ。

ここで諦めてどうするんだ！

俺がここで諦めたらあのお魚たちは……俺に食べて貰えないじゃないかな  
いか！

俺は腹を括った。

かくなる上は突撃あるのみである！

昔の偉い人もいつていたはずだ。

当たって砕けろと！ ジャパニーズ玉砕精神だと！！  
今こそ俺はその精神に則る！

俺は決死の覚悟で飛び出した。

「……………」

「……………」

こうして中庭で休憩中の甘寧さんとにらめっこしているわけなんだ  
けど…。

ダメです。

全然、笑ってくれないです。  
間抜けな顔をしたり、舌を鼻まで伸ばしてみたりと色々身体を張ってみたけど、少しも表情がかわらない。

おまけに…。

「…何がしたいんだ？」

そんなことを言われる始末。  
うう。もう心が折れそうです。  
てか折れた…。

さようなら、俺のお魚たち…。

というか俺の変顔、面白くなかったのかな…。  
祭とかは前、大爆笑してたのに…。

そんなことを思いながら傷心中の俺が爪を器用に使って地面にの字を書いていじけていると…。

「もしかして…私を笑わせようとしてくれたのか？」

甘寧さんが俺に疑問を投げかけて来る。

俺はそれにゃーと返事をしながら大きく頷いた。

「そうか…。…変な猫だな」

そう言つと甘寧さんは俺と視線を合わせるようにしゃがみ込んだ。そして、慣れない手つきで俺を撫でてくる。表情に変化はないけど、その雰囲気は少し柔らかくなったように感じた。

おそろおそろといった感じだけど、優しく触ってくれていることから動物が嫌いというわけではないみたいだ。

俺を慰めてくれているみたいだし、この人はいい人に違いない。そう思った俺は喉をごろごろ鳴らしながら、その手に頭をこすりつけて甘えることにした。

「私は余り動物には好かれなかったはずなんだが…」

そう言いながらも撫でる手は止めない甘寧さん。だんだんとうまくなってきたその手捌きが俺を夢の世界へと誘い始めた。

「ん？ 眠いのか？」

「にゃ〜」

俺がそう答えると、甘寧さんは座り込んで俺を膝の上に乗せてくれた。

そしてまた撫で始める。

んー、ねむ…。  
おやすみなさい…。

こうして俺はそのまま昼寝をするのだった。

くSIDE思春く

「眠ってしまったみたいだな…」

私は静かに眠ってる猫を撫でてやりながらそう呟いた。

たしかこの猫は孫家の飼い猫の蓮という猫だ。

猫神様饅頭というものもあるぐらい街でも民たちに好かれていて、城の中でもみんなに可愛がられている。

私が今お仕えしている蓮華様もとても可愛がられている様子で、よくお話をして下さい。

だから話には聞いていたのだが、直接見たのは今日が初めてだった。

しかし、直接見てみるとわかる。  
確かに可愛い。

始めはいきなり変な顔をして見せて、変な猫だと思ったが……。撫でてやると甘えてきて、すごくかわいい。そして…。

「にゃう」

どんな夢を見ているのやら…。

なにやら寝言を言いながら眠っている姿を見て、自然と頬が緩んだ。なんというかすごく和む…。

まだ仕事が残っているが、もう少しこのままでもいいかな。そう思いながら、私は蓮を優しく撫でるのだった。

「ちょうどその頃」

「うわ。思春が微笑んだ！」

「本当だ！　母様。思春が笑ってるよ。」

「やったね！　シャオちゃん！」

「母様…。そのネタは…」

陰から見ていた孫家ファミリーがいたとかいないとか…。

第十二話　にらめっこ…？　俺は簡単には負けんよー！！（後書き）

第十二話。終了です！

いかがだったでしょうか？  
思春さん登場の回でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしております！  
では。

## 第十三話 予感（前書き）

今回から少しだけシリアスになります…。

### 第十三話 予感

月日が流れるのは本当に速い。

気がつけば、雪蓮も蓮華も小蓮も大きくなつてた。

上の二人は毎日政務とかもしてるし、小蓮も勉強が大変そうだ。まあ、内二人は俺を連れ出してよく逃げ出しているけれど…。

今の呉は平和といつてもいい。

祭などの古参の将たちや思春や明命などといった新しく入ってきた将たちみんなが頑張ってくれている。

武官も文官も自分の力を余すことなく民たちのために使っていた。漢という国は荒れているが、ここの街のみんなも変わらず元気に生活出来ている。

これもみんなの頑張りのおかげだと思つと少し誇らしい。

そんな中、俺はというといつもと変わらずのんびりと過ごしている。しかし、ある意味ではねことというのは相当いいご身分なのではないだろうか。

寝て、食べて、寝て。遊んで、食べて、また寝る。

たまに連れ出されたり、無茶ぶりされたりすることもあるけれど。うん。本当に今が幸せだつて感じてる。

ずっとこのまま過ごしていけたらいいな。  
俺は心からそう思った。

満月の夜。

いつものように酒を飲んでいると水蓮が口を開いた。

「蓮…。劉表を攻めるわ」

いつもとは違った雰囲気だった。

戦のことでもいつもなら笑いながら話すのに、その時の水蓮はどうかおかしいと思った。  
何か焦ってる…？

「劉表、ね…」

話によると、最近、荊州の劉表が兵を集めていると暗部から報告が上がっているらしい。

呉の民たちが危険に晒されるのなら王として動かねばならない。

それは当然だと思うし、仕方のないことだとは思う。

だけど、なんでか俺はすごく嫌な予感がした。

別にになにか根拠があるわけじゃない。

水蓮たちが負けるとも思えない。

だけど…なんとなく何かが起こるような気がした。  
それも孫呉に悪いことが…。

それに水蓮の様子もどこか変な様に感じる。

そんなことを俺がしばらく考え込んでいると。

「何を深刻そうな顔をしているのよ？」

水蓮が俺の方を見ながらそう言うてきた。  
どうやら結構な時間、考えてたみたいだ。

「ん？ いや、ちょっと、ね」

「…もしかして心配してるの？」

「心配はいつでもしているよ。水蓮はいつも無茶するから…」

というが無茶しかないし…。

未だに最前線で戦いたがるのは総大将としてどうなのよ。  
いつも冥琳が頭を抱えているぞ…？

「あははは。いつも心配をおかけしてます」

「…お前、改める気ないだろ…」

俺はじとー、とした目で水蓮を見るが効果はもちろん無しだ。それを見て、はあくため息をつくと杯を空にする。

俺の方を見て笑っているのはいつも水蓮だった。さっきのは俺の気のせいだったのか……？

「蓮。ため息をつくとき幸せが逃げるわよ？」

「へいへい」

俺に酒を注ぎながらそう言ってくる水蓮。

俺はそれに適当に答えながら杯に口をつける。

気のせいならその方がいい。

戦前に不安になるのはいいことじゃないしな。

「それに、もし危なくなったら蓮が護ってくれるんでしょ？」

ちよつとおどけた感じで水蓮がそう聞いてくる。

いつもなら猫の俺に無茶を言うなって言うんだろっ。

だけど、気がつく俺はいつもとは違うことを口にしてた。

何が出来るか分からない…。

けど、この飼主様を絶対に護ってやる。

そんな誓いと共に…。

「…ああ。この命にかけても護つてみせるよ」

「っ！ …ふふふ。期待してるわよ」

水蓮は少し驚いた表情をした後。

笑いながらそう言つて杯を傾けた。

「大丈夫…。きっと大丈夫…」

その後、小声で何か呟いていたみたいだが俺には聞き取れなかった。

「ん？ 水蓮、何か言つたか？」

「なんでもないわよ。ほら蓮。私の杯が空になつたんだけど？」

「おっと、それは失礼しました。お嬢さま」

俺は恭しく頭を下げると酌をしてやるのだつた。

出陣の朝。

俺は部屋に置いてある箱の前に立っていた。  
その中には深紅のスカーフと蓮と刻まれている鈴付きの首輪が入っている。

昔から戦の時に俺が身につけているものである。  
それを見ると自ずと身体に気合いが入っていくのがわかる。

未だに嫌な予感は消えていない。  
こんなに不安な気持ちで戦場に出るのはもしかしたら初めてかもしれない…。

「蓮、少し動かないでね」

小蓮に首輪をつけて貰う。

りん、と綺麗な音を立てる鈴。  
昔にお守りがわりといって子供たちに貰ったものである。  
戦場でいつでも俺を守ってくれる大事な宝物だ。

次は右手に深紅スカーフを巻いてもらう。

スカーフの赤は孫呉の赤。  
今までの孫呉の礎となった者達の血の色。  
孫呉のために戦った英霊たちの色だ。

「よし、完成！……うん、蓮。これでバッチリだよ！」

「にゃー」

褒めてくれた小蓮にお礼を返す。

そして今回の戦はお留守番の小蓮に外まで見送ってもらう。

広場に行くと、もうみんな集まっていた。

兵達も己が武器を持ち、整列している。

その表情はみな凛々しく、逞しい。

まさに孫呉の精鋭たちと呼ぶにふさわしい者達だと思う。

俺は歩いて水蓮の下に向かい、定位置である水連の馬に跳び乗った。

「ふふふ。蓮、似合ってるわよ」

乗ってすぐに水蓮にそう言われた。

決して嫌な気はしないが、特別にうれしいとは感じなかった。

出陣の時にいつも言われてるし…。

水蓮は俺の頭を一撫でした後。

顔を引き締まったものに変える。

雰囲気も王のものに切り替えたようだ。

「よし、出陣よー！」

水蓮がそう言うのと兵たちが雄叫びをあげる。  
それは真っ青な空へと大きく響いていった。

俺は右手に巻かれた深紅のスカーフを見つめる。

またここにみんなで帰って来よう。  
そして、みんなで笑おう。

だから…英霊<sup>みんな</sup>たち…。  
俺に力を貸してくれ。

こうして俺たちは戦場へと足を進めるのだった。

## 第十三話 予感（後書き）

第十三話。終了です！

いかがだったでしょうか？

次回の繋ぎみたいなお話でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

## 第十四話 風と共に去りぬ

劉表との戦が始まった。

敵の兵数はほぼ同じ…。

しかし、こちらは孫呉の誇る精鋭たちと優秀な将たち。戦は終始、こちらが優勢に進めていた。

「呆気ないわね……」

雪蓮が引いていく劉表軍を見てそう呟く。

その顔には不完全燃焼だとしても書いてあるようだ。

「雪蓮…戦はまだ決したわけではない。気を抜くな」

「冥琳…。でも、つまんない」

「確かに呆気ないのお」

「祭殿まで…。はあ」

冥琳が雪蓮を宥めているがほとんど効果はなく、さらに祭も便乗してくる。

冥琳は頭を押さえ、深いため息をついた。

「にゃ」

俺は慰めの意味も込めて冥琳の足に頭を擦りつける。

「蓮…。お前だけが私の味方だ…」

そう言うと冥琳は俺を抱きかかえ、撫でて来る。

その姿は仕事に疲れた一人暮らしのOLのようにも見えた。

「なによ…。蓮は冥琳の味方をするの…」

「姉様…」

そう言つて頬を膨らませる雪蓮。  
それを見て蓮華もため息をつく。

するとその横に冥琳が近づき、口を開いた。

「蓮華様…蓮を撫でますか？」

「ええ、そうさせて貰うわ…」

そして二人して俺を愛でてくる。

今、戦の最中だよ？ とは言わないでおこつ。

何というか、真面目組のみなさん。

いつもお疲れ様です…。

そんなやり取りをしている中。

いつもなら、率先して話しに入ってくる水蓮が妙に大人しい。

俺がそれを不思議に思っている…。

戦場に動きがあった。

劉表軍が撤退をはじめたみたいだ。

「堅殿！ 敵が撤退を始めましたぞ！」

祭がその動きを見て、すぐに水蓮に声をかける。

水蓮はその声に頷くと…。

「よし！ 追撃に移るわ！ 祭、私に付いてきなさい！」

「応！」

「母様！ 私は！？」

「…雪蓮は留守番よ。あんまりわがまま言わないの」

「そんなあゝ」

打ちひしがれた顔をしている雪蓮を尻目に、水蓮は祭を引き連れて追撃に出ていく。

どんどん小さくなっていく水蓮の姿を見ると、俺の頭のどこかが警鐘を鳴らした。

マズイ…。

何がマズイのかはわからないけど…。

とにかくマズイ！！

「ん？ 蓮？」

「蓮？ どうかしたの？」

雪蓮と蓮華が俺に声をかけてくるが、俺はそれに何も返さない。

行かなくちゃ！

ただ漠然とそう思った。

「蓮！？ どこに行くの！？」

「蓮！ 待ちなさい！」

後ろで雪蓮たちが何か言っているが……それを聞き流して俺は走り出した。

水蓮の下に……早く……！

〈SIDE 水蓮〉

劉表との戦は私たちが優勢だった。

戦の前に感じた嫌な予感も今は感じない。

最近、重く感じていた私の身体も今はなんともないみたいだ。

私がそんなことを考えていると、劉表軍が撤退を始めた。

今が好機ね…。

早くこんな戦いを終わらせて、こっちを心配そうに見ている蓮を安心させてあげましょうか。

「よし！ 追撃に移るわ！ 祭、付いてきなさい！」

私はそう言つと、祭を連れて追撃に移るのだった。

山間部へ逃げていく劉表軍の逃げ遅れた兵達を討ちながら、尚も追撃していく。

横を見てみると激流の流れる谷があるみたいだった。

足場が悪く、体力の消耗や士気の低下を及ぼすような場所ではあるが、孫呉の兵達はなんなく進んで行く。

そして、もう直ぐ敵軍の殿に食いつくと言つ所で…。

突然、森の中から敵兵たちが飛び出してきた。

旗には、黄と書かれている。

「くっ、伏兵ね！」

「そのようじゃな……」

私と祭は追撃を止め、その場に急停止した。  
逃げていた敵兵たちも引き返して来て、兵の数はあちらの方が多くなっている。

どうやらまんまと嵌められてしまったみたいだ。  
けど、そう簡単にはやられないわよ！

私と祭は手勢を率いて迎撃に移った。

「こんつの！」

私は向かってくる敵兵を南海霸王で叩き斬る。  
戦況はあんまりいいとはいえない。

数を頼りに攻めてくる敵に、私たちはどんどん押されていった。  
祭も矢を使い切り、今は剣を振るっている。

このままじゃあ、マズイ…。  
なんとかしなくちゃ…。  
私がそう思った時。

「堅殿！」

祭の切羽詰まった声が聞こえてきた。  
その声で私が後ろを向くと…。

一本の矢が私に向かって飛んできた。  
それをなんとか南海霸王で防いだが、体勢が完全に崩れてしまう。  
そして、その隙について兵士が斬りかかって来た。

「孫堅っ！ 覚悟——！！」

兵士の振りかぶった剣の動きがすごくゆっくりに見える。  
ダメ、これはかわせそうにない。

そして悟った。

ああ…私はここで死ぬんだなって。

今までの人生を思い返してみる。

私は全力でここまで駆け抜けてきた。

前を向いてまっすぐ進んできた。

雪蓮なら立派に私の後を継いでくれる。  
それを支えてくれるみんなもいる。

だから…何も後悔することはない。

ああ、でも蓮の無敗神話崩しちゃったな…。  
それが少しだけ残念かな。  
それともう一緒にお酒を飲めないことも…。

蓮…。

もう会えないみたい…。

雪蓮達のことをお願いね…。

そう最後に祈って私は目を閉じた。  
死を受け入れるために…。

どん、と押された衝撃と綺麗な鈴の音が聞こえた。  
それと同時に剣が何かを切り裂く音も聞こえる。

私の身体には何も痛みが来ない。

不思議に思った私が目を開けると、目の前には…。

蓮がいた。

本陣で雪蓮たちと一緒にいるはずの蓮が目の前にいた。

ただいつもと違うのは…。

その真っ白な毛が真っ赤に染まっっていることと…。

いつもの元気な姿じゃなくて、地面に倒れていることだ。

「れ、蓮？」

私が声をかけても、蓮は何も答えない。

それどころかピクリとも動かない。

嘘よね…？

冗談、だよ…？

私は蓮に手をおそろおそろ伸ばそうとする。

しかし、それより前に…。

「ちっ！ 猫のくせに邪魔しやがって！」

目の前の兵士が倒れている蓮を蹴り飛ばした。  
蓮はゴロゴロと地面を転がると、そのままゆっくりと谷に落ちていく。

「蓮っ！」

間に合って！

そう思い、私は手を精一杯伸ばして蓮を捕まえようとする。  
しかし、その手は僅かに届かず空を掴んだ。

蓮はそのまま谷底に落下していく。

そして……谷底の激流の中に姿を消してしまった。

「いやあああああ————っ！——！！！」

辺りに私の絶叫が響き渡る。

私の横では蓮の巻いていた深紅のスカーフがひらひらと揺れていた。

## 第十四話 風と共に去りぬ（後書き）

第十四話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

第十五話　　だけど…きみがいない。　（前書き）

今回、視点の変更が多いです。  
ご了承ください…。

## 第十五話　　だけど…きみがいない。

〔SIDE雪蓮〕

突然駆けだした蓮の後を、私は軍勢を率いて追いかけている。

あんな蓮の姿は初めて見た。

きつと何かがあったんだと私の勘もそう言ってる。

あの時の蓮はすごく焦っていた。

それこそ私たちの声が届かないくらいに…。

もしかしたら蓮と母様にしかわからない、何かがあるのかもしれない。

…そうだとしたら、少しだけ悔しい、かな。

私がそんなことを考えていると、戦っている両軍が見えた。  
しかも、こちら側が押されている。

母様達が危ないっ！

そう思った私が救援のために突撃の指示を出した、まさにその時。

「いやあああああー！ー！ーっ！ー！！！」

天にまで響くような母様の絶叫が聞こえた。

いつもの母様らしくない叫び。

何かがあったんだ！

急がなくちゃ！！

私が急いで母様の下に向かうと、何か赤いものを握り締め、剣を振るっている母様がいた。

その表情はどこか鬼気迫るものがあり、本物の虎のように敵を殺していた。

「母様っ！」

「……雪蓮。これを持っていてくれないかしら……」

私は母様に声をかけると母様はこちらを向いた。  
そして、母様があるものを渡して来る。

「えっ！？ これって……」

母様がさっきまで握り締めていったもの。  
赤色のそれに私は見覚えがあった。

さっきまで蓮が身に着けていた、深紅の布。  
なんでこれを……？

少しの間考えた後、私は気がつく。

いない……。

周りを見渡してみる。

いない…。

蓮が、いない…。

「蓮の大事なものをあいつらの血なんかで汚したくないの…」

母様がいつもより低い声でそう言った。

良く見てみると、目も赤い。

考えたくない予感が私の頭を過ぎる。

「か、母様…。蓮は…。」

「……………」

母様は私の問いに何も答えず、敵兵に向かって行った。  
でも一瞬だけ、辛そうな顔をしたのを私は見逃さなかった。

蓮は死んだの…。

そう言われた気がした。

泣きたい…。

悲しみたい…。  
泣き叫びたい…。

でも、それより先にやることがある。  
私は剣を握る手に力を入れた。

「許さない…！」

お前たち…！  
全員殺してやるっ…！！

〈SIDE祭〉

策殿が連れてきた軍勢を加えた儂らは怒濤の反撃に移った。  
特に堅殿と策殿の勢いが凄まじい。  
今も二匹の虎が劉表軍を蹴散らしておる。

…それは当然じゃろ。

あの蓮が死んだのだから…。

あれだけ可愛がっていたのじゃ…。

大事な家族だったのじゃ。

怒らないわけがない…。

蓮はただの猫ではない。

勿論、見た目などはどこからどう見ても猫じゃが…。

我ら孫呉の者からすればそれだけではない。

呉の民は皆、子供の頃から蓮と遊び、可愛がる。

そしてそれは大人になってからも変わることはない。

じゃからあんなにも多くの者達に好かれている。

孫家の守り神。

そう言われているほど、蓮は孫呉の象徴にもなっているのじゃ。

それが殺されたのじゃ。

何も怒っておるのは堅殿や策殿だけではない。

兵達、皆が怒っておる。

その貌をみればよくわかるわい。

この士気の異常な高さ。  
この怒涛のような攻め。

おまえら  
劉表軍はやってはいけないことをしてしまったんじゃない…。  
覚悟するんじゃない…。  
ああなったあ奴らは簡単には止まらんぞ。

かくいう儂も相当怒っておってのう…。

蓮の仇…。  
今ここで討たせてもらおうかっ！！

くSIDE水蓮く

斬る。斬る。斬る。  
向かってくるものは全部斬る。  
逃げるものも全部斬るっ！！

死んだ…。

蓮が死んだ…。

私を庇って死んだ…。

嬉しかった。

私が劉表を攻めるって言った時。

少し嫌な予感がしていたあの時に。

「この命にかけても護ってみせるよ」

蓮がそう言ってくれただけで、嬉しかった。

安心できた。

きっと大丈夫だって思えた。

けど…。

こんな結果は望んでいなかった…。

生かしてくれたのは嬉しいわよ！

庇ってくれたのも嬉しいわよ！

でも…。  
だけどね…。

蓮…。

あなたがどこにもいないじゃない…。

それじゃあ、ダメなの…。  
そんなことされても…嬉しくもなんともないのよっ！！

私は思いのすべてを込めて剣を振るう。  
振るう剣は南海霸王。

孫家に伝わる宝剣。  
こんな私怨で振るっていいものじゃないのはわかってる。

だけど、今は振るわせて…。  
そうしないと、あのバカな猫おにに対する怒りとそれ以上の自分に対する怒りでどうにかなってしまいそうだから…。

私は剣を振るった。  
怒りとか悲しみとか全部込めて…。

何人、斬ったのだろうか…。  
気がつけば辺りには数多くの屍が落ちていた。

劉表軍が撤退していく。  
一時はあんなに攻めてきていたが、すべて蹴散らした。  
伏兵の将だった黄祖も討った。

雪蓮が追撃に行こうとしたので私はそれを止めた。  
こちらの兵達も少なくない損害を受けている。  
兵士達も行きたそうな表情をしてはいたが、追撃はさせない。

「母様、なんでよ！　まだ敵が残ってるわ！」

「雪蓮、落ち付きなさい」

興奮している雪蓮を落ち着かせようと宥める。  
その時、少し胸に違和感を感じた。

「なんでよ！　蓮が殺されたのにつ！　なんでそんな風にしていら

れるの!？」

「兵達も疲れているわ…。また伏兵もいるかもしれない。だから…」

「だから…。だから蓮の仇は取らないでいいっていうの…？ 蓮が死んだのは母様のせいなのに!！」

雪蓮の言葉が私の胸に大きく刺さった。  
わかってる…。

私のせいだっていうのはわかってるわよ…。

私の胸がズキズキと痛み出す。

「さ、策殿!」

「兵達に聞いたわ。母様を庇って、蓮が斬られたって…！そして谷に落とされたって!」

「……………」

祭が雪蓮を止めようとするが、雪蓮は止まらない。

私は何も言えなかった。

だって全部、事実だもの…。

胸の痛みはどんどん大きくなっていく。

「それなのに…庇って貰ったくせに…！ なんで仇も取らないのよ

！  
」

泣き叫びながら雪蓮がそう言った。  
私は静かに口を開く。

「雪蓮…。私は……っ、くっ！」

言葉の途中で私の胸に激痛が走った。  
その今までにないくらいの痛みには私はその場に倒れてしまう。

「っ！ 堅殿っ！」

「母様…？」

慌てたような祭の声と、呆然としたような雪蓮の声が聞こえる。  
だけど私は、自分の意識がどんどん遠くなって行くのを感じた。

「堅殿！ しっかりするんじゃ！ 堅殿っ…！」

「母様！ ねえしっかりして！！ 母様——っ…！！！」

祭と雪蓮の叫んでいる。

それをどこか遠くに感じながら思う。

ごめん…。

返事できないや…。

そして私は完全に意識を失ったのだった。

とある河原

「ん？ あれは…」

少女は河原であるものが目に付いた。  
良く見ると一匹の猫が倒れている。

その身体には刃物でつけられた傷があり、全身はびしょ濡れだった。

「まだ、生きているわね」

まだかすかだが、その猫は呼吸をしていた。  
それは弱々しいものだったが、どこか強い意志を感じた。

「そう…。貴方はまだ生きたいのね」

少女がそう言うと、その猫はぴくりと少しだけ動いた。

少女はそれを見てくすりと笑うと、その猫を抱きかかえる。

「いいでしょう。助けてあげるわ……。この曹孟徳が」

第十五話　　だけど…きみがいない。（後書き）

第十五話。終了です！

いかがだったでしょうか？

あれ？　作者は呉が嫌いな…？　って思った方。

ごめんなさい…。あさきゆめみし（曲名書いていいのかな）を聞いていたらこんなことにつ！

あつ！　でも呉は大好きですよ！

まあ、別にどの国が嫌いとかはないんですけどね！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

第十六話　あの～。ここはどこなのでしょう？　（前書き）

お気に入り登録が1000件を超えてしまいましたっ！

正直、すごく嬉しいです！

これからもみなさんが、楽しんでもらえるような作品にしていけるように頑張りますので応援して貰えると嬉しいです！

第十六話      あゝ。      ーこはどこなのでしょー。

水蓮に敵兵の剣が振り下ろされる。  
しかし、水蓮は動かない。

それだけじゃなく、水蓮はどこか諦めたような…悟ったような顔をした。

ム力ついた。

すっげえム力ついた。

俺が護ってやるっていったのに…。

あんな顔をした水蓮にどうしようもなく腹が立った。

そして気が付いたら飛び出していた。

まあ、斬られた時はヤバいかなって思ったけど…。

俺にはまだしないといけないことがある。

いや、できた…。

俺はあのバカに一言言ってやらないといけない。

簡単に諦めんな！　って…。

だから…。

俺はまだ死ねない…。

死ぬわけにはいかないんだっ！！

「う、にやう？」

最初に感じたのは眩しいほどの日の光だった。

俺は気がつくと寝台の上にいた。

一瞬、建業に帰って来たのかと思ったけど、なんとなく寝台の感触が違う。

部屋を見渡しても、俺が知っているものとはやっぱり違った。

ここはどこだ…？

そんなことを考えるが、じっとしていても何もわからない。

なので、とりあえず起き上がろうと身体に力を入れることにした。

すると…。

「にゃあ〜！」

全身に猛烈な痛みが走った。特に脇腹が痛すぎる。やばっ、すごく冷や汗が出て来たんですけど…。

ここはゆっくりと呼吸を整えるんだ！

なるだけ動かないことが一番大事。

少しでも動いたらまた泣きを見ることになってしまう。

確認事項を頭に入れて俺が呼吸を整えようとしたまさにその時。

「おっ！ 目が覚めたのか!？」

どん、と音を立てて扉を開けるとともに女性が大声を出して入ってきた。

俺はそれにビククリして身体を動かしてしまい、身体にまた激痛が走る。

「ん？ 何を悶えているんだ？」

いやいや、あんたのせいだからね…。

すごく突っ込みたいけど、痛くてそれどころではない俺だった…。

痛みがなんとか引いた後。

俺は女性と対面した。

女性は黒髪で赤いチャイナ服を着ている。

「しかし、お前は運がいいな。もし華琳様が助けてくれなかったら確実に死んでいたぞ？」

「にゃ〜？」

いや華琳って誰？

っていうか貴方も誰なんですか？

俺は疑問を投げかけてみる。

「ん？ そうだぞ。華琳様は素晴らしい方なのだった！」

ありゃ、ダメだ。通じないや…。

むう。呉のみんなだったら会話できるのに…。

しかし、これが普通の反応なんだろう。

そう思うと呉の人達って…いや、何も考えまい。

「…それでだな…。その時の華琳様が……」

まあとりあえず、この人がその華琳様って人のことが大好きなのはよくわかったかな。

俺は適当な所で相槌を打ちつつ、話を聞くのだった。

「……というわけで華琳様は本当に素晴らしいのだ！ 良くわかったか？」

「にゃー」

かなり長いお話がやっと終わったようなので、頷きながら返事をしておく。

目の前の女性はそれを見て、うれしそうに頷いた。

「うんうん。お前、中々話のわかる猫だな…」

つ、疲れた。

ケガ猫にこれはちと辛いぜい…。

でも、この人は何をしにここに来たんだろう？  
時間とか大丈夫なのかな…？  
俺がそんな風に思っていると…。

「あつ！ しまったー！！ 華琳様に目を覚ましていたら呼ぶように言われていたんだっ！」

女性は大声でそう言うと、頭を抱え出した。

どうやら、噂の華琳様とやらに用事を頼まれていたみたいだ。

「マズイ。すごくマズイ…。このままでは華琳様に叱られてしまう

…」

今度は落ち込み出した女性。

すごく忙しい人だなーと思いつながらも、俺のせいで怒られるのはなんか申し訳がないなとも思った。

仕方ない…。

少し我慢しよう…。

俺は寝台から起き上がると、女性の足に頭を擦りつけた。身体に走っている激痛は我慢します。でも涙がでちゃう…。だって、ねこなんだもん。

「…慰めてくれるのか？」

「にゃーん」

女性がそう言ってきたので俺は返事を返す。元氣出せよって意味も込めて…。

「そうか…。うん、お前は中々…いや、かなりいい猫だな」

そう言つて今度は何やら考え始める女性。本当に忙しい人だな…。

「よし、決めた！ お前にいいものをあげよう！」

そう言つと女性は胸を張つた。

いいもの…。

できればお魚がいいな…。

いや、俺はお魚を所望しますぞっ！！

「んー。そう言えば、お前の名前は何と言つのだ？」

女性が突然名前を聞いてきたので、俺は首を伸ばし、首輪に付いている鈴を見せる。

しかし、なぜにこのタイミングで？

「んー。蓮、というのか？」

「にゃん！」

そうだと言わんばかりに俺は元気よく答える。  
そのせいでまた痛みが走つたのはご愛敬だ…。

「そうかそうか。ならば蓮！ お前に私の真名を預ける！」

ああ、真名ね…。

つて、ええ〜！？ 何、この急展開…。

「あつ！ 真名というのはな…。すごく大事なものだぞ？ お前がいいやつだと思つたから預けるんだからな？」

俺の驚きを余所に女性は真名の説明をしてくれる。  
それはわかつてるけど…。

「まあ、とにかく私の真名は春蘭だ。よろしくな、蓮！」

そう言う女性：春蘭は俺の頭を撫で始めた。  
まあ、預けてくれるのなら受けておこうかな。  
気を許してくれてるってことだし…。

「にゃあ！」

俺がそう考えて返事を返すと、春蘭は嬉しそうに笑い、そして俺をガツチリ掴んだ。

「よし、蓮。ならば早速、華琳様の所に行って一緒に怒られようではないか！」

「にゃ？」

あれ？ 雲行きがなんか怪しくなってきましたよ。  
嫌な予感もひしひしと感じますよ…。

「うーん、話はこうだな。私が部屋に行くと、目を覚ましたお前が逃げ出してしまった。それを私が追いかけて捕まえていたら遅くなつたと。うむ、完璧だ」

いやいや、穴だらけだよ！？

まず、前提条件として俺は今、走ったりできないし…。  
というかその理由だと俺が悪者に…。

はっ！ まさかそれが狙い…。

春蘭……！　なんて恐ろしい子！！  
というか、真名もこのために教えたのかっ！

驚愕する俺を余所に春蘭は意気揚々と部屋を出る。  
俺を逃がさないように離さないままで…。

はあ…。もうどうにでもなれ…。  
そんな投げやりな気持ちな俺はこの後に出会う。

一人の女の子に…。  
霸王と呼ばれる女の子に…。

第十六話。 あつ。 ここはどこなのでしょう？ (後書き)

第十六話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

まだ華琳様は出ませんでした。

春蘭のキャラがおかしくないか、少し心配だったり…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## 第十七話　お猫様と霸王様。

目の前に女の子がいる。

金色の髪で、宝石みたいに綺麗な青い目をした女の子。

彼女が纏っているのは凡人とは一線を介した雰囲気。

彼女に初めて会った人はその王たる覇気によって気押されるだろう。

そして、ある者は心酔し、ある者は恐怖する。

そんな空気を彼女は出していた。

たぶん、彼女に会った人は初めに思うだろう。

この人は人の上に立つべき人間だ、と…。

だけど、俺は少しだけ違った。

王たる器の持ち主だとかそんなのは関係なく…。

彼女にはただの女の子に戻っていられる時間はあるのかな…？

その身に纏った鎧を…その仮面を…脱げる場所はあるのかな…？

そんなことを思い、彼女のことが少しだけ心配になった。

「春蘭…。ずいぶん遅かったわね…」

華琳という人が口を開く。

その声には不機嫌さが少し滲み出ていた。

「は、はい。私が部屋に行くといきなり蓮が逃げ出しまして…」

少し慌てて春蘭が言い訳を始める。  
あんまり動揺すると嘘だつてばれるよ？ と俺が思ったのはここだけの秘密だ。

「蓮…？」

「この猫の名前です。この首輪の鈴にも彫ってありました！」

そう言つと春蘭は俺を前に突き出した。  
前に出された俺は宙ぶらりん状態である。  
なんかすごく間抜けっぽい。

「ふん、なるほどね。ところで春蘭…。嘘をつくのなら、もう少し上手くつきなさい」

「べ、別に私は嘘にやど…」

うわー。

余裕でばれてるよー！！

しかも春蘭、噛んでるし…。

「とぼけてもダメよ。だいたい、今も自分で歩けないその子が逃げられるわけがないじゃない」

それはごもつとも。

俺、今も春蘭に抱えられてる状態だしね…。

「うつ、それは…」

「そう、春蘭は私に嘘をつくのね…。悲しいわ」

そう言くと華琳さんは悲しそうな顔を作った。

だけど、手で隠した口が少し笑っている。

さすがにこれは嘘だって春蘭も……。

「っ！ 華琳様！ 申し訳ありません！ 蓮と話をしていたら遅くなってしまいました！」

気付かなかったー！！？

春蘭……なんて素直な子っ！！

「猫と話を…？」

そう呟くと華琳さんは少し怪訝そうな顔を俺の方に向ける。

ちょうど俺もそっちを向いていたので、ばっちり目と目が合った。

「にゃ〜」

また春蘭が嘘をついたと思われるのは可哀想なので…。俺は大きく頷きながら返事をした。

「へえ、人の言葉が分かるみたいね。始めまして、蓮。私は曹 孟徳よ」

少し笑みを浮かべながら、俺に自己紹介をしてくれる華琳…いや孟徳さん。  
やっぱり勝手に真名で呼ぶのは無しだよね！

「にゃん！」

「ふふふ。本当に賢いみたいね…。それに…」

どうもです、孟徳さん！

というわけで元気よく挨拶を試みる。  
それを見た孟徳さんは笑みを深くすると、俺を抱きかかえ、顔を近づけてきた。

「いい瞳<sup>め</sup>をしているわ。とても強い意志のある瞳……」

そして俺の瞳をしっかりと見つめてそうやってきた。

強い意志、ね。

意志…何かを成し遂げようとする心。

それにしてもいい瞳をしているなんて、に直接言われたのは初めて

だ。

「貴方はとても気高く、美しい」

それはたぶん彼女の中での最大級の賛辞であろう。  
とても猫に言うような言葉ではない様にも思ってたけど…。

それにそれを言うのなら、俺は孟徳さんの方がすごく気高くて綺麗  
だと思うよ？

「ありがとう。そう言っても貰えると嬉しいわ」

そう言っていると孟徳さんは嬉しそうに笑った…。  
ん、あれ？　もしかして考えが伝わってる？

「何故なのかしらね…。貴方の瞳を見ていれば、何を思っているか  
良くわかるわ」

おう…。まさか会話できるとは…。  
春蘭とは出来なかったのに…。

「春蘭…？　あら、真名で呼んでいるの？」

ああ、何でか預けてくれたんだよね。  
理由はよくわかんないけど…。

「そうなの…。なるほどね…」

すると、孟徳さんは何やら考え始める。

どうかしたんだろうか？

「それじゃあ、私も預けるわ。私の真名は華琳よ」

えっ！？

マジで…！？

そんな簡単にいいのかな？

「いいのよ、私は貴方のことが気に入ったもの」

そっか…。ならよろしくっ！

あと遅くなっただけど、華琳。助けてくれてありがとう。

俺はぺこり、と頭を下げる。

「ええ、よろしく。後、そのことは気にしないでいいわよ、ただの気紛れなもの」

気紛れでも華琳が助けてくれなかったら、俺は死んでいたと思うし…。

だから、ありがとう。

いつかこの恩は必ず返すからっ！

「そう。まあ期待しないで待っているわ」

そう言うとき華琳はふわりと笑い、俺の頭を撫でる

その時の笑顔はさっきまでのものとは違い、年相応のものだった。

「あのく、蓮？ 華琳様？」

その後も少し俺と華琳で話をしていると、おそろおそろ春蘭が話しかけて来た。

そういえば春蘭……影薄くなつてたね…。

あつ、別に忘れてたとかではないよ？ ホントだよ！？

「あら春蘭、まだ居たの？」

「か、華琳様」

ひでえ…。

華琳ってドSなのかな…？

ほら、春蘭が泣きそうな顔をしてるよ？

「ふふふ、冗談よ」

その楽しそうな顔。

やっぱりドSみたいだ…。

てかアホな子とドSっ子って…。

まだ二人しか会ってないけど、この人はみんなキャラが濃いな…。  
二人のやり取りを見ながら、そんなことを思う俺なのであった。

＼SIDE華琳＼

私は今日の分の政務を黙々と片付けていた。

私がこの陳留を治めてまだ日が浅い。

まだやらなければならぬことは山ほどあった。

次の書簡を手に取り、ふと考える。

あの猫は目を覚ましたのかしら…。

河原であの子を拾ってからもう一週間。

あの子は未だ、目を覚まさない。

大きな刃物で斬られた傷とどこかで打ちつけたのであろう全身の打撲。

正直、生きているのが不思議なほどの大怪我だった。

けどあの時、今にも死んでしまいそうな状態だったあの子は、それ

でも必死に生にしがみついていた。

生きたい…生きなきゃいけない…。

私にはあの弱々しい呼吸がそう言っているように聞こえた。

無様な生より誇り高い死を…。

私は常にそう思って生きている。

けど…。

なぜだろう…。

その時のあの子の姿が、とても尊いものだと感じたのは…。

その今にも消えそうで消えない命の灯が、とても綺麗だと感じたのは…。

気が付くと、完全に手が止まっていた。

いけない…。

まだ片付けなければならぬ書簡が残っているんだった。

私は頭を切り替えて仕事に戻る。

それでもあの子のこと少しかけ…ほんの少しだけ気になったので、少し様子を見に行つて貰うことにした。

私も秋蘭も書類仕事で忙しい。

今、手が空いているのは春蘭だけだった。

それで春蘭に頼んだのだが…遅い。

すごく遅い…。

自分で見に行こうかしら…。

私が半ば本気でそう思っていると、扉が開き、春蘭が戻ってきた。あの子を連れて…。

春蘭が連れて来たこの子の名前は蓮、というらしい。しかも、どうやら人の言葉を理解できるみたいだ…。

私が自己紹介してみると、よろしくとでも言うように鳴く蓮。不覚にも、少し可愛いと思つてしまったのはここだけの秘密だ。

私は蓮の瞳を見してみる。

その真つ赤な瞳は、とても澄んでいて強い意志と光が宿っていた。その瞳を見ていると、こちらが吸い込まれてしまいそんな感覚に陥

る。

美しい…。

純粹にそう感じた。

それと同時に蓮は普通の猫ではないとも思った。

まだ蓮には他になにか秘密がある、そんな気もした。

もしかして私が蓮を助けたのは…。

私が蓮と出会ったのは…天命なのかもしれない。

私は自分が映っている蓮の深紅の瞳を見ながら、そう思っていた。

**第十七話　お猫様と霸王様。（後書き）**

第十七話。終了です！

いかがだったでしょうか？  
遂に華琳様登場でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

第十八話　最近って…そうなんだね。

華琳が春蘭を弄って遊んでいるのを見ていると…。  
がちやりと扉の開く音がした。

「おや？　何やら楽しそうですね」

「あら、秋蘭。もう仕事は片付いたの？」

入ってきたのは青い髪の落ち着いた雰囲気的女性だった。  
口調からすると、華琳達とも親しいみたいだ。

「はい、今日の分はすべて。ところで…姉者がまた何かしたのですか？」

女性…秋蘭さんは華琳の問いに答えると、そう聞き返した。

「秋蘭！　別に私は何もしてないぞ！」

秋蘭さんにそう言つと春蘭は少し、頬を膨らませる…。

姉者…。

春蘭が姉者…。

つて！？

「にゃあああ！？」

いかん、ビックリしすぎて思わず声を出してしまった。

そのせいで三人の視線が俺に集まる。

うつ。

そんなに見ないでもらえると嬉しいな。

「蓮、一体どうしたのだ？」

「にゃ、にゃあ〜」

頭にクエスチョンマークを浮かべる春蘭。

言えない…。

春蘭が姉だとは思えないなんて本人には言えない…。

俺は内心冷や汗を掻きながらも、可愛らしく鳴いて誤魔化そうとする。

よし、春蘭ならこれで誤魔化せ…。

「春蘭が姉と聞いて驚いたみたいよ？」

「にゃ！？」

うおい！

華琳さん！？ 何て事をいうのさ！？

「ふふふ…」

華琳に抗議の視線を向けるが、意地の悪い笑顔で返された…。

悪女や。

ここに悪女がおるっ！

「なにいゝ？ おい蓮っ！ お前は私が姉らしくないというのか！」

華琳がそんなことを言うから案の定、春蘭が絡んできましたよ…。大丈夫。秋蘭さんの方がお姉さんっぽいとか、少しも思っていないから落ち着いて、ね？

「秋蘭の方が姉っぽいらしいわよ」

ちよっ、華琳さん。

もう誰かあの子を止めて…！

「れ〜ん〜？」

えっと、春蘭…？

とりあえず、その物騒な剣を仕舞うことから始めようか。ていうかそんなの食らったら俺、一発でアウトだから！？

前門の春蘭に後門の華琳。

俺はここで終わってしまうのか。

俺がそんな状況に軽く絶望していた時、救いの女神が現れる。

「まあ少しは落ち着け、姉者。その子も怖がっているぞ？」

「秋蘭。しかしだな…」

その女神は青い髪の女性…秋蘭さんだった。

宥めるような口調で見事にあの春蘭を押さえている。

おおっ！

まさに救いの女神っ！

それいけ、ぼくらの秋蘭さん！

「華琳様も…。あんまり姉者を煽らないでください」

「ふふふ、悪かったわ。つい、ね？」

華琳はそう言うけど、顔が笑っている。

華琳さん？ 貴女、絶対に反省してないですよね…。

俺が華琳の方をじと、と見ていると…。

「それはそうと、もう目が覚めたのだな」

「にゃん！」

秋蘭さんが俺にそう聞いてくるので、返事を返す。

そして、ついでに秋蘭さんに頭を擦りつけて愛想を振りまいた。

この三人の中ではこの人が唯一の良心だし…。

さっきのお礼も込めてみた。

「そうか、元気になったのなら良かった…。しかし、人懐っこい猫だな…」

秋蘭さんはそう言う俺を撫でてくる。

その顔には少し笑みが浮かんでいた。

「どうもその子は、人の言葉がわかるみたいなの。だから秋蘭も自

己紹介をしなさい。私と春蘭は真名も預けたわ」

「はい、華琳様。私の名前は夏侯 妙才だ。真名を秋蘭という、お前の名は？」

華琳がそう言うと、秋蘭さんは自己紹介をしてくれた。

俺も名も聞かれたので、春蘭の時と同じように首輪を見せる。

「蓮、か。よろしく、蓮」

「にゃ！」

はい、よろしくです！

ここで一番頼りになるのは貴女だと思ってますから…。

何かあったら助けてね！

「それとさつきは姉者がすまなかったな」

そう言うとすまなそうな顔をしてくる秋蘭。

俺は気にしてないよ、といった感じにゴロゴロと喉を鳴らしながら思う。

本当にしっかりしてる妹さんや…。

それにしても秋蘭といい、蓮華といい、最近妹の方がしっかりする傾向にあるのかな…。

なんというか姉のみなさん…もっと頑張つて！

「あら？ 蓮は秋蘭によく懐いているみたいね」

「？　そうなのですか？」

華琳の言葉に秋蘭が首を傾げる。

俺も別にそんなつもりはないんだけど…。

「ええ。私にはそんなに甘えて来なかったわ…」

そう言っていると華琳はちよつとだけつまらなそうな顔をした。  
んー？　どうかしたのかな？

「蓮…。華琳様はお前のことをすごく心配されていたんだぞ？　仕事中もよく気にされていたし…」

少しの間、華琳の顔を見た後。

秋蘭が俺にそんなことを言ってくる。

なぬっ！

華琳がそんなことを…。

俺は少し驚きながら華琳の方を振り向いた。

「後、お前が一週間も目を覚まさないから、たまに部屋を覗きに行ったりもされていたな…」

華琳…。

お前…。

「なつ、秋蘭！　余計なことは言わなくていいわ！」

秋蘭にいきなりカミングアウトされた華琳は、顔を赤くして文句を

言っている。

どうやら、この子はからかうの好きだけど、からかわれるのには慣れていないようだ。

それにしても、そんなに心配してくれていたとは。

気紛れとか言ってたくせに…。

俺は少し生温かい目で華琳を見つめる。

「な、なによ？ 私はただ面倒は最後まで見ないと気が済まなかっただけよ！」

うん、なんていうか…。

その顔で言われてもなーって感じが…。

でも、感謝はしているよ。

華琳、本当にありがとう。

「ふん！」

俺がお礼を言うと、華琳は顔を横にふいっと向ける。その顔は未だ、赤いままだった。

「あれは照れているだけだからな」

小声で秋蘭がそう教えてくる。

俺はそれに頷いた。

さすがに俺もそれはわかってますよ、姐さん。

「しゅうらん？ 何か言ったかしら？」

「いえ、華琳様。特には…」

華琳の地獄耳にはそれが聞こえたみたいだが、秋蘭はなんともないように返す。

もしかしたらこの人がラスボスなのかもしれない。

俺が少しそう思い始めていると…。

「あのー、みんな？」

少し前から話に置いていかれていた春蘭が話しかけてきた。

俺達、三人は春蘭を一斉に見る。

そして…。

「ああ、姉者。まだ居たのか」

「春蘭、まだ居たの？」

「にゃ？（春蘭、居たんだ？）」

そう言った。

「う、うわぁーん！」

三人からの一斉攻撃を浴びて、泣きながら外へと飛び出していく春蘭。

ノリだったとはいえ、可哀想だったかな…。

俺が少しそう思っている…。

「ふふふ。やっぱり姉者は可愛いな」

秋蘭が笑顔でそう言っていた。

おう…。

この人もやっぱり普通じゃないよ…。

拝啓、呉のみんな…。

ここの人たちはみんなキャラが濃いみたいです…。  
俺、大丈夫かな…。

第十八話　最近って…そうなんだね。　（後書き）

第十八話。終了です！

いかがだったでしょうか？

いかん、すげえ難産だった…。

三人ってこんな感じだよね？　大丈夫だよね？  
違和感があったらすみません…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

第十九話　それゆけ！　僕らの春蘭号！　（前書き）

今回、少し長めです。  
ご注意ください！

## 第十九話　それゆけ！　僕らの春蘭号！

ども、只今、陳留にレンタル移籍中の蓮です！

そういえば、この登場の仕方かなり久しぶりだったり…。

さてさて、借りてきた猫という諺もありますが、現在の俺の状況はまさしくそれと言えるでしょう。

簡単にいうと、俺は今、すごく大人しくしてます…。

まあ、なわばりとか云々じゃなくて怪我が主な原因なんだけどね…。

どうやら怪我は動いた時に走った痛みの通り、結構酷いみたいで…。半年くらいは安静にして置かないといけないらしい。つまりそれは最低、半年は帰れないということでは…。

はあ…。

ちよっだけ、ため息が出た。

華琳は怪我が治るまで、ウチで面倒を見るといつてくれた。

さすがに申し訳なかったので、一度は遠慮しようとしたんだけど…。

「中途半端なままで怪我人を放り出すような真似を私にさせる気なの？」

そう言われてしまうと、俺は何も言えないのである。

それに実際、このままで呉に戻るのは無理っぽい…というか、そもそも帰る手段がない。

歩いて帰るのは…ちょっと、無理なような気もするし…。

なので結局、俺はしばらくここで御厄介になることになったのだった。

はあ…。また借りが増えていくよ…。

本当にどうしよう…。

まあ、それは一旦置いて…。

今の俺はとても大きな悩みがあった。

それは、暇なことである。

自由に動けないのって予想以上に辛い。

しかも、たまに無理して外を歩いたりすると、何故か華琳に見つかって部屋に連れ戻される…。

むう。華琳には何かセンサー的なものが付いているに違いないと思うんだ。

しかし、何度止められようが、俺のこの熱いパトスは止められな…。

「蓮、ここで何をやっているのだ？」

部屋から出た瞬間に止められた、だと！？

ただ、救いだっただのは華琳ではなく春蘭だったことだ。

ここはなんとか誤魔化して、俺は外で散歩をするんでいい！

「にゃー」

俺は笑顔を浮かべて可愛らしく鳴いてみる。  
スマイル、スマイル…。

「あまりうるちよろすると、また華琳様に叱られるぞ？」

「にゃ、にゃあ」

うっ…。

ここで見たことはどうぞ、ご内密に…。

俺は春蘭に懇願の眼差しを向けてみる。

しかし…。

「うーん。よくわからんが、私は今から警邏だ」

っ、伝わってねえ…。

コミュニケーションの壁は思ったよりも厚かったようだ。

でも、これはいいことを聞いたぞ。

春蘭に着いていけば、街に出れるじゃないか！

「にゃ、にゃん！」

「ん？ 蓮も着いて来たいのか？」

俺は春蘭にきらきらと何かを期待した目を向けた。すると、今度は正しく意味を理解してくれた春蘭。

これは、いけるっ！

しかし、華琳様がな…とやっているけど、もうひと押しだ！

俺はきらきらした目をつるつるした目に変更する。

俗にいう、捨てられた子犬の眼差しビームだ。

別名、君に届け、この想い！ 攻撃でもある。

「うつ…。ええい、わかった。連れていくから私をそんな目で見るな！」

ふ、他愛のない。

またつまらぬものを攻撃してしまった…。

なんーてね。

やばい、街とか久々ですげえ嬉しい！

「しかし、お前は今あまり動けないだろう？ 一体、どうするんだ？」

ふふふ。春蘭、それは問題ないよ。

ちゃんと考えてるから…。

こういう時はね…。こうするのだっ！

くSIDE秋蘭く

今日は午後から、姉者と警邏だ。  
私は城門の前で姉者を待っていた。

しかし、時間になっても姉者はやって来ない。  
さすがに仕事をさぼるのはマズイ。

仕方ない、呼びに行くか…。

私がそんなことを思っていると、後ろから姉者の声がした。

「おい！ 秋蘭く！」

「遅いぞ、あね、じゃ……」

私が姉者の声を聞いて振り返る。  
するとそこには…。

「あ、姉者？ 何故、蓮を頭の上に乗せて…」

蓮を頭の上にちょこん、と乗せた姉者の姿が…。  
くっ、いかん。

これはなんて最終兵器だっ！  
リーサルウェポン

私は慌てて、視線を逸らす。

その時、少し鼻を押さえていたのはご愛敬だ。

「い、いや。これはだな、蓮の奴が勝手に…」

「にや、にやつ！？」

「おわっ！？」

姉者が言い訳をしようと私に詰め寄ると、頭の上の蓮が落ちそうになった。

それで蓮も姉者もあたふたとし出す。

くっ、なんだこの破壊力は…。

私を悶え殺す気なのか…。

私は少し、強めに鼻を押さえる。

そこから少しだけ赤いものが見えていたのもご愛敬だ。

というか、この状態で警邏…。

果たして、私は最後まで耐えきれののだろうか？

私は少しの不安を抱えながら、まだ慌てている姉者達を見る。

うむ、無理だな…。

私は早々とそう悟ったのだった。

警邏をしていると姉者がいきなりため息を吐いた。

「はあ」

「姉者、大丈夫か？」

私は姉者にそう尋ねる。

ここまでの警邏で、凝視しなければなんとか大丈夫な状態までの耐性を作ることができた。

まあ、いくらかの鉄分は失ってしまったが…。

「まあ、蓮は小柄だから重くはないのだが…」

そう言うと、姉者は困った顔をする。

そんな姉者も可愛いなと思いながら、私は周囲に視線を向けた。

「すごく見られているな……」

「むう。まったく私は見世物ではないというのに……」

今度は、少し不満そうな顔になる姉者。

ここまでの警邏の最中、民達の視線は蓮と姉者に集中していた。まあ、どれも微笑ましいものを見るようなもので、悪いものではなかったから問題はないが、姉者は少し堪えたらしい。

それでも蓮を下さないのは、蓮が嬉しそうにしているからだ。今も楽しそうに辺りをキョロキョロして見ている。

そんな蓮を見てみると、蓮がある所に視線を集中させた。そちらの方を見てみると、一人の少女が籠を売っている。

「おつ、姐さんら。どや、竹籠一つ買ってくれへんか？ 邑の皆が丹精込めて作ったからそこの竹籠よりも丈夫やで」

少女はそう言うと、並べている商品を見せてくる。うむ。これは中々の代物だ……。

「にゃ！」

私は竹籠を見てそう思ったが、蓮はどうやらその横にある木箱の方に興味があるみたいだ。

木箱の方を凝視しているその目もどこか輝いている。

「おっ、そのにゃんこは中々お目が高いで！　これは、ウチが開発した全自動籠編み機なんや！」

「全自動…」

「…籠編み機？」

「せや。まずはこの籠の材料となる細う切った竹をこの絡繰の底に入れるんや」

鸚鵡返しに聞き返す私と姉者の前で、少女は竹の薄板を木箱の底に一周するように入れていく。

「さあ、姐さん。この取っ手をぐるぐる回してくれへんか？」

「ああ…」

少女が影になつて見えなかった取っ手を姉者の方に向ける。

姉者も言われるがまま取っ手を持ち、ぐるぐると回してみた。

すると薄板が木箱の中に吸い込まれていき、木箱の上から編み込まれた竹籠の側面が姿を見せる。

「おおっ！」

「どや！　これで竹籠の周りが簡単に編めるっちゅう寸法なんや！」

「よくわからんが、これはおもしろいぞ！」

少女が自信満々に胸を張って誇る。

次々と編まれていく竹籠に興が乗って来たのか、姉者は楽しそうにさらにぐるぐると回している。

そんな姉者の微笑ましい姿と、姉者の動きのせいで落ちそうになり、必死にしがみ付いている蓮の姿を見て、私は思わず笑みが零れてしまった。

たまにはこんな警邏も悪くはないな。  
というか、かなりいい…。

毎回これでも…。  
いや、しかし…。

私がそんなことを考えていると、突然、脳裏に自分の主の顔が浮かんだ。

そして、その主が言っていた言葉も…。

「秋蘭。もし蓮が外に出ているのを見たら、すぐに部屋に戻しなさい。まったく、あの子は…まだ怪我も治っていないのに……………」

その後も何やら華琳様は言っていたが、今はそれは置いておこう。

これはマズイ。  
非常にマズイ。

なにやら横で爆発が起こって、姉者達が笑っているが……それも今は置いておこう。

今すぐ、城に戻らなければ華琳様が…。  
あのどこか異常なまでに蓮を溺愛している華琳様が…。

鬼になってしまう…。

「秋蘭、見る。蓮が…」

「姉者、すぐに城に戻るぞ！」

「えっ！？ あ、ああ…」

姉者が何か言いかけたが、私はそれを遮った。  
そして少女にお金を払い、籠を一つ買うつと、姉者を連れて城に急いだ。

今はただ急ぐんだ。

鬼が…。

鬼が現れる前に…。

しかし、私の儚い願いはどうやら神には届かなかったらしい。  
急いで戻った城門の前には、我らの敬愛なる主が笑顔で腕を組んで

立っていた。

「華琳様…」

「二人とも御苦労さま」

「はい！ 華琳様、只今戻りました！」

姉者が華琳様にそう答える。

姉者…。華琳様の顔をもっとよく見てくれ…。  
ほら、目が笑っていないぞ。

「さて、なんで蓮まで連れて行っ……ぶっ……」

華琳様がそう言いながら姉者の方を向く。

しかし、突然その言葉を止めて、顔を横に向けてしまった。  
そして、何かを必死に耐えている。

私は不思議に思い、姉者の方をしてみる。  
そしてその瞬間、嘔き出した。

蓮の…。

蓮の頭にすっぽりと未完成の竹籠が挟まっている…。  
これでは猫というより…。

「何？ 蓮は何時の間にか猫から獅子にでも転職していたの？」

華琳様がそう笑いながら言った。

蓮はそれを見て、少し不服そうな顔をした後。

「にゃお〜」

獅子の真似をし出した。

しかし、そのあまりにも可愛らしい獅子に私も姉者も華琳様もみんなで大笑いしてしまった。

それをまた不服そうな目で見てくる蓮。

蓮が来てからはなんだかみんな笑うことが多くなったみたいだ。

私も姉者も…そして華琳様も…。

私はそのことに少しだけ感謝しながら、蓮の頭を撫でるのだった。

その後。

私は何も言われなかったのですっかり忘れていたが、きつちり蓮は華琳様にお叱りを受けていたところに追記しておこう。

どんまいだ、蓮…。

第十九話　それゆけ！　僕らの春蘭号！　（後書き）

第十九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

ちょっとだけ、いつもより長くなっちゃいました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## 第二十話 猫耳軍師、現る！

どうも、ゆつくりしていつてね！　でお馴染みの猫こと、蓮です！

前回、春蘭達と街に出て色々を見て回りました。

まあ、少し残念な目にも遭いましたが…。

あの籠は中々外れないし、みんなは笑ってるし…。

うん、災難だった…。

そんなことがありながらも街を見て回るのは非常に楽しかった。

ここの街も建業の街と同じくらい活気があったしね。

これも華琳達が日夜、仕事を頑張っているからなのかなーとか思ってみたり。

まあ、それは良かったんだけど…。

そのせいで華琳さんに大変なお叱りを受けまして……その結果。

「ん？　蓮、どうかしたの？」

何故か、一日のほとんどを華琳の執務室で過ごすことに…。

俺を監視している訳ですね…。そうなんです…。

「そうよ、そうしないと貴方はすぐに動き回るじゃない」

むう。

それは確かにその通りなんだけど…。

ほら、あれはね。動物の本能というか、なんというか。

「本能ね…。普通の動物は怪我をしたら大人しくしているものだけれど？」

まさしく正論を言ってこられる華琳さん。  
どうやら俺に反撃の余地はないようです…。

「…にやあ」

俺はしぶしぶそう返事をする。

というか、仕事の手を休めないで俺と会話するとか…何さ、そのハイスペックっぷりは…。

華琳の能力の高さに俺が内心で舌を巻いていると、華琳は筆の手を止め、俺の方を向いて来る。

「…もう仕方がないわね」

そう言つと、華琳は俺を抱き上げた。

そして、扉の方に歩き出す。

あ、あれ？ いずこへ？

というか華琳さん？ 仕事はいいの？

「とりあえず、急務なものは片付けたわ。……それに私も少し休憩しないと、仕事の効率も落ちてしまうしね」

俺の疑問に華琳はそう答えると、部屋を出て中庭へと向かう。  
なんだかんだ言つて華琳は優しいなー、などと思いながら、俺は外に出れる喜びでどんどんテンションが上がっていくのだった。

＼SIDE 桂花＼

私が提出する書簡を持って華琳様の執務室を訪ねる。

ああ、今日も華琳様のお顔が拝見出来るなんて…私はなんて幸せなのかしら…。

どこもおかしな所はないわよね？

私は扉の前で身嗜みを整えると、ゆっくりと扉を開けた。

「華琳様。失礼しま……………」

私は笑顔で華琳様のいらっしゃる方に声をかける。  
しかし…。

「…………あれ？」

華琳様がいらっしゃらない。

いつもならこの時間は仕事をしていらっしゃるはず…。  
なのに部屋には華琳様の姿はどこにもなかった。

休憩でもされているのかしら…。

はあ…。

思わず、自分のタイミングの悪さにため息が出た。

別に急ぎの用ではないのだが、肩透かしを食らった気分である。

また後で届けに来よう…。

仕方がないので、書簡を持って華琳様の執務室を出る。

そして、仕事に戻るために自分の部屋へと帰っていると…。

ふと、中庭が目についた。

そして、そこには金色の髪をした愛しの主の後ろ姿が…。

私は途端に笑顔を浮かべると、華琳様に声をかけようとした。

「華琳さ……」

「ふん、そう…。なるほどね…」

しかし、それは華琳様の言葉で遮られる。

誰と話をしているのかしら…。

私はこっそり隠れると、華琳様達の様子を窺った。

そして見た。

愚かにもあの華琳様の膝の上に座り込み、頭を撫でて貰い、嬉しそうにしている白い猫の姿を…。

思わず、書簡を持つ私の手に力が入る。

あいつは最近、侍女達が可愛いと噂している…。

そして、華琳様を誑かせている猫…。

確か名前は…そう…蓮…！

私は最近、よく聞くあの猫の情報を頭に浮かべた。

大怪我を負っていた所を華琳様に助けられた。  
人の言葉を理解できるくらい頭がいい。

器量も愛想も良くて、みんなによく可愛がられている。  
春蘭や秋蘭達に真名も預けられているらしい。  
そして、何より…あの華琳様が溺愛している。

ほら、今だってあんなに楽しそうに…。

私がもう一度、華琳様達の方を見してみる。

「ふふふ。そうなの…春蘭が…」

国宝級と言っても過言ではないような笑顔を、あの猫に向けている  
華琳様とそれににゃーと鳴いて答える駄猫。

ああ…華琳様…。

最近、私との時間は減っているのに…その駄猫とは…。

しかし、華琳様に文句は言えない。

まあ、端から言うつもりは微塵もないけど…。

となると、あの駄猫ね…。

ちよつと可愛いからって調子に乗って…。

確かに噂の通り、真っ白で可愛いらしい猫だ。  
それは認めて上げる。

けど、アンタが笑っていられるのも今のうちよ！  
覚悟してなさい！ このっ、泥棒猫っ！

私がそう胸に深く誓っていると…。

あの泥棒猫がこっちに視線を移した。

そしてにゃ〜、と私を見て鳴く。

そうになると、当然華琳様も私に気づくわけで…。

「あら、桂花。そんな所で何をしているの？」

「い、いえ。華琳様に提出する書簡を…」

こちらを振り返ってきた華琳様にそう言っ書簡を渡す。

咄嗟にうまく言い訳できた自分に拍手を送りたい。

「そう、わざわざありがとう。でもそれなら、すぐに声をかければ  
良かったんじゃないの？」

「き、休憩中に申し訳ないなと思ひまして…」

渡した書簡に目を通しながら、華琳様がそう言って来る。  
さすがに覗き見ていたとは言えない…。

「もう、そんなに気にしなくてもいいのよ。はい、問題はないわ。  
このまま進めて」

「はい、わかりました」

そう言うと、華琳様は私に書簡を渡してくる。  
仕事の方に問題はなかったようなので、ほっと一息ついた。  
すると、今まで大人しくしていたあの駄猫が華琳様の服の裾を引っ張る。

こらっ！ この駄猫！

華琳様のお召し物に触るな！

ていうか、いつまで膝に乗っているのよ！  
今すぐそこを退いて、私と変わりなさい！

「ん？ ああ、そうね。紹介してあげる。この子は私の軍師をして  
くれている苟？よ」

「にゃん！」

私がそんなことを考えている間に、華琳様が私の紹介をしていた。  
そして、よろしくとでも言うように可愛らしく鳴く駄猫…。  
うっ、ちょっと可愛い。

「桂花。この子は蓮よ。聞いたことはあったかもしれないけど、直  
接会うのは初めてでしょう？」

「は、はい」

駄猫の紹介をしてくれる華琳様に私はなんとか返事をする。  
もしかしたら、声が少し上擦っていたかもしれない…。

「にゃう？」

それをこの猫は感づいたのか。

わたしの方を見て少し頭を傾げ、不思議そうな目で私を見てくる。くるっとした真っ赤で無垢な瞳…。

思わず、この猫を撫でようとして伸びた手を慌てて止める。

騙されてはダメよ、桂花！

こいつは敵。

こいつは敵なのよ！

私がそう自分に言い聞かせていると…。

「もしかして桂花は猫が苦手だったの？」

私の動きを見ておかしいと思ったのであろう。

華琳様がそう聞いてきた。

「えっ！？ いえ、そんなことはありませんけど…」

実際に、猫が嫌いというわけではない。

わけではないのだけど…この猫は…。

「私はもう仕事に戻らないといけないの。だからその間、蓮を見てくれないかしら？」

「は、はい！」

「それじゃあ、お願いするわね」

「って！……あつ！ 華琳様…」

思わず返事をして、しまったと思った時には全部が遅かった。私にそう言い残すと華琳様は仕事に戻ってしまふ。残ったのは空しく響いた私の言葉だけだった。

私がつくりと肩を落としていると…。  
目の前にあの駄猫がやってきた。

「なによ…？」

私は駄猫を睨みながらそう言った。  
しかし、駄猫は何もしないで、ただ首を傾げているだけだった。  
そして、私の横に座ると大きく欠伸をし出す。

「はあ。何かバカらしくなって来たわ」

私はその姿を見てため息を吐く。  
思えば、私は猫相手に何をやっているのか…。  
猫に嫉妬するとか何か人として終わってる気もするし。

「っ！ にゃう……」

「え！？ ……あつ、ごめん。痛かった？」

ちょっとむしゃくしゃした私は少し乱暴に駄猫を撫でる。  
すると、駄猫は痛みが走ったのであろうか。身体をびくつとさせた

後、弱々しく鳴いた。

さすがに悪いことをした思い、私が謝ると…。

「にゃ、にゃー」

少し、震えた声で駄猫…蓮が鳴く。

大丈夫と言っているのだろうけど、やせ我慢なのは見え見えだった。もう仕方がないわね…。

「もう、大人しくしてなさい…。アンタが早く治らないと華琳様もご心配されるから」

私はそう言つと蓮を自分の膝の上に座らせて、今度は優しく撫でて上げた。

蓮の毛はモフモフしてて、すごく撫で心地がいい。これは癖になってしまつて言っていた侍女達の言つ通りだった。

しばらくの間、私がその毛並みを堪能していると…。

「…………みゆう…」

蓮の寝息が聞こえてきた。

どうやら、何時の間にか眠ってしまったみたいだ…。

「もう…少しだけよ…………」

まだ片付けないといけないもの残っているが、今、蓮を起こすのは忍びない。

華琳様にも任されていることだし、しばらくはこのままにしてあげよう。

そうよ、これはあくまでも華琳様のご命令だからであって、もうちょっと撫でてたいなーなんて少しも思ってたなんていない。

思ってたと言ったら、ないのだ！

そう誰かに言い訳をしながらも私の手が止まることはなかった…。

その夜、とある部屋にて…。

「ひいー！ 全然終わらない…。これも全部あの駄猫のせいよー！  
」

必死に筆を動かしながらそう叫んでる猫耳と。

「くちゅ！」

寝台に寝ながらくしゃみをしている猫の姿があったというのはまた別のお話である。

## 第二十話 猫耳軍師、現る！（後書き）

第二十話。終了です！

いかがだったでしょうか？  
猫耳さんの登場でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では！

第二十一話。 いっだって、どんなときだって、そう願ってる。(前書き)

シリアスっぽいです。

ご注意を…。

第二十一話　　いつだって、どんなときだって、そう願ってる。

こんちゃーす。

どうも、華琳に拾われてそろそろ一ヶ月になろうとしている蓮です。

突然ですが、私は前の暇なこととは、また違った別の悩みを抱えています。

実は、もうそろそろ満月なんですよね…。

すっかり忘れてましたけど…。

てか、本当に何も考えていなかったけど、どうしようか…。

さすがに人になれるなんて言えない。

もしかしたら物の怪の類と勘違いされて、最悪殺されかねないしな…。

うーん。

あれって時間が来たらオートで勝手になるものだから、自分じゃコントロールできないし…。

うん、マジでどうしよう…。

俺は自分に与えられた部屋でそんなことを考えている。

いつもなら華琳の部屋にいるんだけど…。

今日は何やらすごく忙しいらしい。

それと同じように春蘭も秋蘭も桂花もみんな、朝から姿を見ていない。

こんな時、侍女さん達が俺を撫でに良く来たりするんだけど、それ

も今日はない。

まあ、みんな忙しいなら仕方ないんだろうけどさ。  
実はちよつと寂しかったり…。

こんな一人でいる時は、少しだけ呉のことが恋しくなってしまう。  
水蓮や雪蓮がバカをやって蓮華や冥琳がそれを見て、頭を抱えながらも説教して、その姿を祭やみんなが笑って見てる。

そんなありふれた日常。

俺の大好きな日々。

どうしてもそんな光景を思い浮かべてしまう。

これが所謂、ホームシックって奴かもしれないな…。

水蓮はあの後どうなったのか？  
一緒にいた祭も無事なのか？

疑問は尽きない。  
不安も尽きない。

俺がいなくなつたからみんなどうしているんだろうか？  
雪蓮も蓮華も小蓮も…泣いているのだろうか？

泣いているんだろうな…。

俺の脳裏に泣きじゃくる三人の顔が浮かんだ。

嫌だ。

そんな光景は嫌だ。

たとえ、想像の中のことだとしても…。

見ていたくない…。

ダメだ。

一人になるとすぐこんなことばかり考えてしまう。

こんな暗いことばかりを考えても何にもならないのに…。

そうだ、外に出よう。

俺は寝台から少し勢いをつけて立ち上がる。

こんな嫌な気分のままでは居たくない。

また華琳に怒られるかもしれないけど……まあ大丈夫だよな？

のろのろと歩いて中庭に出ると、俺は空を見上げた。

今日もいい天気だ。時折、吹いてくるこの風もすごく気持ちがいい。空はどこまでも青く、そしてどこまでも遠くへと続いている。

うん、ここから見る空も中々だ。

まあ、俺のお気に入り場所には勝てないけど…。

みんなは今どこで何をしているのかな…。

この空の続く先にいるのかな…。

俺がいなくてもみんなは笑顔でいてくれるのかな…。

元気で…いてくれるのかな…。

みんなにはいつだって…。

笑顔でいてほしい。

元気でいてほしい。

そのためだったら俺はなんでもしてあげる。

笑わせてあげること…。

元気づけてあげることだって…。

そう、なんでもしてあげる。

でも、それは傍にいなきや出来ないことで…。

傍にいない俺には絶対に無理なこと…。

今の俺にできることはただ願うことだけ…。

みんなが笑顔でいることを。

みんなが元気でいることを。  
みんなが…幸せなことを…。

願うだけ…。

ただ、それだけしかできないんだ…。

あはは。結局、みんなのことを考えてるよ…。

気分を変えに来たのに、一体、俺は何をやっているんだろう。  
少し、涙も出ちゃってるし…。

俺がそんな風に嘆いていると…。突然、一陣の強い風が吹いた。  
中庭に植えられた木の葉が風によって大きな音を立てる。

そつ、まるで俺に何か語りかけているみたいに…。

…そうだね。

今は願うことしかできないのなら…。

もつと強く願おう。

みんなの幸せを…もつともつと強く。

だからみんなの所に運んでくれる？  
俺の願いを…。

俺は風に祈った。  
どうかこの願いがみんなに届きますように、と…。

〈SIDE 華琳〉

今日は朝から大忙しだった。  
どうやら最近、この辺に賊が現れたらしい。

すぐさま、私達は軍の編成に兵糧の確保。  
そして賊討伐のために軍議を始めた。

そのために今日は蓮に自分の部屋にいて貰ったのだけれど…。

「居ないわね…」

私ははあ〜とため息をつく。

蓮は一人にすると、こうしてすぐにどこかに行ってしまう。

まあ、大半は遠くには行かず、誰かと一緒にいたりするからすぐに見つかるのだけれど…。

今日は中々見つからない。

…本当にじつとしていない子。

まだ怪我也治っていないというのに…。

それにしても…。

誰かと居る時はじっとしているのに、一人になると途端に動き回るわよね…。

私が蓮の行動について考えていると、突然、ある仮説が頭の中に浮かんだ。

もしかしたら、蓮はじっとしているのが嫌なのではなくて、一人になるのが嫌なのかもしれない。

「…まさか、ね」

まったく何の根拠もない考え。

普段なら一笑に付してしまいそうな考え。

だけど、それは中庭に一人佇む蓮の姿を見て確信へと変わった。

そう、蓮は中庭にいた。

そして青い空の遠くをただぼんやりと眺めている。

何を考えているのかはわからない。

何がその瞳に映しているのかもわからない。

けど私は確かに見た、蓮の瞳から静かに零れ落ちる涙を…。

何を想つての涙なのかはわからない。  
何かを嘆いているのかもしれないし、誰かのことを想つてのことが  
もしれない。

しかし、蓮のその深紅の瞳から零れた涙は…。  
純粋な想いの結晶<sup>かけら</sup>は…。

今まで見たどんな宝石よりも綺麗だと思った。

私はあの子のことを勘違いしていたのかもしれない。  
私はあの子は太陽だと思っていた。

人の心に元氣を与えてくれる。  
みんなに笑顔を与えてくれる。  
そんな暖かな太陽だと思っていた…。

でも違うのね…。  
あの子の本質は月。

静かにすべてを包み込んでくれる。  
暗闇でも誰も迷わないように優しく照らしてくれる。  
けど、どこか儚さを持っている…そんな月。

放って置いたらそのまま消えてしまいそうな蓮の姿。

そんな蓮を見て私は思う。

ああ…。

やっぱりあの子は美しい…。

その瞳に宿る強い意志が。

その身に纏う優しい空気が。

その心が持つ純粋な想いが。

あの子の在り方が美しい…。

どこか気高く、儚い…その在り方が…。

あの子のすべてが美しい…。

そう…。あの子のすべてが…。

欲しい…。

私は純粋にそう思った。

あの子が…蓮が…。

欲しい…。

ずっと私の傍に置いておきたい。

私は心の底からそう思った。

でもそれは叶わないものだと言のどこかで悟ってもいる。

蓮には…帰る場所があるのだから…。  
いつかは帰ってしまうのだから…。

そんなことを思っていると…。突然、強い風が吹いた。

すると、どうだろうか。

さっきまで泣いていた蓮が今度は祈り始めた。

その顔はすごく優しく、どこか愛おしいような顔だった。

私はぎりつと、歯を噛みしめる。

それと同時に私は自分の中に黒い感情が湧き上がって来るのを感じた。

…いいわ。

私は欲しいものは必ず手に入れるの…。

だから蓮…。

貴方を必ず、手に入れて見せる。

そのためなら…私は…。

でも今はそんなことを考えている場合ではないわね。

私は浮かんできた考えをすべて仕舞うと、蓮の下へと歩き出す。

泣いている蓮もいけれど、笑顔の蓮の方がもっといい。

だから今は素直に蓮を愛でましよう。

私が満足するまで…。

すべてはそれから…。

そう。その後からでもいい…。

第二十一話。 いっだって、どんなときだって、そう願ってる。(後書き)

第二十一話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

むむむ。 ちょ、華琳さん！？

あれれ…？ おかしいな…どうしてこうなった…？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

閑話。 水蓮道場！（前書き）

30分で書いた駄文です…。  
お目を汚してすみません。

## 閑話 水蓮道場！

水蓮道場はただのへんてこコーナーです。  
少しキャラが変になつてゐるかも…。

なお、本編とは一切関係ありませんのでご注意を…。

「どうも〜！ みんな大好き、水蓮道場。始まるよ〜！」

「……………」

「ちよつとお〜。蓮も何かいいなさいよ〜」

「…………いや、なにさ。これ？」

「何つて…水蓮道場でしょ？」

「いやいや、それだけじゃわかんないから…」

「え〜。ま！ 簡単に言うとな。ほら蓮が魏に行っちゃったでしょ？」

「まあ…そうだね」

「それで呉の方の出番なくなっちゃったから、とりあえず救済処置…  
…みたいな？」

「…………正直、いらなくないか？」

「むう。弟子一号！　そう言うことは思っても言わないものよ」

「いや、何故に俺のポジションがそこなのさ…」

「だって。髪が白いし、目も赤いじゃない。ほらその格好も中々似合っているわよ？」

「男にブルマが似合うわけないだろ！　だいたい俺のどこにロリ要素があるんだよ！？」

「まあ細かいことはいいのよ。それでは、さて本題なんだけど…」

「俺の意見は無視！？」

「あゝ！　もう、うるさいわね。そんなことから、華琳ちゃんが少し病んじったのよ…」

「うつ…それは…たぶん気のせいじゃ…」

「今日更新した話を見ればわかるじゃない。どー見ても、あれはダークサイドに落ちてたわよ…」

「……………プイ」

「チエストゥ！」

「痛っ…。おい、こら！　いきなり南海霸王で叩くなよ！」

「現実から目を逸らそうとした罰よ！　それに大丈夫、これギャグだから…」

「そう言う問題じゃないよね!？」

「いいったらいいのよ。それより弟子一号。このままでは貴方はバツトエンドまっしぐらよ!」

「えー？ まさかそのせいでこの企画が…。師しよー、俺はどうすれば…」

「ふふふ、安心なさい。すごく簡単な方法があるわ」

「それは一体…!」

「私の出番を増やせばいいのよ!」

「……………いや、そんなドドンって効果音が付きそうな感じに胸を張られても…」

「私なら華琳ちゃんの魔の手からでも守ってあげられるわよ？ それに私の出番も増えるし…」

「完全に後半が本音だよね…。あーやだやだ。これだから死亡フラグを立てた奴は…まだ完全には消えてないし…」

「チエストオオオオ!…!」

「グエツ! いったあー! し、師しよー、その剣は本当に痛いであります! もっと優しいものにしてくださーい!」

「却下。人が気にしていることをいうようなバカ猫は道場三週!

ほら、きりきり走りなさい！」

「えー、なんで俺が…」

「この水蓮スタンプが欲しくないの？」

「ちえ。わかったよ、走ってきまーす」

「ふう、行ったわね…。さてさて。最近、少し作風変わっちゃったかなと作者がちょっとだけ悩んでたり…。のんびり分も少し足りないような気もするし…。本当、困ったものよね」

「でもまあ、このままでもいっかな。なんて思っちゃってるから、たぶんこのまま行くんでしょ…。初めの感じが好きな人には少し申し訳ないな、と思ってます」

「水蓮ー？　なんか道場の前に竹刀持った女の人がいるよー？」

「竹刀ぶんどって追い返しなさい。後、ここでは師匠と呼ぶよーに…」

「はい。っと、女の人追い返しましたー。なんかパクんなーとか言っていましたけど…」

「それでよろしい。それにこれはパクリではないわ。パロディよ！」

「はあ…そっすか」

「さて。結構長くなっちゃったけど、今回はここまでね」

「え？ 続くのこれ！？」

「物語はまだまだ始まったばかり。これからは乱世へと突入していくわ。その中で猫として生きていく蓮。華琳ちゃんも病んじやつたし、物語はこれからどう進んで行くのか…」

「あれ？ もうまとめに入っちゃった？」

「次回は視点を呉の方に一旦、移るわ。苦悩しているあの子達に蓮の願いは届くのかしら？」

「……もういい。もう何も言わない」

「というわけで今回の水蓮道場はここまで！ また本編でお会いしましょうね」

「……………」

「もう、蓮。すねないの」

「だって…」

「ほら元気出して。最後くらいは一緒に言っわよ？」

「…うん」

「「それじゃあ、また見てね」」

「あつ、あとユニークが10万人を超えたわ。みんなありがとう」

「どう考えてもメインはそれだよね!？」

閑話。 水蓮道場！（後書き）

というわけで、ユニーク10万人記念でした！

とりあえずやった方がいいのかなーと思ってやっただけですけど…。

ただもう二度とやらないかな…。

会話文だけとか難しすぎるし…。

まあ。そんなわけですが、これから『我が家のお猫様！』を読んでいたけると嬉しいです！  
では。

第二十二話。 また会えると信じて…。

〈SIDE雪蓮〉

戦いの後、母様は倒れた。  
そして、今でも母様は床に臥せっている。  
医師の話だと、心の臓が悪いらしい。  
もう王の激務には耐えられないそうだ…。

私達と劉表軍と戦いは結果的には勝利した。  
だけど、それで得たものは何もない…。

代わりに私達はたくさんのものを失った。

先祖縁の土地を…。  
呉に住む民達を…。

私達の誇りを…。

私達の平穩を…。

そう、全部失った…。

いや、正確には違う…。

……すべて奪われた。

「……というわけで、孫策さんには賊の討伐に行つて貰いたいんですよ」

「うむ。妾のためにも早く行つてくるのじゃ！」

「……………」

私は謁見の間で、私達からすべてを奪った相手…袁術の目の前にいる。

正直、今にも翩り殺してやりたくて、殺気が滲み出そうになるのを必死に我慢している状態だ。

「こらー！ 孫策！ 何とか言つたらどうなのじゃ！」

「あの、孫策さん？ ちゃんと聞いてるんですか？」

黙っている私が気に入らなかったのか。

袁術が声を張り上げてくる。

袁術の声を聞く度に腹の底から沸々と怒りが湧いてくる。

その横にいる張勳のどこか伸びのある声もそれに拍車をかけた。

「……わかったわ。行けばいいんでしょ、行けば……」

それでも今の私は袁術の客将なのだ。

命令は聞かなければならない……。

「そうじゃ！ 初めからそう言えば良いのじゃ！」

「それではよろしくお願いしますね」

「…了解」

形だけの礼をして謁見の間から出る。

そして、長い廊下を抜けた後……。

「くそっ！」

私は近くにあった壁を殴りつけた。

固く握った拳から血が出てくるが気にしない。

もう限界だった……。

物に八つ当たりしても何もならないことはわかっている。

けど、我慢出来なかった。

惨めだった…。

あんな子供に扱き使われなければいけないことが…。

悔しかった…。

自分にみんなを纏める…惹きつける力が足りなかったことが…。

私は弱い。

どんどん離れていく家臣達を引き留めることが…。

呉が壊れていくのを止めることが出来なかった。

そして、結局はこの様…。

本当、呆れてものが言えない。

ねえ、蓮。

私はどうしたらいいのかな…。

もうわかんなくなっちゃった…。

「あつ…。あはは…」

私はそう考えて、思わず笑ってしまった。

もう蓮はいない…。

いないのに、私はすぐにこうやって頼ろうとしている。

…縋ろうとしている。

本当に私は弱いわね…。  
こんなんじゃない…。

ダメだってわかっているのに…。

私はぼんやりと空を見上げた。  
真っ青に晴れ渡った空に綿のように浮かぶ白い雲。

そう言えば、蓮は空が好きだったわね…。

いつも時間がある時に蓮はお気に入り場所で空を眺めてた。  
私や蓮華も何度か一緒に眺めたこともあったっけ…。

私は懐かしい日々のことを思い出す。

あの時はすごく綺麗に見えたけど、今は余り綺麗に見えないわね…。

でもそれは何も空に限ったものじゃない。

海も…河も…山も…そして月だって…。

全部、蓮がいなくなっただけからはどこか違って見える。  
世界のすべてが輝きを失ったように…色褪せて見える…。

それは蓮華やみんなも同じみたいで…。  
みんなから笑い声が…笑顔が消えた。

もう少ししたら、みんなバラバラになってしまうのに私はただそれ  
を見ているだけ…。

何て声をかけていいのかもわからない。

蓮がいなくなつて初めて気がついた。

私達はこんなにも蓮に支えて貰っていたということを…。

昔から傍にいたから気がつかなかった。

私達はこんなにも蓮から笑顔を買っていたということを…。

最近、私はよく昔の夢を見る。

私や蓮華にシャオと母様と蓮。

家族みんなで楽しそうに遊んでる夢。

でも、楽しい時間はあつという間に過ぎちゃって…。

そして夕方になると、突然、蓮が走り出す。

蓮は一度もこっちを振り返らないで、ただただ遠くへと走っていつ  
てしまう。

私も必死に追いかけるんだけど、どうしても追い付かなくて…。

なら行かせないようにって、走り出す前に必死に手で掴もうとする  
んだけど…。

まるで空気みたいにすり抜けちゃって何も掴めない。

そのまま時間になって…結局、蓮は走りだして、いなくなっちゃう。  
そんな夢…。

そして目を開けると、もう朝になってて…。  
私に残ったものはすごい喪失感だけで…。

最近はそんな夢ばかりを見てしまう。  
我ながら女々しいとも思っけど、見てしまう。

ねえ、蓮…。

昔、蓮は言ってくれたわよね？

ずっと傍にいてくれるって…。  
話を聞いてくれるって…。

私はあの時、すごく嬉しかったのよ？  
王になるのは大変なことだけれど……頑張ろうって思えたのよ？

ねえ、なんで…？

なんで傍にいてくれないの？

私の傍にずっといてくれるんじゃないの…？

ねえ、答えてよ……蓮…。

私は空に向かってたくさんの疑問を投げ掛けた。

答えが帰って来るはずなんて、あるわけないのに…。

何度も…そう何度も…。

どのくらい時間が経ったのだろうか。

気がつくと、空が少し赤くなってきた。

どうやらかなり長い時間、ここに居たみたいだ。

「早く帰らないとまた冥琳が心配するわね」

私はそう言つと、帰るために歩き始めた。

けど、それはすぐに止められることになる。

それは一陣の風だった。

少しだけ強い…けどどこか暖かい風。

「…………蓮？」

気がつけば、私はそう呟いていた。

蓮だ…。

今、蓮の声が聞こえた…。

もちろん近くに蓮が現れたわけじゃない。  
でも私は確かに聞こえた……感じた…。

蓮の声を…。

蓮の暖かさを…。

あの風の中で感じた。

蓮が…。

蓮が生きてる。

私の勘も蓮が生きてるって教えてくれている。  
何より、さっきのは間違いなく蓮だった。  
絶対に間違えるわけがない…。

蓮は生きてる…。

今もどこかで…私達のことを想ってくれているっ！

私のすべてが歓喜している。

身体中が震え、ぼろぼろと涙も出てくる。

良かった。

本当に良かった…。

生きているのなら、きっとまた会える。

いつか、きっと…。

けど、それなら泣いている場合じゃないわよね…。

心のどこかに残っていた冷静な部分で私はそう考えた。

私は湧き出て来る涙を拭う。

そして、頬を一度大きく叩いた。

蓮が生きているのなら、蓮の帰って来る場所を取り戻さなきゃ…。

いつまでもこんな所で腑抜けている場合じゃない。

きっとまた会えるから…。

私は私のすべきことを…。

〈SIDE冥琳〉

袁術の所に行った雪蓮の帰りが遅い…。

私はそれをずっと待っていると、雪蓮は夕方になって戻ってきた。

私は文句を言おうと思ったが、雪蓮の顔を見て、すぐにそれを止めた。

最近、どこか陰りのあった雪蓮の顔ではない。

以前の…いや、それ以上に今の雪蓮は覇気に満ちている。

何があったのかはわからないが…。

これなら…今の雪蓮ならきつと出来る。

失くしてしまった呉をきつと取り戻せる。

そう思い、私は内心で喜んだ。

まあ、外には出さないように何とか必死に耐えたが…。

「冥琳、た…だいま」

「ああ、雪蓮。おかえり。遅かったな…」

「ごめ〜ん。ちよつと寄り道を、ね？」

「ふん。少し、待たせ過ぎだぞ」

私達はそう言うのと、二人して笑いあう。

そして少しの間、そうしていると、雪蓮が口を開いた。  
その目を真剣なものへと変えて…。

「…冥琳。私はすべてを取り戻すわ…。だから、私に…」

「言わなくてもわかつている。元より、私の知はお前と孫呉のためにあるのだから」

雪蓮の言葉を遮って私はそう言った。

今更、力を貸してくれなんて言葉は必要ない。

だからお前は王らしく堂々としていればいいんだ、そんな想いを込めて…。

「そつか…。それじゃあ冥琳。頼りにしているからね？」

「ああ。私も頼りにしているからな。雪蓮？」

「ふふふ。まつかせなさーい」

私の言葉にそう返してくる雪蓮。

そういえば、こんなやり取りも久しぶりだな…。  
さて。やる気のある雪蓮に早速仕事を与えるか…。

「それでは、まずお前が片付けていない書簡からだな。頑張れよ？」

そう言う、私は雪蓮の前に大量の書簡を見せた。  
積み重なった書簡は山のようになっている。

「え！？　これ、全部…？」

「そう、全部だ」

私がそう言つと、雪蓮は汗をだらだら掻き始め、少しずつ後ろに下がっていく。  
逃げる気だな…。

「……ま、まあ、明日から頑張るってことで…」

そう言つて逃げようとした雪蓮の腕を掴む。

ふふふ。逃がすわけがないだろう？

お前がしないと私がすることになるのだからな…。

「い・ま・か・ら・だ！」

「ふえーん！　冥琳のいけず」

私はそんな雪蓮の声を聞きながら思った。

これからきつと呉を取り戻して見せる。  
それがどんなに困難な道であつても…。

雪蓮と…皆と一緒になら、必ず出来る。

やって見せる。

なあ、そうだろう？  
雪蓮…。

第二十二話。 また会えると信じて…。 (後書き)

第二十二話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

呉からの視点でお送りしました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしております！  
では。

第二十三話 シュガー&スパイス シュガー編（前書き）

更新が遅くなって大変すみません！

一週間ほど原付で行く、ぶらり二人旅をしました。

尻が非常に痛いです…。

ああ。来週から学校なのに…。

まあ、そんなこんなで第二十三話です。

どうぞ！

## 第二十三話 シュガー&スパイス シュガー編

〈SIDE華琳〉

「……以上のことから、孫堅……いえ、その娘の孫策は袁術の下で客将をしているようです」

「……そう。ありがとう」

私は秋蘭の報告を聞いて考え込む。

蓮の飼い主は江東の虎とも言われていた、あの孫堅だった。

まあ、今は床に臥せているみたいだけど……。

「孫策……。英雄の娘にしては大したことないのかしらね……」

「……詳しいことはまだわかりませんが、臣下たちを纏める力はなかったものと思われます」

「………そう」

私がふと漏らした言葉に秋蘭が答える。

孫策……。いずれ私の覇道の前に立つ障害にはならないのかしら……。なら尚更、蓮を返したくないわね……。

「それで、蓮のことは……？」

「……どうやら敵兵の攻撃から孫堅を庇ったようです。元々は孫家の

守り神とも呼ばれていたようですし……」

「なるほど、ね」

守り神、か。

猫には大層な名だけれど、あの子がそう呼ばれていても何も不思議には感じなかった。

寧ろやっぱり、とも思ってしまう。

「あの、華琳様。その蓮には……」

秋蘭が少し心配そうな顔をして私に聞いてきた。  
彼女は言っているのだろう。

蓮に今の孫策達の状況を話すのか、と。

「……今はまだ止めて置きましょう。あの子のことだから話を聞けば、そのまま飛び出して行ってしまうそうだわ」

「はい……。わかりました」

秋蘭も同じ意見だったのだろう。  
私がそう言つと、大きく頷いた。

あの蓮のことだから、あの身体でも無理をして孫策の下に帰つてしまつたろう。

私達にも懐いてはいるが、やはりまだあちらには勝てない。

そのことを少し悔しく思っていると、ふと頭にある考えが浮かんだ。

足の腱を切つてしまえば、自分では帰れないんじゃないかしら……。

いや、それはダメね。

そんなことをすれば、あの子は私を嫌うでしょう。  
それは私の本意ではないわ。

となると、やはり一度返してから奪い取るのが一番か…。  
その時に孫策が英雄になっていれば、尚の事おもしろい。  
私の覇道に綺麗な華を咲かせてくれるだろう。  
まあ報告を聞いた限りでは望み薄だけれども…。

私がそんなことを考えていると、ガチャリと扉が開き、小さな来客が現れた。

その来客…蓮は、すぐさま私の下にやって来て、膝の上に飛び乗ってくる。

これはかなり珍しいことだった。

蓮が自分から甘えてくることは余りない。

秋蘭にはよくして来るらしいが、少なくとも私は蓮が自分から膝に乗って来ることは初めてだった。

「あら、蓮。どうかしたの？」

「にゃん」

そのことをほんの少しだけ嬉しく思いながら私がそう聞くと、蓮が答えてくる。

ちよつとだけ匿って、と。

その言葉に少しだけ疑問を感じていると…。

「蓮――！！ どこだ！ どこにいる――！！」

外から春蘭の大きな声が聞こえてきた。  
なにやら怒っているような声色だ。  
その声はどんどんこちらに近づいてくる。

そして蓮が身体を小さく丸めた時。

「失礼します！ 華琳様！ 蓮の奴めはここに来ませんでしたか！  
？」

怒りの表情をした春蘭が入ってきた。  
そして私に蓮の行方を聞いてくる。

私はちらりと自分の膝に目を向けた。  
机があるので春蘭からは見えないが、勿論、そこには蓮がいた。  
その蓮はこっちに懇願の眼差しで見えてくる。

はぁと内心でため息をつく。私は口を開いた。

「……蓮はここには来てないわよ。それよりも春蘭、少しは静かに  
しなさい。今、秋蘭と大事な話をしているの……」

「……すまない、姉者。今は報告中だ……」

「えっ！？ あ、すみませんでした。華琳様！ それでは私はすぐ  
に退散します！」

そう言う春蘭はそそくさと部屋を出ていった。

もう報告は終わっていたのだから少し可哀想なことをしたわね…。  
秋蘭にも話を合わせさせてしまったし…。

それにしても…。

私はそう考え、ほっと息を吐いている蓮をじろりと見る。

「…蓮。姉者にまた何かしたのか？」

「蓮。正直に言いなさい。許すかどうかはそれで決めるわ」

「にゃ、にゃん！」

私と秋蘭で蓮を問い詰めると、蓮が少し慌てて口を開いた。

なんでも春蘭が楽しみにしていた桃まんを食べてしまったらしい。  
しかも期間限定品で今日までしか作っていない代物だったとか。  
それで一応は謝ったけど、許してくれなくて追い掛けられた、と。

「「はあ」」

私と秋蘭は同時にため息を吐いた。

なんとくだらない理由なのか。

まあ春蘭らしいけれども…。

というか正直、猫が桃まんを食べるなとも言いたい…。

「にゃう」

あゝ、そうなの。

餡子が好きなのね…。

意外な好物を聞いたわ。

「好きなのはわかったが…。蓮、口に餡子が付いているぞ」

秋蘭がそう言うのと蓮の口を布で優しく拭き取った。

確かに良く見てみると白い餡子が付いていたみたいだ。

しかし私にはそのことよりも気になったことがある。

「……秋蘭も蓮の言葉がわかるの？」

「はい。以前はなんとなくでしたが、最近は割とはつきりと…」

「…そう」

知らぬ間に秋蘭が蓮語を理解したようだ。

決して猫語とは言わない。他の猫の言葉は私にも全然わからないものの…。

まあ、それは一旦置いておきましょう。

「それでどうするの？」

「姉者はあの様子だと簡単には許してくれないぞ？」

「にやう…」

私と秋蘭がそう言うのと、耳をへたりと下げて落ち込む蓮。そしてうるうるとした目を私達に向けてくる。

くっ！ これは反則的に可愛いわね…。

しかも何故か力を貸してあげないといけないような気にもなってしまうし…。

私がそう思っていると、隣の秋蘭も何かに耐えているような顔をしていた。

どうやら秋蘭もなにやらダメージを受けたみたいだ。

仕方がないわね…。

もしかしたら、私は少し…いやかなり蓮に甘いのかもしれない。

そう思いながら私は蓮に聞いてみる。

「そう言えば、今から街の視察に行くのだけど、貴方も着いてくる？」

「にゃん？」

蓮はまだ少しうるんだその目を私に向けながら、こてんと頭を傾げる。

その戦闘力は53万を超えていたと私は後世に伝えよう…。

「今日限定のものなのだろう？ 姉者は今から兵の鍛錬で行けませんが、私と華琳様は街に出る。その時にその桃まんを買えばいいだろう」

私は何やら訳のわからないことを考えている間に、秋蘭がまだよくわかっていない蓮に話をする。

…本当に秋蘭は頼りになるわね。完璧といってもいいくらいだわ。鼻からその赤いものさえ出していなかったのならね…。

「にゃん！」

話を理解した蓮は今度は眩しいくらいに嬉しそうな顔をして頷いた。まあ、もう仕事は片付いたのだから少しくらいはいいわよね…。

私はそんなことを考えながら、私たちを急かす蓮を連れて街へと向かうのだった。

〈SIDE 秋蘭〉

私達は街の視察に出るという名目で桃まんを買いに来た。

まあ、今日の仕事はもう片付いていたし問題はなにもない。

ただ、華琳様は蓮には本当に甘いんだなと思って少し笑ってしまっただが…。

さて、今の問題はそこではない。

前は姉者の頭の上に乗っていた蓮だったが、今回は少しだけ違った。

「蓮…。降りる気はないの？」

「にゃーん」

そう、今回の蓮は華琳様の肩に乗っているのだ。

華琳様と肩乗り蓮…。

くっ！ これもなかなかの破壊力だ！

しかし、本当に危なかった。

もし前みたいに頭の上に乗っていたら…。

私は華琳様に醜態を見せてしまうところだっただろう。

「…そう。まあ、そこが良いというのなら別にいいけれど……」

居心地がいいから降りる気はないよ、という蓮に華琳様はどうでもいいようにそう答える。

しかし、私は見逃さなかった。

一瞬だけ華琳様が嬉しそうな顔をしたことを…。

蓮もそれに気付いたのか華琳様の顔に頼ずりをしている。

それを華琳様は少し照れながら受け入れていた。

いかん、鼻から熱い情熱が…！

私は慌てて鼻を押さえた。そして呟く。

「もう噴き出しているじゃないか…」

目的の桃まんを買った後、私達は服屋に寄った。

まあどちらかといえば布地を主に売っている店だ。

なんでも蓮に着せる服を華琳様が自らの手で作るらしい。

今も楽しそうに布地を蓮に合わせながら、考え込んでいる。

その姿は城では中々見れないものだ。

蓮は余り乗り気ではなさそうだが、今度着せ替え人形になるのは確定している。

蓮…。頑張るんだな…。

「にいう…」

ほらほら、そんな風に落ち込むな。

私も少し楽しみにしているんだから…。

「にゃん！」

私がそう笑いながら言うつと蓮は恨めしそうにそう言った。  
ぶるーたす、お前もか！　ってぶるーたすって何なんだ？

そんなこんなで楽しく視察をしていると、人が集まっている所があった。

その中央で何やら騒がしくしている男もいる。

「曹操だ！　曹操を呼べっ！」

その男の必死そうな言葉を聞いて私は思った。  
今日のこの楽しい時間はもう終わってしまっんだな、と…。



第二十三話 シュガー&スパイス シュガー編 (後書き)

第二十三話。終了です！

いかがだったでしょうか？

本当に更新遅れてすみません。

感想返しも今から急いでしますね〜！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

## 第二十四話 シュガー&スパイス スパイス編

前回のあらすじはこうだ…！

ここらで悪さをしている鬼の筆頭…桂花の罠に嵌められた俺は魏の忠犬こと…春蘭と戦うことに…。

あいつの怒りを鎮めるためには伝説のキーアイテム…限定桃まんを手に入れなければならない。

しかし、この身はまだ万全ではなく、街まで一人で行くことは不可能だった…。

そんな時、俺の前に現れた二つの影…。

二人は絶望に打ちひしがれている俺に救いの手を差し伸べてくる！

おおっ！ 猿と雉ではないか…。って、ぐはあ！

ちよっ、いきなり殴らないでも…。あっ、すみません…。猿とか言  
つてすみません…。

ま、まあとにかくこうして新たな仲間を手に入れた俺は、華琳様と  
雉の秋蘭をお供に街へと向かうのだった。

待っているよ！ 桂花<sup>おに</sup>め！ 八チ公<sup>しゅらん</sup>を仲間にしたらすぐに退治に向  
かってやるからな…！

そんな気合いを入れていた俺達の前に、新たな男の影が…！  
果たして奴は敵なのか…味方なのか…。

答えは風だけが、知っている…。

それではまた次回をお楽しみに！

俺はお猫道突っ走るぜ！！

……っで感じてどうか…？

「…いや、もうなんか突っ込むのが面倒だ」

俺がうまく現状を教えようとしたが、どうやら秋蘭はお気に召さな  
いらしい…。

むう。我ながら、中々うまく出来たと思うんだけどなあ。

桃まんと桃太郎をかけてるとことか…。

次回は熱い展開が待ってるよ、的なことか…。

「そもそも、桃太郎というのがよくわからないんだが…。あと現実  
逃避は良くないぞ、蓮」

ちえ、いいじゃん、少しくらいさ…。

それで華琳、あれはどうするの？

俺は目線で華琳にそう聞いた。

今も、男は華琳を呼んでいる。

その手に持つ刃物を小さな女の子に向けながら…。

「私を御指名なのでしょう。なら行くしかないわね」

「しかし、華琳様……。もしも、ということもあります……」

「その時はその時よ。私は逃げも隠れもしないわ」

秋蘭が一応止めようとしたが、華琳がそれを聞くはずもない。まあ、秋蘭もわかっていたみたいだけど……。

それにしても、あの男は何がしたいんだろうね。身なりからすれば、賊なんだろうけど……。

それにしても焦った様子がないし、要求も華琳を呼べと言うものだけ……。

って、ああ、簡単だ……。

ようするにあいつは……。

「私に恨みでもあるんでしょうね……。私は覚えていないけれど……」

華琳が俺の言葉を引き継ぐようにそう言う。

その顔はいつもと変わらない凛々しいものだったが、どこか影があるように俺は見えた。

恨まれるのには慣れているとでもいうような……。疲れたような……。諦めたような……。そんな顔に見えた。

「まあいいわ。早速、行くとしましょうか」

華琳は俺を秋蘭に手渡すと、男の下へと歩き出す。  
俺は秋蘭の手に抱かれながら、その背をただ見つめるのだった…。

華琳が人込みに近づくと、さつと道が開いた。

そこをゆつくりとした足取りで歩き、華琳は男と対面する。  
そして少しの間、男を見つめると口を開く。

「呼んでいたようだったけれど、私に何か用かしら？」

「っ！　へっ、早々に本人のご登場かよ！」

男は一瞬だけ、いきなり現れた華琳に驚いたような顔をしたが…。  
すぐに鋭い目付きになると、華琳にそう言った。

「あら、私の顔は知っているのね？」

「ああ、知ってるさ。忘れたこともない…」

男の苦々しいというより、強い恨みの籠った声や目を向けられても  
華琳は涼しい顔をしている。

それが余計に男をイラつかせているようにも見えた。

「忘れるわけがない…。前にお頭や仲間をみんな……殺した、お前の顔はなっ！」

「…そう。それでこんなことを始めた、というわけね」

納得、といった感じで華琳は頷く。

なるほどね、と俺も思った。そういうことなら華琳のことを恨むだろうな…。

とはいえ、賊の討伐はお仕事だから仕方ないんだけど…。

「そうだ！ 俺はお頭に拾って貰わなったら死んでたんだ…！ 親も助けてくれる者なく、頼れる者もない…。食うものもなければ、住む所もない…。そんな俺にお頭は…飯をくれた、住む所をくれた。…暖かさをくれた！」

「……………」

華琳は男の主張を黙って聞いていた。

男の話は今の世ではよくあることだった。

悲しいことに今は、食えることに困った人たちが賊になることだって珍しいことではないのだから…。

「俺以外の奴らもみんなそうだった…。俺にやっと…やっとできた…家族だったのに…！」

男はその目から涙を零しながら、華琳を今まで以上の目付きで睨みつけた。

しかし、華琳はまったく動じない。

ただ男を静かに見つめているだけだった。

「それを…全部…全部お前が奪って行っただんだ！」

俺は男が手に持つ剣に力を入れたのを感じた。

秋蘭もそれに気付いたのか。  
俺を下に置き、剣に手をかける。

「だから、俺は…お頭の…みんなの仇を討つ！」

男はそう叫び、人質の女の子を手で押しやると…。  
そのまま華琳へと突撃してくる。

「っ！ 華琳様！？」

それに合わせて秋蘭が華琳の前に出ようとするが、他ならぬ華琳に  
手でそれを止められた。

……どうやら華琳が自分の手でケリを付けるらしい。

「うおおおおお！！」

「…いいでしょう。その思いも…その業も…私がすべて背負うわ」

気合いを入れて剣を振るってくる男に華琳はそう言つと、自らの剣  
を抜く。

その時の顔はまさしく王というのに相応しいものだった。

「…だから、安心して逝きなさい…」

男を斬る瞬間。

華琳がそう小さく呟いたのを確かに俺は聞いた。  
そして、表情を少し歪めたのも見てしまった。

しかし、それはほんの一瞬だったので他には誰も気がつかなかっただろう……。

「……秋蘭。後の事をお願い」

「はい、華琳様」

華琳は剣についた血を払うと、秋蘭にいつもの表情でそう言った。さっきの面影はどこにも感じられない。

秋蘭はその言葉に頷くと、駆けつけて来ていた兵に指示を出し始める。

「……蓮。戻るわよ」

「にゃ」

華琳は倒れている男を一瞥すると、俺に声をかけてきた。俺はそれに返事をして華琳の肩に飛び乗り、その場を後にする。

城までの道のりの中で俺は考え込んでいた。

勿論、内容はあの男のこと……ではなく、華琳のことだ。

俺はやっぱりこの子のことが心配だ。

その気持ちは今日の事でより一層、強くなった。

華琳は強い。

きっと普通の人よりは絶対に強い。  
力もそうだけど、何によりも心が強い。

でも、ただそれだけだ…。

普通の人より、少しだけ賢くて、少しだけ強い…ただそれだけだと  
俺は思うんだ。

人はそれを特別だって言うんだろうけど、それでも限界というもの  
がある。

これが本当の悪人なら別にいい。

自分の好き勝手なことをすればいいのだから…。

でも華琳は違う。

この子は善人だ…そして、何より優しい。

だから、何でも自分だけで背負おうとする。

別に背負う必要のないものまで背負おうとしてしまう。

俺は自分の乗る華琳の肩を見る。

俺が乗るだけで隠れてしまつような、こんな小さな肩にどれだけの  
ものが乗っているのか…。

人々の希望や期待、恨み、嫉み…たぶん色んなものが押し掛かつて  
いる。

それは簡単に捨てられるものではないし、華琳も捨てる気はないだ  
ろう。

…彼女には必要なんだと思う。  
彼女を本当の意味で支えてくれるものが…。

前に華琳が、私は霸道を行くと、そう俺に言っていた。  
霸道は茨の道だ。他者を下して一番上に立つ……そんな孤独な道だ。

だからこそ彼女には必要なんだ。

春蘭や秋蘭、桂花でもダメなんだ。

あの子たちはどうしても主と家臣になってしまうから…。

下からじゃなくて…後ろからじゃなくて…。

隣に…傍に…ずっといてくれるものが必要だと俺は思っんだ。

本当は俺がその役目をできれば何も問題はないのだろうけど…。  
残念ながらそれは出来ない。

俺にはもう支えてあげないといけない人たちがいるのだから…。  
呉のみんな  
大切な人たちがいるのだから…。

気がつけば、もう空は真っ赤に染まっていた。  
俺はその空を見上げて心から願う。

願わくば華琳の全部を支えてくれる人が現れますように…。

そんなことを思っていたからか、俺はすっかり忘れてしまっていた。  
今日が何の日なのかということ…。

どうやら対面までの残り時間は、もう少ないらしい……。

第二十四話 シュガー&スパイス スパイス編 (後書き)

第二十四話。終了です！

いかがだったでしょうか？

少し長くなりそうだったのでここでキリました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！  
では。

第二十五話。 気持ち。(前書き)

難産だったぜい…。

くそ…。やっぱり小説って難しい…。

まあ、書くのは楽しいんですけどね！

では本編です！

どうぞ！

## 第二十五話。 気持ち。

困った…。

マジで困った…。

ど、どうすればいいんだああー！！

辺りが暗くなった頃。

俺は部屋の中で一人、絶叫していた。

勿論、外から見たらにやーとしか聞こえないんだろうけどね。

いやしかし、本当に困った…。

朝からなんだかんだでバタバタしてて、頭の中から綺麗さっぱりと消えていた衝撃の事実。

そう、あれだよ…。

今日は満月の日だったんだよ…！

さっき何気なく外を見るまで気がつかないとか、本当に俺は何をやってるんだか…。

まだ刻限までは少し時間があるとはいえ、これはいかん。  
いかんですよおおお！

幸いもう夕食は食べたし、春蘭には桃まんも贈呈して許して貰ったし…。

誰も部屋に来なければ、問題はないんだけど…。

そう上手くいくとは思わない。

希望的観測はしない方がいいと俺の第六感が叫んでるし…。

とはいえ、外をうろつくのはどう考えても危険だ。

この国の奴らはどうも男嫌いな気があるらしいしな…。

特に桂花とか桂花とか桂花とか…。

うん。見つかったら確実に死亡フラグー直線だ…。

まあ、でもここまでお世話になっているのに騙すのもな…。

申し訳ないというか、なんというか。

そんな気も少しはするわけで…。

でも騒がれるのはもっと困るわけで…。

はあゝ。マジでどうするよ？

俺がそんなことをぐだぐだと考えていると、扉の前に人の気配がするのに気がついた。

やばっ！ 時間もうあんましないのに…！

「…蓮。いるの？」

俺の気持ちを余所に、そんな声と共に華琳が部屋へと入ってきた…。  
そして、無言のまま俺を膝の上に乗せる。

「？」

突然の襲来に慌てた俺だったが、それはすぐに収まった。

どうも、華琳の様子がいつもと違うのだ。

いつものどこか威厳のある空気は鳴りを潜めて、今は何も感じられない。

いや、寧ろ弱々しい感じた。

身体の具合でも悪いのかと一瞬思ったが、今日一日、そんな様子はなかったよなと考え直す。

となると気持ちの問題か……。

「にゃん？」

とりあえず、どうかしたのかと俺は聞いてみる。

まあ、十中八九、街であつたことが原因なんだろうけど……。

華琳は何も言わずに俺を撫でているだけだったが、少しの時が経つと徐に口を開いた。

「……蓮。私は間違つたことをしているのかしら……」

その声はとても小さいものだった。

囁くように紡がれたその言葉は、今にも途切れてしまいそうで……。そこに今の華琳の気持ちが籠っているように感じた。

「……………」

でも俺は何も言わなかった。

ただ黙って華琳の言葉を聞いていく。

華琳はそれでも構わないのか、さらに言葉を続けていった。

「……頭ではわかってるわ。納得も……しているつもり……。すべて

の人を救うことなんて出来ないってことは……。みんなで仲良くなんて出来ないってことは……」

たぶん、華琳の頭には昼間の男のことが浮かんでいるのかな。いや、もしかしたら今まで討ってきた賊達のことを浮かんでいるのかもしれない。

「民達の暮らしを乱す賊は討たなくてはならない……。だけど、元は彼らだって救うべき民だった。……皮肉なものよね。彼らは自らの手で、自らと同じ境遇の人を増やしていくのだから……」

勿論、それだけではないのかもしれない。

人を殺すのが好きだっていう、腐った奴らだって中にはいるだろう。でもそんな奴は少数だ。

他の人の大半は、生きるために仕方なかったんだと思う。

さつき華琳の言った通り、すべての人を救うことは出来ない……。

辛いことだけど、それが現実なんだ……。

……でも華琳は本当は救いたかったんだね。討ちたくなかってなかったんだよね。

「そうして始まる負の連鎖……。奪われた人は今度は別の人から奪う。そしてその人もまた別の……。そんな繰り返しばかりが起こつて、結局はどんどんそんな人達が増えていく……。でもその大本は何？ 一番悪いのは一体何なの？」

でもその負の連鎖を止めるためには、討たなくちゃいけなかった……。仕方ないなんて言わないけど、それしか方法がなかったんだ。どこかで止めないと、もっと大きくなってしまっから……。

華琳の独白はさらに続いていく。  
声にも少し熱が入って来ているみたいだ。

「一番悪いのは、人々が賊にならないと生きていけないようにしてしまっただけ……この国でしょう！ 民から税を奪うだけ奪っておいて、救いを求めても助けようとしめない。本当に腐ってる国……。私はこの国が嫌い……大っ嫌いなのだ！」

華琳はそう言った。

それは日頃の華琳なら思っただけでも絶対に言わないことだろう。この国に仕えているものが完全にこの国を批判したのだから……。でも、きつとこれが華琳の原動力というか、根本にあるものなんだと思った。

「力のある者がその力を十分に発揮できるだけの環境を作る、それだけでももつといい国に変わるはず……。それなのに、自分達の利益ばかりを求めた偉い奴らはそうしようとしなかった。だから決めた……。私は覇道を歩む……。他人の血で真っ赤に染まった、この道を歩いて行くと……！」

もしかしたら、初めは華琳も中から変えようと思ったのかもしれない。

でも、それは無理だとわかってしまったんだ。  
そこまでこの国が末期だったんだろう。

こんな歳の女の子が覇道を歩むと決めてしまうような現実。  
そして、実際に華琳にはその道を歩いていく力があつた。  
それはいいことなのか、悪いことなのか……。  
但至少なくとも俺にはそれがすごく悲しいものだと感じた。

「……私は王になるの。そして新しい国を作る……！　もつと……もつと……いい国を……！」

華琳は力を込めてそう言うと、撫でていた手を止めた。  
そして、今度は俺を強く抱きしめてくる。

「でもね……。どうしても思ってしまうわ。今、私にもっと力があつたのなら……。皇帝だったのなら……。そうだったのなら……。今を苦しんでいる人達を切り捨てなくてもいいのにつ！　救ってあげられなかったかもしれないのにつ！」

これが華琳の誰にも見せられない姿だ。  
今は華琳は王じゃない、上司じゃない。  
ただただ自分の力不足を嘆く、普通の一人の女の子だ。

「ごめんなさい……。助けてあげられなくて……。……ごめんなさい……」

謝り続ける華琳。

その瞳からは少し涙も零れているようで、俺の毛を少しずつ濡らしていく。

これは俺がしていいことじゃないのかもしれない。  
いや、多分ダメだろう。

昼間にも考えたけど、俺はいずれここからいなくなるんだから……。

でも、それでも……。

少しの間だけ、誰かが現れるまでの代わりをしてあげてもいいよね

…？

そう思うと、俺の身体が光出した。  
本当に何ともまあ、いいタイミングである。

「華琳は間違ってなんていない…」

俺は華琳を優しく抱きしめると、そう言った。  
少し力を入れれば壊れてしまいそうなくらい小さい身体は少し震えているみたいだ。

「少なくとも俺はそう思ってるよ…」

「えっ…？」

その眩きは声を掛けられたからか。  
それとも俺が人になっているからか。  
多分、両方なんだろう。  
でも、俺はそれを無視して言葉を続けた。

「確かに今もたくさんの人が苦しんでいる、それが現実だ。だけど、  
華琳は華琳にできることを精一杯やってるんだろう？ それならき  
つと間違ってなんてない。だって誰かを救いたいって気持ちに間違  
いなんてないんだから……」

「……………」

華琳は自分で割り切ってるつもりでも、完全にはそうじゃなかったのかもしれないね。

頭と心は違うものなんだし…。

だって本当に割り切っているのなら、そんな顔はしないし、あんなことは言わないはずだ。

「でも、華琳がそれでもって思ってしまうのなら……」

〔SIDE 華琳〕

私は今の状況が理解できなかった。

気が付いたら蓮の部屋に来ていて、蓮を撫でながら愚痴を言っていて、そして何故か泣いていた。

そうしていたら、何時の間にか目の前には男がいて、今度は何故か抱きしめられていて…。

これは一体、どうなっているの？

ただ、私は間違ってたなんていない。

その言葉がすごく嬉しいと感じた。

「確かに今もたくさんの人が苦しんでいる、それが現実だ。だけど、華琳は華琳にできることを精一杯やってるんだろう？ それならきつと間違ってたなんてない。だって誰かを救いたいって気持ちに間違

いなんてないんだから……」

「……………」

私は何も言わない。

いや、言えなかった…。

確かに全力でやってきた。でもそれだけだ。

私は多くの人を救うために多くの願いを踏み躪ってきた人間なのだから…。

「でも、華琳がそれでもって思うのなら……」

私はその言葉に顔を上げると、私の方を優しい目で見つめている男がいた。

白い髪に、赤い目。首には鈴も付いている。

その男…蓮は私に優しい口調でそう言った。

「今は泣こう？ 華琳が思っている、助けてあげられない悔しさも…辛さも…。助けてあげられなかった人達のこと…全部…そう全部を絶対に忘れないために……今は思いっきり泣こう？」

「……………」

私は泣くわけにはいかない…。

弱さを誰かに見せるわけにはいかない…。

そう決めた…。そう決めたはずなのに…。

「いいの…？」

気がついたら、そう言っていた。  
自分でも不思議だった。

でも、蓮といるときはいつもそうなのかもしれない。  
思えば、蓮といるときはいつも霸王の曹 孟徳じゃなくてただ  
の華琳だった。

私がどんなに堅い鎧を身に纏っていても、蓮の前だとそれを脱いで  
しまっている。

……だから、少しくらい素直になってもいいわよね。

「いいよ……。だってここには、華琳と……ただの猫が一匹いるだけ  
なんだからさ……」

私は蓮のその言葉を聞くと、その胸に頭を預けて泣いた。  
それはもう久しぶりに思いつきり泣いた。

蓮はただ、優しく私の頭を撫でているだけだった。  
後から聞いた話だと、涙には人の体温が効くらしい。  
……悔しいけれど、まさにその通りだった。

私は泣き止んだ後も蓮の腕の中にいた。  
ゆっくりとした蓮の心臓の鼓動と温かい体温を感じていると、私の  
瞼が重くなってきた。

「ん？ 眠くなったのか？ ……お休み、華琳」

「…ええ。お休みなさい」

蓮にそう返すと私は静かに瞼を閉じた。

起きたら、蓮に色々と聞き出してやると心に誓いながら……。

## 第二十五話。 気持ち。（後書き）

第二十五話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

第二十六話。 一難去ってまた一難…ぶっちゃけありえない！ (前書き)

今回、少し長めです。

うまく長さが調整出来なかった…。

あつ、あと感想返しに更新したって書きちゃったんですが…。

予約連載にしてました。本当にすみません。

第二十六話　一難去つてまた一難…ぶつちやけありえない！

「……………すう……………すう……………」

「……………はあ……………」

俺は眠っている華琳の頭を撫でながら、小さくため息を吐いた。

やつちまった…。

うん、まさにこの一言に尽きた。

孫家の人間以外に初めてあの姿を見せてしまった。

まだ祭達にも見せたことなかったのに…。

後悔は別にしていないけど、なんか悪いなーなんて思った。

よし、帰ったら、みんなにも見せるか…。

あつ、でも水蓮が文句言いそうだなー。

まっ、いいか。なんとかなるでしょ。

さてと、流石にこのままじゃあ華琳も寝辛いだろうし、寝台に運ぶか…。

俺はそう思ったので、眠っている華琳をひょいと抱き上げた。

まさにその時…。

「華琳様、ここに……」

華琳を探しに来た様子の春蘭が扉を開けた。

そして、華琳を抱えている俺を見て、硬直する。

俺はというと、尋常じゃないくらいの冷や汗が出てくるのを感じていた。

今、一言だけ残すとしたら……俺、この場をうまく凌いだら沢山お魚を食べるんだ、である。

はい。死亡フラグですね、わかります。

「……………」

「……………」

「ん、姉者？ 蓮の部屋にもいらっしやったのか？」

そのまま少しお互い見つめ合っていると、春蘭の横から秋蘭が声をかけて来る。

ああ。フラグの強化ですね、わかります、

さらに秋蘭が声をかけたものだから、春蘭が再起動。

俺を指差して、口を開く。

「く、く、く、……………」

「くりまんじゅう？」

もしくは栗金団？

いや、クレー射撃かもしれん。

俺は首を傾けながら、そんなことを考えた。  
どうやら俺もこの状況に少しテンパっているみたいだ。

「く、曲者だ!! 華琳様を攫おうとする曲者が現れたぞ!!」

ああ、曲者だったのね…。

全然、惜しくなかったわ。

ん、待てよ。

まさか曲者って俺、ですか？

ち、違うよね？ 嘘だよね？ 冗談だよね!？

「何だって!？ き、貴様!!」

春蘭の言葉を聞いて、慌てて部屋を覗く秋蘭。  
そして俺の状況を見ると、すぐに顔を怒りに染めた。

「「華琳様を放せ!!」」

二人揃ってそう言ってくる夏候姉妹。

うん、タイミングもばっちりだ。

さすがに華琳を抱えているからすぐに攻撃してくる様子はないけど、  
これは正直やばい。

「ま、まあ、落ち着いて、落ち着いて」

俺は二人を落ち着かせようと声をかける。

しかし、効果はいまひとつのようだ。

今こそ急所に当たってくれよ、と思った俺を誰が攻められようか、

いや攻められない！ 反語！！

「落ち着いてなどいられるか！！ 貴様！ 一体、どこから入ってきた！？ ここは蓮の部屋だぞ！！」

「そういえば…蓮は…。…っ！ その首輪…。まさか貴様っ！ 蓮をつ！」

あれ？

なんかさらに勘違いしてないかな…。  
秋蘭の怒りが増して来たんだけど…。

首輪を見たら気付くかなと思ったんだけどな。  
寧ろ完全に逆効果みたいだ。

そうこうしているうちに、続々と人の気配がしてくる。  
そう言えば…さっき曲者…って春蘭が叫んだよーな…。

かなり大事になっちまったよね、これって。

ああんもう。マジでどうするよ…。

俺がこの場を何とかする方法を必死に考え込んでいると…。

「はあっ！」

俺の顔面目がけて一本の矢が飛んできた。

それを首を横にずらして、口でナイスキャッチ！！

これが犬でフリスピーだったなら、喜んでくれるんだろうけど…。  
今はそんなことはないようで…。

さらに追加で三本の矢が飛んできた。  
今度は横に飛んでなんとかかわす。

「ちよつ！？ マジですか！？」

矢じりも尖ってるし、当たったら死んでしまいますよ！？

あゝ、殺す気ですか。そうですか…。

てか、下手したら華琳に当たるからね！ いや、割とマジで…。

俺は抱えていた華琳を背中に背負い直す。

よし！ これで少しは動きやすくなったはずだ。

「くっ！ 姉者！！」

「応っ！！」

秋蘭に気を取られている間に、接近してきた春蘭が持っていた大剣を一閃。

見事、俺の髪が数本お亡くなりになりました…。

しかも、間髪入れずに矢も飛んでくるし…。

もう死ねる…。

うん、これはもうあれだ…。

逃げよう！ もうそれしかないっすよね！

「あゝ、うん。あばよ、とつつああん！」

俺はそう言い残すと、窓を破って外に出た。  
とにかく人のいない所にダッシュです！

走って！ 銀河の果てまで！

逃げるのに集中していた俺はすっかり忘れていた。

俺が華琳を背負ったままだということを…。

本当にすっかり忘れていたんだ…。

走って中庭まで来ると、俺は嫌な予感を感じて木陰に退避した。  
そして呼吸を止めて、辺りを深く観察する。

すると…。

「チッ！ 落とし穴には引つ掛つてないわね！ 親衛隊は五人一組で辺りを搜索しなさい！ もう城門は固めたから、外には出ていないわ。各員死ぬ気で探しなさい！！」

「……………はいつ！！……………」

桂花が兵達を引き連れてやってきた。

そして、兵達にテキパキと指示を飛ばしていく。

流石、軍師殿。でも今は全然うれしくないな…。

てか落とし穴とか何時の間に掘ったんでしょうか？

兵達がいなくなったので、桂花に接触を試みようとしたが…。

どうも様子がおかしい。

小声で何か呟いているし…。

「男のくせに華琳様に触るなんて……見つけたら殺す！ 絶対に殺す！！」

うわーお。気になったので聞こえる位置に移動したらこの結果ですよ。

声をかけて、なんとかして貰おうと思ったんだけど…。これは無理そうだ…。

「見〜つ〜け〜た〜ぞ〜！！」

俺がこそこそと退散しようとした時、後ろから声をかけられた…。悪鬼や悪鬼がおる！！

「げえっ！ 春蘭！！」

「ほう。華琳様を攫っただけでなく、私の真名をも言うか…。すぐさま死ねっ！！」

「……もう嫌…！！」

俺は剣を振りまわしてくる春蘭から脱兎のごとく逃げ出した。この時の逃げっぷりは我ながら天晴れだったと思う。

その後も秋蘭の怒りの矢とか、必死の形相をした親衛隊の奴らとか、桂花の姑息な罾とか色々なものから俺は逃げた。

逃走中なんか目じゃねえよ。金とかじゃなくて命が掛かってるから…。

てか、どっちゃかっていうとリアル鬼ごっこだからね、これっ！！そんなわけで全力で走ったりした俺は、世界新記録とかギネスとかそんなちやちなもんを全部ぶち破った…。

「はあ、はあ、はあ。……撒いたか？」

俺は何とか城壁の上で一息ついた。

動いている灯りが見えることからまだまだ搜索は続いているようだ。もう勘弁してくれよ、俺の怪我ってまだ治ってないんだよ？

「蓮、それは失敗するときの言葉よ？」

「ああ。確かにそうかも……。って、華琳さん！？なんで……」

突然声をかけられて驚いた俺は、驚いて後ろを振り向く。そこには……というかなんで俺の背中には華琳の姿が……？

「……貴方が連れてきたのでしょうか？」

少し、不服そうにそう言って来る華琳。俺が連れてきた……？

「……あつ！そうだった……。だからみんなあんなに必死なのか……」

自分の馬鹿さ加減に少し、頭が痛くなった。そりゃ、必死になるわな。

自分達の主を攫われてんだもんない。

「んで、いつから起きていたんだ？」

「んー、春蘭が真名を呼ばれて、怒っていたところ辺りかしら」

この野郎…いや女郎…。

起きてるのならすぐに誤解を解いてくれよ…。

俺、結構死にかけてただけ…。

「殆ど、初めからじゃないか…。さては楽しんでたな？」

「まあね。それで誘拐犯さん？ 私をどこに連れ去るつもりなのかしら？」

俺の睨みを軽くかわして、まあねと普通に言ってしまう華琳さん。やっぱり大物でした。色んな意味で…。

今もニヤニヤと笑いながら、変なこと言ってくるし…。

「そうだね、誰も追って来ない所までかな？ 一緒に一緒にくれますか、お嬢さん？」

ちょっと悔しかったので、俺は少し茶化したように手を差出しながら、そう言ってみる。

しかし、華琳は平然と俺の手を取った。

むむむ。ここは少し照れるとかしてくれてもいいんじゃないかな。

「それは嬉しいお誘いだけど、そんな場所はないわよ？ あの子たちは地の果てまでも追って来るから」

華琳がそう言いながら、目線を外に向けると、春蘭の怒声が聞こえてくる。

うわー。まだ探してるし…。

怒られてる兵のみなさん。大変ご愁傷様です！

「…みたいだね。なら愛の逃避行はこの辺でおしまい、かな」

まあ、俺はもう走るの懲り懲りだけどね。  
身体中がまた痛くなってきたし…。

「そうしましょう。じゃあ蓮、次は楽しい楽しい貴方の尋問のお時間よ」

「え、っ!？」

「当然でしょ？ 乙女の肌に触れたのだから、このくらいで済んでありがたいと思いなさい」

それはそうですけど…。

なんか納得がいきません！

俺ばかり損している気がするのです！

「…そういえば、華琳はあんまし驚いていないのな。結構、みんな初めは驚くの…」

雪蓮とかも初めは半信半疑だったのに…。

ああでも、蓮華と小蓮はすごいねえ〜だったっけ？

その時の事を思い出すと何か少し笑えてきた。

「…何をニヤニヤしているのよ、気持ち悪いわね…」

「少し思い出し笑いしてただけなのに…ひでえ言われようだ」

「まあいいわ。私も驚いたわよ？ でも貴方は普通の猫ではないと思っていたし、それに蓮の事でしょう？ 深く考えてもどうせわからないもの。それなら直接、聞き出せばいいってね」

そう言いながら黒く笑う華琳。

これはあれだ…。

鳴かぬなら鳴かせてみせようって奴だ。

まあ、殺してしまえじゃないだけマシなのかな…。

「…わかりましたよ。こうなったら出血大サービスだ。じゃんじゃん質問していいよ」

「さーびす、というのは良くわからないけど…まあいいわ。それじゃ、まずは貴方は何者なのかしら？」

こうして俺は華琳の質問に一つ一つ答えていくことになった。

俺が『天』から来たこと。

もう何百年も生きていること。

満月の夜だけ人間になること。

俺が言える範囲のことは全て話した。

「んで、水蓮を攻撃から庇って谷底に真っ逆さまに落ちて…。」

「…私に拾われた、というわけね。なんというか波乱万丈ね」

俺の話全部聞いた、華琳の感想はそれだった。

それはそうかもしれない。

『天』に居る時はこんな風になるなんて考えてもいなかったし…。

「まあね、でも楽しいよ。確かに沢山の別れもあったし、悲しいこともあったけれど…それ以上に沢山の良い出会いがあったし、嬉しいことや楽しいことがあった。…だから俺はすごく幸せだって思ってる」

これは俺の本音だ。

俺はこの世界に堕ちてきて良かったって心からそう思っている。だって毎日がすごく楽しいから…。あっちにいた頃よりもずっと…。

「……じゃあ私との出会いも良かったと思っっているの?」

華琳は少し顔を伏せると、小さな声で俺にそう聞いてきた。何を言ってるんだろうかね、この子は…。そんなの……。

「当然だろ? 少し意地っぱりで、意地悪だけど…。こんなに優しく、可愛い女の子に会えたんだ。すごく嬉しいし、良かったって思ってるよ」

「そう…。ま、まあ当然ね。私に深く感謝すればいいわ」

華琳は少しだけ顔を赤くすると、そっぽを向きながらそう言ってきた。

何か照れている華琳は初めて見たかも…。

うん。これは中々いいものだ。

秋蘭が見たらまた情熱が吹き出してしまふな、これは…。

「ははは。感謝してるよ…。心の底から、ね」

その後も、他愛もないことを話していると、夜が明けた。  
俺は勿論、猫の姿に戻ったので、部屋に帰ることになったのだけど……。

「にゃあ」

「ふふふ。ダメよ、怪我が悪化したのだから我慢しなさい」

何故か華琳に抱っこされながら移動することに……。  
まあ、確かに怪我はひどくなっちゃったけどさ。

「あつ、どうせだから今日は一緒に寝ましようか？」

「にゃー！」

誰が寝るかっ！

というか俺は一応、人間ですよ！？

「でも、今はただの可愛い猫じゃない」

何でみんな、人の姿を見ても反応がこうなの？

お兄さん、泣いちゃうよー。

こうして俺は華琳に連行されましたとさ。

ちゃんちゃん

一方、その頃。

「華琳様ー！！」

「くそっ！ まだ見つからないのか！？」

「殺す殺す殺す殺す………」

城内では結構、大変なことになっていたり…。それは華琳が起きてくるまで続いたとか続かなかったとか…。

第二十六話。 一難去つてまた一難…ぶつちやけありえない！ (後書き)

第二十六話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

第二十七話 流星が降る時に…。(前書き)

いかん。

最近…一話が長くなってる。

最初の頃の二倍になってる…。

## 第二十七話 流星が降る時に…。

ども。蓮君です！

あれから数か月、経ちました…。

時間を飛ばすなって？ いや、そんなこと言われても…。

えっ…？

みんな探してたけど、大丈夫だったのかって？

そこはほら、あれだよ、あれ。

全部、華琳がなんとかしてくれました…。

うん、凄いよね。

あの騒ぎを治めるなんて…。

誘拐犯（笑）は警備の厳しさから途中で諦めて、逃亡したというかなり無茶な話だったけど…。

華琳が言えばみんな一発で信じてくれました。

流石、華琳様。黒いものでも白いものになるとは…。恐るべしですね。

まあ、秋蘭とかは俺の事もすごく心配してくれていたみたいで、俺の姿を見た時にはほっと息を吐いていました。本当に色々ごめんね…。

でも、桂花？

俺のヒゲを引っ張りながら、愚痴を言うのは止めて…。

今度見つけたら、絶対に死なすとか言わないで…。

俺がその張本人だからね…。

さてさて、時間も経てば怪我もやっと治るわけで…。

なんとか完治した俺はそろそろ呉に帰ろっかな　って思っているところですよ。

ちなみに方法はというと、なんと華琳が雪蓮に手紙を書いてくれるそうです。

まあ、書く内容はまったく知らないんだけどね…。

その代わりの条件として、迎えに来るまでの間はずっと傍にいなさ　いって言われたんだけど…。

そんなことでいいのかな…。

まあ、俺に出来ることなんて殆どないわけなんだけどさ…。

猫の手も借りた　いって言うけど、実際問題、猫の手は何もできないわけ…。

でも華琳には恩義があるわけで…。正直、困っています。

「…というわけで、華琳。俺に何かして欲しいことはないか？」

「何がというわけなのよ…。そうね…。」

こう言う時は直接、聞くのが一番ということ、俺は人に戻っている時に聞いてみることにしました。

あつ、ちなみに今は華琳の部屋に匿って貰っています。

…。また騒ぎになるのは勘弁だからね。

華琳は少しの間考え込んでいたが、すぐに顔を上げた。

「別にないわね…。まあ、貴方は猫なのだから愛玩動物らしく、私達に愛でられていなさい」

「…いや、まあ。それでいいのならそうするけどさ…」

ないんかいっ！ 俺は心の中で突っ込みを入れた。ううう。俺に出来ることはないのね…。

…これは水蓮達になんか頼むしかないのかな。自分のケツも自分で拭けないとは…。何とも情けない。

「まあ、その話は置いておきましょう。ところで蓮。貴方は最近、都で流れてきている噂を聞いているかしら？」

「噂、ね…。いや、知らないけど…」

華琳が話を変えて来たので、俺もそれに乗っかる。

噂、噂、噂…。

一応、自分でも考えてみるが、特に思いつくものはなかった。

そんな俺の反応を見た華琳は、にやりとした笑みを向けると口を開く。

「もうすぐ『天の御遣い』というものが現れるそうよ。何でも、この国に平和をもたらしてくれるとか…」

「『天の御遣い』ねえ…」

それはまた何というか。凄い噂が出て来たもんだ…。

でも仕方がないのかもしれないと思った。

そんな噂が広まってしまふほど、世が乱れているのだから…。

「それで同じ『天』から来たという蓮はこの噂についてどう思うのかしら？」

華琳が楽しそうに、そう聞いてくる。

俺がいなければ、気にも留めなただの噂だったのだろう。

でも俺が『天』から来たと話したから、少しは興味を持った訳というだ。

「さあてね。詳しくはわからないけど…。俺と同じ所から来るとは考えにくいかな…」

俺と同じ所から来る場合なら、それはある意味、島流しみたいなものはずだし…。

この国を平和に導くなんてできるとは思えない。となると、別の所から来るはずなんだけど…。

「そうなの？」

「ああ、多分だけど…」

うーん。どこから来るのかね…。

なんか超能力とか魔法とか使えるのかな…。

それなら久しぶりに見てみたいかも…。

「あら、それじゃあ猫が現れるわけではないのね…」

「…お前、俺の母国を猫の国か何かと勘違いしているだろう」

少しおどけたように言ってくる華琳にじとじとした目を向ける。

しかし、効果は余りないようだ。

「ふふふ、冗談よ。それはともかくとして…。最近、賊が活発化して来ているわ。…規模もより大きなものになって来ているし…」

華琳は笑みを浮かべていた顔を真面目なものに切り替えると、賊達のことについて話し始めた。

城内で話にもなっていたけれど、どうも賊達が増えてきているみたいだ。

一つ一つの人数も前より、多くなって来ているらしいし…。

「…そつか。なら一度、大反乱が起こるかもな…」

「…そうね。…起こってしまうんでしょうね」

俺の意見に同意すると華琳は少し暗い顔をした。

反乱が起これば華琳の覇道への大きな足掛かりにはなるだろう。今までのような一歩ではなく、多分、飛躍の時になる。

でもそれは…。

「華琳…」

「大丈夫よ。わかっているわ…」

俺が声をかけると、そう返してくる華琳。

はあ、全然大丈夫そうには見ないんだけどな…。

…本当に困った奴だ。

「…華琳は華琳の目指す道を進めばいい、脇目も振らずにただ真っ直ぐにさ。…きっとそれがみんなのためになるのだから…ね？」

「……………うん」

華琳は一度頷くと、そつと俺の手を握ってきた。  
俺は一瞬だけ驚いたが、少し苦笑すると、その小さな手を握り返してやるのだった。

物語は動きだす…。

時計の針は元に戻すことは誰にも出来ない。

遂に本格的な乱世が幕を開ける…。  
切っ掛けは、一筋の流星からだった。

呉…。

「策殿っ！ 空に流星が降っていますぞ！」

賊の討伐の帰り道。

考え事をしていると、隣にいた祭が声をかけてくる。

「流星…？ あら本当ね…」

祭の言葉に従ってそれを見てみると…。

昼間なのにはつきりと輝く流星が見えた。

いつもだったら、気分も高揚したのかもしれないけれど…。

今の私はそうはならなかった。

「雪蓮…。いつものお前らしくないな。まだあの手紙のことを気にしているのか？」

「…少しね。でも曹操の言うことは間違っていないわ…。今の私は力不足なもの」

祭とは逆の位置にいた冥琳が私を気遣うように声をかけてくる。

そして、冥琳の指摘は大当たりだった。

先日、私達の下に届いた一通の手紙。

差出人は陳留の刺史、曹操。

内容は蓮のことだった。

蓮は曹操が保護したらしく、今は怪我も治って来て元気らしい。それを聞いた時、私はすごく喜んだ。すぐに迎えに行こうとも思っ

た。

でも…。次の文章で私の喜びは消えた。

私は蓮を貴方達の所に返すつもりはない。

その一文を見た時、私は怒りを覚えた。

何を言っているんだ、と。

でもそれも続きを見るまでのことだった。

蓮は英雄の隣にいることこそが相応しい。

唯の英雄の娘には過ぎた存在だ。

でも、蓮は貴方達の所に帰りたいと言っている。だから私に証明してほしい。

孫 伯符は唯の孫 文台の娘ではなく、一人の英雄であるということとを…。

それを証明して貰えるのなら、私は曹 孟徳の名において蓮を必ず貴方達にお返しすることを誓う。

私の曹操への怒りはすぐに収まった。

そして、今度は自分への不甲斐なさとしりやが湧き上がってきた。

今の私に堂々と蓮を迎えに行ける資格がないことがすごく悔しかった。

「はあゝ」

私は大きいため息をついた。

あれから何日も経っているけれど、そのことが未だに頭から離れない。

「策殿…」

「雪蓮…」

祭と冥琳が心配そうな顔を私に向けてくる。  
それを見て、私は思った。

そうだ、私は一人じゃないのよね…。

傍には頼りになる仲間…家族がいるじゃない。

そう思ったら、何だか心が軽くなったような気がした。

前に気合いを入れたはずなのに…また、私は何をやっているんだか…。

今はクヨクヨしている場合じゃないのにね。

だから、まずは…。

「二人とも、もう大丈夫よ」

私は二人に笑顔を向ける。

言われっぱなしじゃあ、孫家の女の名が廃るわ。

上等よ！ お望み通り英雄になってあげようじゃない！

「私は曹操に証明するわ！ 私が蓮に相応しい者だってことをっ！

この身の全力をもってね！」

「ふっ、そうか。ならば私も全力でそれに応えんとするか…。蓮を取り戻したいしな」

「ありがと冥琳。祭もよろしくね」

「策殿…。勿論じゃっ!!」

始めよう。

蓮を…呉を…私達の全部を取り戻すための私達の戦いを…。  
始めていこう…。

魏…。

「華琳様っ!!」

「どうしたの、春蘭？」

「にゃうん？」

春蘭の大声を聞いて、私は蓮の毛繕いをしていたその手を止めた。  
蓮も不思議そうな顔を春蘭に向けている。

「空ですっ！ 空を見てください!!」

「空…？」

「にゃお？」

春蘭が指を差す方を蓮と一緒に私も見てみる。  
真つ青な空に一筋の流星がゆっくりと落ちていた。

「…昼間に流れ星…。不吉ね…」

私はその流れ星を見て、そう呟いた。  
でも蓮はそうは思わなかったのか。

じつとただ流星を見つめているだけだった。  
蓮の様子だと不吉なものではないのかしら…。

「…あっちの方角だと……幽州、ですかね」

「ええ。確か五台山の方角ね…」

流星が落ちた方角を見て春蘭がそう言うてくる。  
私の予想でも幽州に落ちたと思った。それはおそらく正しいだろう。  
しかし何故、流星が…。

私が考え込んでいると、蓮が小さくため息を吐いた。

「蓮？ どうしたの…？」

「にゃん」

それが気になった私は蓮に聞いてみるが…。  
蓮は何でもないと返して来る。しかし、私は見逃さなかった。  
蓮がその後にもう一度ため息を吐いたのを…。

まあ、少し気になったけれど、今は良しとしましょう。  
さて、孫策はどうしているかしら…。

あの手紙には私の本心を書いた。  
ただ袁術の下で燻っているような人物ならば…少しの間でも蓮を渡したくはない。

しかし、孫策が真の英雄ならば…蓮を預けて置いてもいい。  
そういう意味で書いたのだけれど…伝わったかしら…。

できれば、孫策が英雄であってほしいわね。

そして英雄同士、それに相応しい場で雌雄を決して、私は堂々と蓮を勝ち取る。

ふふふ。こんなに血の滾ることはないわ。

だから始めましょう。

私の霸道のための戦いを…。

始めていきましょう…。

蜀…。

「お待ち下さい、桃香様。お一人で先行されるのは危険です」

「そうなのだ。こんなお日様一杯のお昼に、流星が落ちてくるなんて、どう考えてもおかしいのだ」

「大丈夫だよ！」

私は愛紗ちゃんと鈴々ちゃんにそう返した。

二人ともごめんね…。

心配してくれているのはわかってはいるんだけど…。

今は急ぎたいんだ。

私達は三人で各地で人助けをしながら旅をして来た。

勿論、初めから三人だったわけじゃない。

初めは私一人だった。

今のこの国はすごく乱れていて、そのせいで悲しい思いをしている人が沢山いる。

だから、私は旅に出たんだ。

私にも何か出来ることがあるかもしれないから…。

でも、現実はやっぱり厳しくて、助けてあげられない人も沢山いた。私に力が足らなかったから…。

でもそんな時に出会ったのが愛紗ちゃんと鈴々ちゃん。

二人ともすごく強くて、村の人達を苦しめていた賊の人達を追い払ってくれた。

村の人達がお礼を言っている時も、二人は当然の事だと言って笑っていた。

だからなのかな…。私は二人に私の夢を話したんだ。

みんなが笑って暮らせる国にしたい。

多分、普通の人なら笑っちゃうような夢だけど…二人は笑わなかつ

た。

それどころか、力を貸すとも言ってくれたんだ。  
それがすごく嬉しくて、少し泣いてしまったのは……今思うと少し  
恥ずかしいかな。

私は、その時に思ったんだ。

一人じゃ無理でもみんなで力を合わせれば、私の夢も叶うかもしれ  
ないって…。

だからそれから三人で一緒に頑張ってきた。

でも、やっぱり三人でも無理な時があった。

一人の時よりは沢山の人を助けられたけど…それでも限界があった。

そんな時に噂を聞いたんだ。

『天の御遣い』の噂を…。

御遣い様がどんな人なのかはわからないけど…。

話をすれば、私達に力を貸してくれるかもしれない。

勿論、断られるかもしれないけど…。

それでも…。

そんな思いで、私は流星が落ちた所に走って向かっていた。

早く、早く、早く。

私がそう思っていると…。

一人の男の人が辺りを倒れていた。

光が反射してキラキラと光っている服を着ている男の人…。

あの人が御遣い様だ。

私はそう思っ、走る速度を上げた…。

まずは声をかけることから…。

話を聞いて貰うことから…。

始めるんだ。

ここから、私達の夢のためへの戦いを…。  
始めていくんだ。

魏、呉、蜀。

ここに三国の主役は揃った…。

鍵になるのは二つの『天』。

物語はどのように動き、巡っていくのか…。  
それは誰にもわからない…。

そう…誰にも…。

「にゃん？」

多分…。

第二十七話　流星が降る時に…。（後書き）

オープニング、スタート！！

みたいな感じにしたかったのに…。

うわゝ、微妙かも……。

ま、まあとりあえず、第二十七話。終了です！

いかがだったでしょうか？

一刀君は蜀に堕ちたんだぜ？

あんなに前振りあったのに…堕ちちまったんだぜ？

でも、一応最初から決めていたので……みなさん、許して下さい！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0746w/>

---

我が家のお猫様！

2011年10月6日15時28分発行